

演劇の初夏 作…至堂文斗

序章 木本剛志からの手紙

演劇部の皆、元気にしてる？ 俺の方は、あれから色々あったけど、割と元気だよ。

俺の起こしたあの事件が、翔斗のおかげで全部終わってから、もう一ヶ月が経つなんて。月日が過ぎるのは早いなと、ホント、しみじみ感じる。

さて。こうして俺が、皆に手紙を書いた理由は二つあるんだ。一つは勿論、皆の近況が知リたかったから。ちゃんと文化祭に向けた準備が出来てるかとか、他にも色々気になるしさ。初めはだらけてばかりのクラブだったけど、演劇をやるってことで一致団結したんだし、頑張ってもらいたいな。

というわけで、これを読み終わったら是非、それぞれ手紙を送ってください。どんなことを書いてくれてもいいから。

——それで、もう一つが俺にとって重要なんだけど。俺はどうか、あの事件を俺がどうして起こすことになってしまったのか、木本剛志という男が、どういう人間だったのかを、皆に知っておいてほしいと思ったんだよ。そんな暗い話なんて読みたくない、とか思うかもしれないけれど、やっぱ俺にとつて、皆は初めての親友だから、仲間だから。あの事件だけじゃなくて、それより前に起きたことも全て、知ってほしいんだ。俺の全て。

長々と悪いけど、これから綴る、俺の懺悔のようなものを、どうか皆で読んでみてほしい。

…俺は昔から、口下手で人見知り、友達の出来ない子供だった。そういう性格の子供は、決まってクラスを牛耳ってるような奴にいいように扱われるものなんだと自分でも分かっていたけれど、それまでに形成された性質は、すぐには変えられないものだ。その気の弱さも相まって、俺は結局、自分は弱い立場の人間なんだと認めつつも、内向的な性格を変えることが出来ないままだった。

それでも何とか俺は、高校に入るまでは大したトラブルもなく、静かで平穏な日々を過ごしていたんだ。まあ、それはつまり、誰からも気にも留められていなかっただけとも言えるんだけどさ。

そんな俺が、あの男——淵江大吾と出会ってしまったのは、一昨年の春、入学式のことだった。如何に引ッ込み思案とは言え、あの時は俺も、新しい学校生活に少しばかりの期待はしていたんだ。だけど、俺のそんな期待はことごとく、淵江の登場によって打ち碎かれることになってしまった。

淵江大吾。入学当初から彼は、生徒達の噂になっていた。何でも、中学時代から彼はその凶暴性を発揮していたらしく、そんな男と俺は同じクラスになってしまった。それはつまり、俺が昔から恐れていた事態に直面した、ということだった。強者と弱者の関係。一歩間違えれば、否が応でもその関係に引きずり込まれてしまう…そんな事態に。

あいつのせいかな、俺のいたクラスは少しばかり、空気が張り詰めているというか、そういった緊張感がずっと漂っていた。あいつがいるときはそれが殊更強く感じられ、あいつが教室から出て行けばふうつと和らぐ。生徒だけでなく先生までもがそれを感じ取っているようで、つまり誰もが彼を警戒し、機嫌を損ねないようにしていたのだと思う。実際、

淵江は小さなことでも腹を立て、一旦行動を起こすと先生一人では対処出来ない時もあった。校舎のガラスを割ったことは一度や二度では無かったし、授業中でも好き勝手に教室を出入りする有様だった。

そして、そういった空気の中、俺は気の弱い性格故に口を開くことさえ怖くなって、友人どころか、言葉を交わす生徒すら出来ずにいたんだ。思えば、結局俺はあのクラスで、いや、あの学年では一人として友人を作れなかったんだな。

そんな状態で季節は流れ、九月になった。九月といえば、文化祭。皆が今一生懸命取り組んでいる演劇を発表する日だ。俺も一つ年が違ったら、皆と別れることなく、あんな事件を起こすことなく、楽しく演劇が出来ていたのかな。そんなことも思ってみたり。……ともかく、一昨年の九月、文化祭に向けた打ち合わせがホームルームでされた時、俺は始めて淵江大吾と話すことになったんだ。それまでは上手く避け続けていたけれど、それだけは、不可避のことだった。

クラスに溶け込めない俺、そして淵江。性格は対極的でも、それだけは一致していた。だから、俺とあいつだけが最後まで、文化祭の準備で何を担当するかが決まらず、残ってしまったというわけだ。それは取りも直さず、俺と淵江が一緒になって何かをしなくてはならないということだった。それがはつきり決まった瞬間、言葉では言い表せない程の戦慄が走ったのを、俺は今でも覚えてる。

あいつは、人の強さや弱さを知ることによって長けていた。だから、俺がどんな種類の人間なのかをすぐに見抜いてしまった。そしてあいつは暴力的な人間だったから、この先俺がどういう運命を辿るのか、その時点でもう、俺には想像がついた。……これから俺は、支配される。その光景が、あの時嫌にリアルに想起された。

——それからのことは、輪郭だけを書くことにしよう。陰湿な嫌がらせに、暴力や拘束。テレビや新聞で、何かことが起こってから報道されるような、典型的ないじめの手法。それが長い間俺を苦しめ続けて、俺の心はだんだんと壊れていった。誰からも手を差し伸べられることもないし、俺も誰にも手を伸ばすことができなくて、ずっとずっと、ただ痛ましい日々が続いた。季節が冬になって、そして春になって。再び桜を見る頃には、俺の心は一年前のそれとはまるで違っていた。あの時の希望は最早微塵もなくて、あるのはただ、底なしの絶望だけだった。

長く続いたその日々が終わりを迎えたのは、六月のこと。あの日何が起こったかはもう、皆知っていると思う。あの、松の木の事件をきっかけにして、俺と淵江との間で起きていたいじめは表面化した。そして、俺は学校を去ることになり、淵江はしばらくの間停学処分となった。あいつを退学に出来なかった理由には、あいつの両親の力があるらしい。力というのは多分、社会的なものも直接的なものも含めての意味なんだろうと俺は解釈しているけど、本当のところはどうなのかな。まあ、今更知ろうとは思っていないけどさ。

両親と言えば、忘れもしない、いじめが発覚して学校に呼び出された時の、俺の両親の顔。病弱な母は咳き込み、喘ぎながら俺を抱きしめて、父親は青白い顔で先生の話聞いていて……。傷つくのが俺だけならまだしも、両親まであんな風に肩を震わせ、怒り、悲しむのは堪えられなかった。もう二度と、こんな光景は目にしたくないと思った。

それで、俺の高校生活は終わったんだ。……一度は。両親も俺に、もう一度頑張ってみないかとは聞かなかった。学校や淵江に対して、何の訴えも起こさなかったし。一家揃って

気が弱いんだなと感じたけれど、それが俺の家族のいい所なんだと、俺自身は思う。単純な考えだけど、世界中の人達が皆、そういう気弱さがある程度持っていてくれたら、もうちょっと世界は平和なのかなあとか、思ってみたりもするんだよ。実際、世の中そう甘くはないけれど。

まあ、それはともかく、この時本当に俺の高校生活が終わってれば、或いは淵江大吾が停学でなく退学になってでもいれば。俺はあの事件を起こすことはなかったのだろう。そしてまた、皆に出会うこともなかったのだろう。でも、運命ってのはやっぱり皮肉なもので、俺に初めての友人を与えてくれる代わりに、俺を淵江と再び出会わせただ。その運命ってのが、あの人の来訪だった。

皆もあの時間いたように、あの人は俺にもう一度チャンスを与えてくれたんだ。とても非現実的な方法だけど、それでもあの人が精一杯考え、練り上げてくれた方法。出来ることなら普通の生活がしたいけれど、今の自分の性格ではそれが出来ない。そんな俺の劣等感を消し去れるような、それは方法で、俺はその計画の突飛さや、ある種の面白さにも魅せられて、もう一度頑張ってみようかと思えるようになっていったんだ。

あの人の提案に、前向きに考えてみると答えた俺の、その背中を押したのは父親だった。父親の一言が、俺をまた光耀高校に向かわせる力となった。

「まだ、希望は残されてる。だから、精一杯努力してみなさい。大丈夫。今度は絶対、誰かと笑える筈だから」

誰かと笑える。俺は、そんな当たり前のことを、ずっと望んでいたから。

——こうして俺は、また光耀高校に足を踏み入れることになった。以前の自分ではなく、まっさらな、新しい人間として。俺は自分に新しい名前と性格を与え、それを演じることにした。木本剛志ではない、別の人間。そう、翔斗があの時言ったように、俺は皆が演劇をやろうと決めるよりもずっと前から、一人だけ演技を始めていたんだよ。木本剛志の時には考えられなかった、皆と笑いあえた一人の男の役を。

……俺が皆の前に現れた経緯は説明し終わったから、ここからは、事件の話を書こうと思う。翔斗が暴いてくれた、二つの事件。それを何故俺が起こしたか、その後何故一貫性のない行動をとったのか。——まあ、それについても翔斗は看破してみせてくれたわけだけども。

事件の引き金となったのはそう、淵江大吾が俺の存在に気付いた時。そして、春子ちゃんに目をつけた時。俺は自分を守る為に、そして何より、春子ちゃんを守る為に、淵江大吾を殺す決意をした。淵江のことを良く知る俺だからこそ、もうあいつを、絶対に生かしておくわけにはいかないとその時、思い至ったんだ。

だから——……

一章 初夏的一幕

「おはよう、翔斗くん」

階段を上がって四階までやってきた時、泉^{いずみ}春子の、陽気な声が聞こえた。俺は彼女の声がした方へ振り返り、片手を挙げて挨拶を返す。

「ああ、おはよう。何だ、もうチャイム鳴るぞ」

時刻は八時二十八分。まさに後二分で、チャイムが鳴るところだった。他の生徒は寝ぼけ眼を擦りながら、或いは寝癖で跳ねた髪を手で撫で付けながら、各々の教室へ入っていく。

「翔斗くん、忘れてないかと思ってね。今日の代表者会議、放課後三時四十分からだよ」

「そんなことか。忘れてるわけないだろ、大丈夫さ」

「そっか。翔斗くんってそそっかしいから……覚えてるならいいの、じゃあまたね」

俺のどこがそそっかしいんだよと反論しようとしたが、時間もないし止めておいた。「また」とだけ返し、俺は自分の教室へ向かう。

平成二十二年五月、初夏の朝。気温は既に二十五度を超える日もあり、天気予報では夏日という言葉が頻出している。二年生に上がって早一ヵ月半。この年になると、時間が早く過ぎていくような感じがする。

ここ、都立光耀高校は、創立六十年以上の歴史ある学校で、都立なので授業料が安く、有名大学に進学する生徒も多い。そのため毎年倍率は三倍近くになり、名門校、という肩書きが定着しつつある。

更に俺が受験を申し込んだ年は最悪で、学校側が一クラス分、定員を削減した年だった。理由は定かではないが、少子化などが影響しているのかもしれない。周辺校も軒並み定員を削減しているそうだ。おかげで中学校の成績が中の下だった俺は、一年間必死に机に向かうことになった。……今では覚えたことの半分くらいを忘れてしまっているが。

一クラス分の定員が減ったので、去年からは当然クラスが丸々一つ無くなっていた。三階の三年生は六クラスだったが、四階の二年生、五階の一年生はどちらも五クラス。教室が六つあるので一つは空き教室になってしまふのだが、半年前に特別教室として使うことが決定され、今は学習教室A、Bとして、少人数授業などで使用されている。

学習教室Bを過ぎ、二年四組の扉を開けると、相変わらずの談笑が聞こえてくる。昨日見たテレビの話題、最近買ったゲームやCDの話題、恋愛について等々……。若者の話はよくぞ尽きることがないかと、自分も若者のくせに思ってしまう。いやしかし、本当に毎日、色々な話が次から次へと出てくるものだ。

窓側にある、前から四番目の席。そこに鞆を置くと、俺——矢井^{やい}田^だ翔斗は一息吐いて椅子を引き、そこへ座った。一仕事終えた後の工事現場の作業員か何かのように。

「おはよ、翔斗くん」

後ろから声がかかった。体を捻って振り向くと、長い黒髪の、可愛い生徒がこちらを見つめている。

「ああ、おはよう、有^あ希^き」

俺が名前を呼ぶと、早瀬^{はやせ}有希は満足げに頷いた。

「今日もお疲れだね。もっと余裕もって登校すればいいのに」

「まあな。でも、出来るだけ長い間ベッドで寝ていたい……そう思うのは人として当然だろ？　言わばこれは、時間との勝負ってやつなんだよ」

「言い訳っぽい」

有希に素っ気無くそう返され、俺は苦笑いを浮かべた。

八時半を知らせるチャイムが鳴る。これ以後は遅刻とみなされるのだ。確かに俺は、登校するのが遅いんだろうな。出来るだけ自由な時間が多くほしい。そう思っているだけなのだけど。

「でも僕、ある意味翔斗くんのそういうところが羨ましいなあ」

と、有希は松の木が間近に見える窓の外を眺め、意味深に笑った。どういう意味だろう。お気楽だ、とでも言いたいのだろうか。

有希は、今時珍しく——いや、昔も珍しかったかもしれないが——自分のことを僕、と言う。現代語では確か、ボクっ子というやつだったような。俺は今まで生きてきた中で、少なくとも自分のことを僕と言う奴に知り合ったことはなかった。つまり有希は、非常に珍しい種類の人間ということになる。……俺の中では。

有希の髪は細く艶やかで、目元がその髪で殆ど隠れてしまっている。せめて前くらいは切ればいいのだが、本人はこのままの方がいいと言って、知り合ってから一度も切っていない。恐らく一年生の時もそうだったのだろう。顔は幼く、中学生なんだ、と紹介しても半分以上の人は信じてしまいそうだ。体型も高校生にしてはやや小さめで、ほっそりしている。

「先生だ」

有希はそう言うと、乗り出していた体を亀のように引つ込めた。俺も慌てて前を向くと、教卓の後ろにはもう、担任である井上先生が出席簿を開いて立っていた。若い男の先生だ。去年は別の先生が担任だったが、その先生はどこか違う高校へ転任となってしまった。

「はい、では出席を取ります」

このクラスは男子が十六人、女子が十四人で計三十人。他のクラスも大体三十人で、五クラスあるので二年生は百五十人程度いることになる。男女比は半々といったところ。極めて平凡な高校だ。

先生が生徒の名前を呼び始める。この瞬間だけは、お喋りをしていた生徒達も静かになり、自分の名前が呼ばれるのを待っていた。先に有希の名前が呼ばれ、その後俺の名前が呼ばれる。有希も俺も、元気に手を挙げて返事をした。

「ええ、欠席は二名ですね。分かりました。今日は部活動の代表者会議がありますので、関係している生徒は、放課後四階の学習室に行ってください」

出席簿を閉じると、先生はそれだけ言って教室を出て行った。それを合図に、また賑やかな話し声が教室に戻る。このスイッチの切り替えの早さに、俺はいつも、したたかだな、と思わずにはいられなかった。

「代表者会議かあ。翔斗くんと、それから泉さんだよな」

「そうだな。一応そういうことになってるか」

有希の問いに、俺はそう言って頷く。

代表者会議とは、部活動の代表者が集まって行う会議のことだった。だいたい数ヶ月に一回行われている。空き教室に集まって、部活動を行う際の注意を受けたり、部内で合宿

等を行う場合は報告をし、許可をもらったり。大体いつも十分程度で終わっているようだ。俺と有希、そしてさつき廊下で声を掛けてきた春子は、共に同じ部に所属していた。だから会議に参加しなくてはならないわけだ。どんな部活に入っているか？ 正直なところ、それは胸を張って言えるようなものではなかった。何故かと言えば、その部があつてないようなものだからだ。

演劇部。この高校で、そんな部があると知っている人間は恐らく、一割にも満たないだろう。昔は文化祭などで劇をやり、そこそこ人気があったらしいが、体育系の部活動が実績を上げていった結果、部員がどんどん減っていったようで、今では見る影も無い。俺達が部に入った時には、先輩どころか他の部員がおらず、このままでは廃部寸前というところだったのだ。

ただ、俺達にとってはむしろ、その方が都合だった。こう言つては悪いが、俺はもともと、演劇などをするつもりは無かったからだ。

演劇部に入った理由はただ一つ。先生に見咎められず、放課後友人同士で集まって、和気藹々と時間を過ごす……ただそれだけの為だった。この目論見は当たり、現在部員は七名で、その全てが俺の友人。部の顧問も普段から忙しい数学の先生で、今まで一度も部室にやってきたことはなかった。おかげで二年生になってからの約二ヶ月間、俺達は楽しい放課後を過ごしている。

四組には、俺と有希の他にもう一人、そんな演劇部のメンバーがいて、その子がこちらへやってきていた。

「おはよう、二人とも」

「ああ、おはよう、村越」

彼女の名前は、村越光代。黒髪でショートカットの、背の小さな女の子だ。ただ、彼女は演劇部一の行動派で、部内でのイベント等を立案するのも殆ど彼女、体育で好成績を取るのも殆ど彼女、というほどだった。男勝り、なのである。口調もどちらかと言えば男っぽい。そんな彼女には、去年の体育祭、嫌々ながら女子四百メートル走に出場し、校内記録を塗り替えたという功績もあった。

「翔斗と春子が会議に出るんだっけ。あんまり春子に迷惑掛けちゃ駄目よ」

「迷惑って何だよ」

村越は、仲良くなったと判断した人は、すぐに呼び捨てにする。若い先生の中にも呼び捨てにされている人がいるくらいだ。それで友人達との距離をすぐに縮められるのも、彼女の取り柄だった。ただ、彼女にすぐ呼び捨てにされたら、奥手な奴だと怖がってしまうかもしれない。現に一人、部活内でそういう奴がいた。村越と初めて話した時、びくびくしていた奴が。

「ま、今日はよろしく頼むよ、翔斗」

「了解……まあ、そんなに重要な会議でもないらしいけどな」

部活に励んでいる友人から聞いた話では、至極当然の話しかない、だそうだ。俺達は演劇部に入部したばかりだったので、今回が初参加。さて、至極当然とは一体どんな話なんだろうか。

「そうだ。無いとは思うけど、何か部に関係したイベント考えてるなら、一応言つてくれよ。報告しとかないといけないだろうから」

「分かってるって。うーん、でも、今の所は……そうね、ないわ」

村越は、言ってから無理にそうしたように、にこりと笑った。何だか歯切れが悪かったが、まあいいか。

「さて、今日は英語からか。俺と村越は移動だな。そろそろ行こうぜ」

「あ、そうね。じゃ、有希ちゃん、また後で」

英語の授業は、習熟度別ではないのだが、出席番号で前半と後半に分け、クラスを二分してそれぞれに授業を行っている。何でも、少人数の方が先生との対話が多くなり、理解が深まるそう。英語が苦手な欠点ギリギリの俺には、実際に効果があるのかは、全く分からない。分かるのは、問題の解答を聞かれる機会が格段に増えたことくらいか。

俺は机から教科書とノートを取り出し、席を立つ。村越が脇に退いてくれた。

「またね」

有希が軽く手を振る。そういうところが可愛いのだが、本人は可愛いと言われると怒る。馬鹿にされてると感じるのだろうか。

「ああ、また」

含み笑いしながら、俺も同じように手を動かす。

村越が教科書を机の中から引っぱり出して、それから二人で教室を出た。

英語の少人数授業は、学習教室で行われる。俺と村越は、三組までと四組以降を分けるような位置にある中央階段を上り、五階の学習教室Aへ向かった。

*

英語が終わって教室へ戻ってくる。後の二時間目から四時間目は、この教室での授業だった。四組の時間割は、教室移動が一日に三回ある日もあって、休み時間という名前なのにまるで休めないときもあった。

四時間目までが終了して昼休みになると、すぐに俺は教室を飛び出して、一階の食堂まで駆け下りる。学生食堂では、おにぎりや唐揚げなどが比較的安い値段で売っていて、昼食時には混雑するからだ。出来るだけ急がないと、売り切れになったりする。ご飯よりパンがいい、と言う人のために、コンビニで売っているようなパンもあるので、生徒は昼食を買うためにわざわざ登校途中、コンビニに寄る必要はない、ということだ。食堂の隣には、飲み物の自動販売機もある。

何とか列の先頭付近に並べた俺は、希望通りのものを買えた。戻るときには大勢の生徒がたむろしていたが、これが日常の風景なのだった。早い者勝ち、という言葉がぴったリだ。

食堂から帰ってくると、俺と有希の机を引っ付けて、村越と有希が仲良く弁当を食べていた。俺の席に村越が座っていたので、仕方なく隣の空き椅子を拝借する。

「おかえり。よくいけるね、あんなところ」

俺が椅子に腰を下ろすと、有希が呆れたように言った。

「流石に混んだ後なら行かないさ。この時間なら間に合うっていうのがもう大体分かってるからな」

「ふうん。僕はすぐに押し倒されちゃいそう」

「そこまでマナー悪い奴はいないよ」

有希は人ごみが嫌いなんだろう。それは俺も共感できる。人が多いと、気分が不安定になるというか。緊張してしまうのかもしれない。

「私なら、むしろ押し倒すかもしれないわ。待ってるの苦手だから」と村越。おいおい。

「俺のそこは、親が忙しくてあんまり弁当とか作ってもらえないんだ。有希も村越も弁当でいいよな」

彩り豊かな弁当に目を奪われつつ俺が愚痴ると、二人は、

「私は自作よ」

「僕も」

「えっ？」

あまりにもあつさりとそう返されて、俺は呆氣に取られた。有希はともかく、村越まで自分で弁当を作ってるのか。

「何よ、私だってそれくらい作るわ。有希ちゃんみたいに手際良くはないけど」

「いや、僕も全然だよ」

有希は両手をぶんぶん振って否定する。しかし、謙遜してはいるものの、有希の料理の腕は中々のものだった。家庭科の調理実習の時、見かけにそぐわぬ包丁捌きで班のメンバーを驚かせたことがある。始めは半信半疑だった奴も、その腕を見て目を丸くしたのだった。

「僕だって、翔斗くんと同じだよ。親が忙しいから僕が作ってるわけ。……翔斗くんも作ってみたら？」

「俺が？ そんなことしたら弁当の色が真っ黒になりかねないぜ」

あながち冗談とも言えなかったが、二人ともそんなまさかと笑い飛ばしてくれたので、それ以上は言わなかった。

弁当か。小学校、中学校と給食制で、今まで一度も作ってもらったことがないな。一度くらい、お願いしてみてもいいかもしれない。そんなことをふと思った。中学校が給食制って、結構珍しいんだよな。

「そういえばさ」

箸でご飯の塊を持ち上げながら、村越がふいに話を切り出してきた。

「うん？」

彼女はしばらく口をもごもごさせてから、

「この教室、昔いじめがあった教室らしいんだ。ゆみから聞いたんだけど」

「いじめ？」

この高校でそんなことがあったのか。まるで知らなかった。

「そう。丁度今の季節、五月か六月くらいに、いじめられてた子が学校から姿を消したんだって。可哀想な話よね」

「ふうん……この季節に、ねえ」

そのいじめられっ子も、その当時この教室から、松の木を見ていたのかな。窓の景色が目に入って、俺はふとそんなことを思った。

「何年前の話？」

有希が尋ねると、村越は「それがね」と声を潜め、

「最近の話なのよ。いじめがあったのは去年らしいの」

「去年？ 俺達が一年生だった時じゃないか。すぐ下の階で起きてた事件なのに、全然耳に入ってたなかった……」

いじめなんてこのご時勢、当事者にとっても学校にとっても、かなりデリケートな問題だろう。その兆候が現れ始めただけでも、PTAなんか騒ぎ立てそうなものだが。

「何の騒ぎにもならなかったってことは、外に話が漏れなかったってことよね。よくよく考えてみると、去年って先生が結構転任しなかった？」

「あー……言われてみれば。俺のとその担任も転任になってた」

まさか、その生徒に関係してた先生が飛ばされたのでは、という考えが一瞬だけ頭をよぎったが、俺は馬鹿馬鹿しいと首を振った。

「ま、そんなことがあつてかは知らないけど、いじめ事件があつたという話は、外には出て行かず、学校内でもされなくなった。……おかしな話よね。まるでいじめなんて無かったみたい」

「誰も知らないんじや、確かにね。僕も聞いたことないよ」

「無かった事にされたいじめ事件、か。でも、望月は何でそれを知ってるんだよ？」

疑問に思い、俺は聞いてみた。

「仲のいい上級生がいて、ここだけの話みたいなので聞いたみたい」

「ここだけの話、か。何か、口止めされてるような言い方だな」

「そうよねー……」

自分の学校では、そういった話なんて無いと思っていたが、やはり世の中、何が起こるか分からないものだ。今に誰かが逮捕されたりするかもしれない。ニュースで近くの学校の先生が逮捕されたというのがやっていたし。

「うちの学年ではそんなことが起きないよう、しつかり見張っておかないとな」

「ふふ、そうね」

俺が言うのが意外だったのか、村越は可笑しそうに笑った。

俺だって、それくらいの良心は持ち合わせてるぞ。

＊

一日の授業が全て終了するのは、午後三時十五分。先生が戻ってきてから、改めて連絡事項を告げたり、掃除当番を告げたりする。そして起立、礼が終わると、生徒達はそろそろと教室を出て行くのだった。

さあ、待ちに待った放課後だ。

「部室に行きましょう」

見るからに男物のリュックを背負った村越が、こちらへやって来た。小さく頷いてから、俺と有希は立ち上がり、各々鞆を肩に掛ける。

「明日は一時間目、現国だったよな」

俺はトートバッグのような鞆を持った有希に聞いた。

「うん。何で？」

「いや、宿題あったからさ。提出忘れないように」

「あ、僕やつてないや。後で見せて」

「じゃあ一緒にやるか」

「うん。……あれ？」

有希は一瞬だけ悩む仕草をしてから、すぐに合点がいったようで、

「何だ、翔斗くんもしてないんじゃない」

それで三人して笑った。

廊下を出て、俺達は別館への渡り廊下に向かった。六組の奥、突き当たりの部分に両開きのガラス扉があり、その先が渡り廊下となっている。別館は本館より二十年ほど後に建てられ、家庭科室やパソコン教室などの特別教室が設けられていて、調理実習や情報実習で使われている。

演劇部は、そんな別館の三階にあった。昔は技術室だったそうで、図工の授業が無くなってから倉庫扱いになり、そこに目をつけた先代の演劇部が、綺麗に掃除する代わりに使わせてほしいとお願ひしたそうだ。特別教室だけあって、広さは教室二つ分と申し分ない。普段使われない教室ばかりなので、大声で騒いだとしても怒られることもあまりない。そんなわけで、演劇の練習には打ってつけだったのだろうが、今の俺達に言わせれば、好き勝手過ごすのに打ってつけ、なのだった。

部室の電気は付いている。先客がいるようだ。図工で残ったのであろう古い木片に、『演劇部』と折り紙を切り貼りしただけの掛け看板が下がった扉を開く。すると、

「お、来た来た」

という声が聞こえた。低く、よく通る声で、演劇をする上では非常に有利なのだろうが、この部では生憎、その声の持つ魅力を發揮する機会は無いに等しい。

「早かったな、橋谷」

俺は、机を挟んだ向こうで座布団に腰を下ろし、あぐらをかいている少年に言った。橋谷武、二年五組の生徒だ。黒い髪はスポーツ刈りで、顔はきりつと鋭く、鼻が少し高い。がっしりとした体格で、身長も俺より五センチは高かった。演劇部に居さえしなければ、きつと運動系の部活から執拗な勧誘を受けるに違いない。しかし、残念ながらこいつは、部で一番の面倒くさがりやだ。

「あんまり変わらないよ。教室が近いってだけさ」

彼はそう言い、隣の座布団を叩いた。まあ座れ、ということらしい。俺達は素直に従って、長方形の机の周りに敷かれた座布団にそれぞれ腰を下ろした。計七つの、色とりどりの座布団が敷かれているのだが、とくに指定席があるわけではない。

「鍵、取りに行ってくれてありがとな」

「それくらい。俺もここに早く来たかっただけだよ」

橋谷はハッと短く笑って、親指を突き立て後ろを指差した。窓の近くのその壁際には、錆びた収納棚が二つ並んでおり、そのどちらもが漫画本でいっぱいになっていた。

この棚も、元は技術室に備え付けられていたものなのだが、今では橋谷の私物である漫画で埋め尽くされてしまっている。ぎゅうぎゅうで入りきらない分は、棚の上に何冊も積まれていた。

顧問が来ないということは、言葉は悪いが、こういった私物化がし放題、ということだ

った。橋谷以外にも、小さな本棚を春子と俺、有希、そして望月という、昼休みに名前が出た喋り好きの女の子が使っているし、その望月に至っては、自宅からノートパソコンまでも持ち込んでいたのだ。なんでも、パソコン教室が真上にあるため、ネット環境が整っているのだとか。

「今日は部活の会議だったよな。泉ちゃん、早く来ないと遅れちゃうぜ」

「大丈夫さ。後十五分くらいある」

春子を持ち込んだ掛け時計を見ると、時刻は三時二十五分。会議が始まるのは四十分だ。橋谷はふん、と鼻息を立てて、脇に置いてあった漫画を手に取り、ばらばらとページをめくり始めた。俺も知っている、少年誌の漫画だった。

「お前、よく毎月何冊も買えるよなあ」

「バイトしてるからだよ。申請はしてないけど」

平然と言うのが橋谷らしい。この学校は、申請しないとバイトは出来ない決まりになっているのだ。あくまで建前であって、申請をせずにバイトをしている生徒はごまんといるわけだが。

「俺も始めようかな。買いたいものは特に無いけど、橋谷を見てるとしたくなる」

「どういう意味だよ」

「何か、こここんな風に漫画読んでる奴が俺より働いてるんだって思うとさ」

「動機が最低だな」

机の下で、足を軽く蹴られた。こいつめ。

「僕もしたいんだけど、一人じゃちよつとね。翔斗くん、何かあったら僕も誘ってよ」

「それは構わないけど。有希はどうして始めたいんだよ」

俺が聞くと、有希は「えーっと」と言いながら視線を泳がせ、

「そう。大学のための資金」

「嘘付け。特に考えてなかったな」

と笑ってから、有希の額を軽く指で弾くと、有希は、

「むー」

と頬を膨らませた。いちいちやるのが可愛らしい。

それからほどなくして、部室の扉がまた開いた。扉の向こうには、三人の男女の姿が。残りのメンバーだ。

「あ、皆揃ってたんだ。どうも」

「おや、両手に花、だな。佑也」

俺は、三人が部室へ入ってくるなり、真ん中の少年をそう茶化した。

「もう、偶然だよ、偶然。廊下で一緒になったんだ」

少女二人に挟まれて立っていた小林佑也は、顔を赤らめて即座に否定した。中肉中背で、ぼさぼさの短い黒髪。輪郭があまり濃くないので、特徴を見つけがたい顔で、性格も臆病で引つ込み思案ときている。個性の無さが逆に個性、という感じで、控えめなその性格が、むしろ愛嬌になっていた。不思議なものだ。ちなみに、村越に呼び捨てにされて怯えているのはこの佑也である。

両脇の女の子は、左の、焦げ茶のポニーテールが例の、この部室にパソコンを持ち込んでいる望月ゆみ。右の、黒のセミロングヘアが、朝廊下で話をした泉春子だった。望月

は銀縁の眼鏡とそばすが特徴的で、性格はどちらかと言えば、村越に似て活発。大して春子は、前髪を留めている白いヘアピンが可愛らしい、お淑やかな令嬢、といった感じだった。二人とも平均的な体つきをしている。僅かに春子の方が、胸周りが豊かに思えるが。そういえば、望月は自分のことを、ウチ、と言うが、それも有希と同じように珍しいな。これもまた俺個人の感想だけだ。

これが演劇部のフルメンバーだ。二年一組の望月、二組の春子、三組の佑也、四組の俺、有希、村越、そして五組の橋谷。この七人が出合い、親しくなり、今の演劇部がある。

簡単に説明をしておくと、俺と春子が幼馴染で、去年はそれぞれ一年一組と二組になった。一組には俺のほか、村越がいて、初めは全然話さなかったのだが、七月に転校してきた橋谷が、体育の時間に村越のライバルになり、俺とも仲良くなり、そこから三人で親密になっていった。今では橋谷と村越は、付き合っているのでは、なんて言われたりもしている。本人達は否定しているが。

一方、春子のクラスには望月がいた。望月はお喋り好きなので、大勢の友達の中の一人が春子、という程度だったのだが、俺が演劇部私物化作戦を練っていると春子から聞くと、すっかり気に入って俺達と仲良くなった。ノートパソコンなんかを持ち込んでいるあたり、やはり一番現状を楽しんでいるのは彼女だろう。

有希と佑也は、それぞれ三組と五組にいたらしい。二クラス以上先のことはあまり知らなかったが、有希とは同じクラスになってから、すぐに打ち解けた。向こうにもこんなに楽しい奴がいたんだな、という新鮮さがあった。佑也はまたクラスが違ったが、隣のクラスだと特別授業で一緒になることが多かったので、仲良くなったのだった。

「もうすぐ会議が始まるね。翔斗くん、どこでやるか覚えてる？」

春子が早速質問してきた。真面目な性格なので、よく確認をとってくるのだ。

「学習教室Bだろ、四階の。ちゃんと覚えてるよ。というか、覚えてなくても春子がいるだろ」

「そうだけど。暫定部長さんには、しっかりしてもらいたいの」

「……はあ」

暫定部長とは言うものの、誰もやりたがらないので、正式に決まったようなものだ。部長を一人選出しないと部活動として認められないので、一ヶ月前に決めようという話になったのだが、その方法がまさかのジャンケン。結局最後まで残った俺が、登録用紙に自分の名前を書いたというわけだ。今日の会議に俺が出るのも、そういう事情があつてのことだった。

「ま、頑張れ、暫定部長」

望月が可笑しそうに笑うので、俺はむっとして、

「最後にやったの俺とお前だっただろ。あの時俺が勝ったら、お前が部長だったんだぞ」

「でも、ウチが勝ったからね」

それ以上は言い返せない。

「運が悪かったよな、翔斗は」

「こればかりは諦めるしか、ね」

橋谷と村越が、言葉を噛み締めるように頷いた。息がぴったりで、何だか腹が立つ。

「まあまあ、翔斗がずっと部長つてのは可哀想だし、半年後にもう一回決めたらいいんじゃない」

やないかな。一人に押し付けるのは悪いよ」

助け舟を出してくれたのは、佑也だった。集中砲火を受けた時に、心優しい彼がいてくれるのは心強い。

「ありがとな、佑也」

「う、うん。昔保健委員を押し付けられたことあるからさ」

「ああ……」

保健委員とか美化委員は、押し付けられる委員のトップに入るよな。俺は佑也に同情した。中学校時代、冷酷な委員長が、拒否出来ないような気の弱い生徒にテキパキと委員を押し付けていったという記憶がある。どこの学校も、決まるまでは終わらないぞと先生が言うものだから、耐久戦になるか押し付けるかのどちらかになってしまふのだ。俺も図書委員をさせられたことがあったっけ。本が嫌いではなかったから、嫌ではなかったが。

「さ、じゃあもうそろそろ行こうか？」

時計を見、春子は立ち上がった。俺も視線を上げると、掛け時計の針は三時三十五分を示している。

「分かった。それじゃ、行ってくるよ。皆、適当に時間潰してくれ。いつも通り」

座り込んでいる五人は、各自気の抜けた返事をした。

*

四階、二年四組の教室がある隣の学習教室。扉を開くと、中には既に何人かの生徒が着席していた。教卓には、面識のない四十過ぎに見える女性の先生が立っている。

「丁度いい時間だね」

「そうだな。五分行動は守って損無しだ」

春子は「うんうん」と頷く。丁度その時、校内放送のチャイムが鳴った。

『三時四十分より、四階学習教室で部活動の代表者会議を行います。関係している生徒は、すぐに学習教室Bまで来てください』

繰り返される放送を聞き流しつつ、俺と春子は空いている席に着く。ほどなくして、ぽつぽつと他の部の部員も集まってきて、学習室はほぼ満員になった。野球部員が泥だらけなのが目立っている。

「では、代表者会議を始めます」

教壇に立っている先生が口を開いた。

「まず、これから夏に入りますが、運動部以外も、室内の温度が上がって脱水症状を引き起こすことがありますので、窓を開けたり、とにかく体調管理をきちんとするように」

黒板に、熱中症、という単語が白いチョークで書かれる。

「万が一熱中症の疑いがある時は、すぐにその生徒を休ませ、水分補給と体を冷やすことをしてください。動脈が通っている所に冷えた水の入ったペットボトルを当てたりするの
が……」

……初めての会議なので、始めの内は傾聴していたが、内容は知っていて当たり前のことばかりだった。友人に言われたとおりだ。俺はつまらなくなつて窓の方へ目をやり、外の景色をぼんやりと眺めていた。ここからは、松の木は見えないな。

光耀高校に植わっている松の木は、学校創立当初からあるもので、丁度一年四組、二年四組、そして三年五組の位置にある。枝ぶりも良く、堂々としていて、六十年という時を重ねたことが一目で分かる立派な松だった。

以前木登りをしていた生徒がいるとかで、木の周りは棘状の突起がある水色の鉄柵で囲まれている。確かに、五階付近まで伸びた木を登るのは危険だ。調子に乗ると、下りられなくなることもあるだろう。俺自身、小学校時代に友人と木登りして、上手い上手いと煽てられ、その気になって登り続けたら下りられなくなったことがあった。あの時は先生にこっぴどく怒られたな……。

ぼうと昔のことを思い出していると、背中を指でつつかれる。春子が注意してくれたらしい。慌てて前を向くと、先生がこちらを睨むように見つめていた。いけない、いけない。

「では最後に、夏休み中に合宿等を企画している部は、報告に来てください」

野球部、サッカー部などが先生の所へ向かっていった。意外だったのは、パソコン部が合宿の報告に行ったことだ。一体何をするのだろう。かなり気になった。

報告が済んで、会議が終わる。時計を見ると、三時五十分だった。ぴったり十分、話通りだ。

「おつかれさまでした。部活動を行う際は、くれぐれも体調に気を使ってくださいね。以上」

先生が手を打つと、それが解散の合図になった。廊下側の生徒から、ゆっくりと教室を出て行く。

「分かりきったことばかりだったねえ」

椅子を机の下に戻しながら、春子が嘆息を吐いた。

「全く。夏場は水分補給が大事とかさ。俺達、運動しない上に飲食しまくってるぜ」

「太っちゃうよね、ほんと」

春子はそう言って苦笑するが、実際のところ、太り気味に該当するようなメンバーは一人もいない。適当に飲み食いしながら談笑する部活だというのに、メンバー全員健康的すぎる。

「さて、それじゃあ帰ろう。皆も待ってるしさ」

「待ってるかな、果たして」

俺が冗談を言うと、春子はくすくす笑った。

部室が別館の三階にあるので、俺と春子はまず三階に下り、そこから渡り廊下を通ることとした。三年生のいる階に行くのは少々緊張したが、大半の生徒は既に引き払っていることだろう。もう三年生は、受験シーズンで部活動を卒業した人も多い。放課後の教室に用はない筈だ。

幸いにも、下りた先の廊下には、二、三人の男子しかいなかったもので、俺達はやや早歩きになりながら、談笑している彼らの前を通り過ぎた。

——と。

「おい、その」

三年生の一人に、急に声を掛けられる。何故？ 振り返って相手を見たが、初対面の男だった。因縁をつけられる覚えはまるでない。にも関わらず、口調はぞんざいで、明らかに

にこちらを見下しているようだった。

男はゆっくりとこちらに近づいてきた。後ろの二人は無表情でこちらを見つめている。俺は背筋に冷たいものが走るのを感じ、思わず身を固めた。

だが、男の目当ては俺ではなかった。

「君、泉って言うんだろ？」

「え……は、はい」

名前を呼ばれた春子は、声を震わせながら答え、上目遣いに相手を見つめた。男はやや太り気味だが、背が高いので、相当な威圧感がある。顔も目や口元が鋭く、小さい子供が見ただけで泣き出しそうだなと思った。

そんな強面の男が、一体春子に何の用があるというのだろうか？　そもそもどうして春子の名を知っているのだろうか？　自分が狙われていないのは分かったが、むしろ今のほうが恐ろしさを感じた。彼女に、何をするつもりだ？

「……ふうん、あいつのね……」

男は何やら一人納得しながら、あごを撫で回す。獲物を前に舌なめずりをするカメレオンか何かのようで、気味が悪かった。

「……あの、何でしょうか」

意を決して、俺はそう聞いてみた。用がないなら行かせてくれというように、やや語気を強めて。

「うん？　いや。何でもないぜ。ちよつと顔が見たかっただけさ。……お前、この子の彼女か？」

「違います」

「じゃあ何だ？」

「部の仲間です」

一体そんなことを聞いて何になるのか。まさかこいつ、春子を狙っているのか。そんな……。

「部ねえ。何の部だ？」

「演劇です。——もういいでしょう」

上級生にそんな口の聞き方するのは恐ろしかったが、ここに留まっているほうが心臓に悪かった。春子も心配だ。さっきから俯いて足をもじもじさせている。俺は彼女の手を取り、相手の返事も聞かずに、その場を大急ぎで立ち去った。

後ろから、粘っこい視線をいつまでも感じた。

*

「ちよつと、それどういうこと？」

隣に座っていた望月が声を荒げる。

息を乱しながら演劇部に帰ってきた俺達は、不審に思ったメンバーに問い詰められて、先ほどの一幕について説明をさせられた。五人ともが顔色を変え、春子に「大丈夫か」と声を掛けたり、声を掛けてきた不届き者は誰なのだろうと口にしたりしていた。

「柄の悪い三年生だったから、誰かはすぐに分かりそうだけど。……なんで春子に声掛けた

のか分からないし、春子の名前まで知ってたのが変だよな」

俺が言うと、有希が、

「変だよ。だって泉さん、学校に名前が知れ渡るようなことしてないでしょ？」

「うん。賞をもらったこともないし、委員に立候補したこともない。部活も演劇部だし……」
最後のは自虐のように聞こえるが、今は突っ込まないことにした。

「今日の会議で名前が呼ばれたとか」

村越の言葉に、しかし春子は首を振った。俺も記憶を辿ってみたが、間違いなく、名前が呼ばれたことは一度もなかった。第一、あの生徒は会議にいなかった。

「どうしてあんな人に声、掛けられたんだろう……。どうして私の名前、知ってたんだろう……」

「演劇部の姫にそんな無遠慮なことするなんて、俺が一発殴ってやりたいぜ」

と橋谷。俺も何とかしたいが、流石に暴力沙汰は物騒だ。勝てる気だつてしない。

「どこかでちらっと見かけて、気に入られたとか？ それくらいしか考えられない」

佑也が首を傾げる。

「そうだな。名前を知ってたのは例えば名簿や座席表を見たからとも考えられるし、佑也の言うとおりかもしれない……。あんな奴に絡まれたのは、運が悪かったとしか言い様がないな」

俺がそう言い、佑也や望月が小さく頷いた。

短くない沈黙が室内を満たしたとき、春子があることに気付いたようで、顔を上げた。

「でも、あの人、変なこと言ってたような気がする。ほら、翔斗くん、覚えてない？」

「え？ なんかこと？」

望月が俺に顔を近づけてきた。俺はさっきの場面でのやりとりを思い出して、

「そういえば……確か『あいつの』とか……」

「あいつの……？」

考えるときの仕草なのか、望月はこめかみに指を当てながら、数回頷いた。

「誰か他の人が関係してるってことなのかな。その人経由で、春ちゃんのことを知ったとか」

「そう、なのかな。じゃあその人って、誰なんだろう……」

あいつ、というだけでは、誰なのかは判然としなかった。あの男の知人の可能性もあるし、そうでないことだってあるのだから。

「俺達全員、あんな奴とは知り合いじゃないだろうし、あんな奴と仲良くしてる友達もいるとは思えない。駄目だ、想像もつかねえや」

あまり暗い話を続けるのはたまらなかったので、俺は背筋を伸ばして、「怖かったけど、今結論は出ないし、今度から気をつけるしかないさ。あの生徒にあんまり近づかないようにしよう。顔を知ってる人がいたら、今度聞いてみればいいさ」

「……うん、そうだね」

俺が春子の肩を叩くと、彼女はやや顔を引きつらせながらも笑った。無理をしているようだが、現時点ではどうにもならない。事実のみを言うなら、ただ声を掛けられただけなのだ。ただ、何も対処しないのは心配なので、これから彼女を出来るだけ一人にしないようにした方がいいか。

春子を狙う上級生。あの男は、一体何が狙いなんだろう？ 分からない。得体が知れない。

……不安は拭い去れないが、俺はそれについてあれこれ悩むのはもう止めよう、と決めた。

「じゃ、ちょっとハプニングがあっただけさ。そろそろ何かしよう」

「そ、そうだね」

憂鬱な話はそこで打ち切って、俺達はまたいつものように、他愛のない話に花を咲かせ始めたのだった。春子も次第に、普段の笑顔を取り戻していった。

*

五月の午後五時の空は、まだ薄橙色で明るかった。風が吹き始め、昼間よりは涼しくなったが、それでも服の下に汗を感じる程度の蒸し暑さだった。

玄関口で靴を履き替え、俺達は外へ出る。

「今日も無駄に過ごしたわー」

玄関を出ていきなり望月がそんなことを言うので、

「その無駄な時間を楽しんでるんだろ、俺達は」

俺はそう言って彼女の頭をポンと叩いた。

「何だかんだで毎日集まって、特に何をするでもなく過ごして。それでもう、一カ月半経ってるんだぜ。不思議なもんだな」

「そうだよ。体育の授業で一緒になって、翔斗にいきなり誘われた時は、何だその部活は、なんて思っちゃったんだけど」

「分かる分かる。他の奴らからしたら、そんなの部活じゃないって言われるだろうな」

佑也と橋谷が自嘲気味に笑う。

その時、後ろから突然村越が来て、俺達の前に立ちはだかった。腕組みして仁王立ちになり、俺達を見回す。

「……じゃ、部活らしいことの一つでも、してみる？」

「はあ？」

二人の笑みは、この村越の言葉で固まった。

「今、何て言った？」

「いや、だからその」

珍しく、村越が緊張気味だった。橋谷との会話も上手くないとはいは、相当だ。

「村越、もしかして何か考えたのか？」

俺が聞いてみると、彼女はこくりと頷いて、

「会議前に言わなかったのは悪いけど、踏ん切りがつかなくてさ」と、溜め息を吐く。

そう言えば、朝の彼女を思い返してみると、企画があるのかと聞いたとき、歯切れの悪い返事をしていたような気がする。

春子や有希、望月も俺達の隣に並び、村越のスピーチを聞く観衆のようになった。彼女は柄にもなく、少し照れくさそうに指で鼻を掻きながら、

「私達で一度くらい、ちゃんと演劇してみない？」

その言葉が、頭の中でこだました。

「演劇……」

「そう、演劇。誰もそんな経験ないけどさ。一度くらい、このメンバーでやってみたいじゃない。力を合わせて何か一つ」

「ううん、力を合わせて、かあ……」

中々良いことを言うじゃないか、村越。風を背に受け堂々と俺達の前に立つ彼女の姿は、威厳に満ちていた。俺なんかより、彼女の方がずっと部長らしい。

「そりゃ勿論、最初は翔斗の計画してたように、自由に楽しく過ごす部活だったわけだから、その延長としてしたいって思ってるの。やる方も楽しい演劇。それって新しいイベントみたいで面白そうじゃない？」

新しいイベント、か。彼女が口にするまでは、全く考えても見なかったが、このメンバーで劇を演じるのも、面白いかもしれない。今まではお気楽に過ごしていたが、そろそろ体もなまってきて、何か行動を起こしたい気分だ。恐らく、彼女もそうなのだろう。何もしないより、何かしていたい性分なのだ。自由気ままな部活動、と言いつつも、やはりただ無為に過ごすのでは面白くない。

「いいんじゃないか、そういうのも。自由に部室を使わせてもらってるんだからさ。部活らしいことを一つくらいするのも、悪くない」

「うん。私もそう思う」

春子が俺の意見に同意してくれた。有希もまた、

「内容にもよるけど、面白いかもね」

と言い、それを聞いた望月が、

「台本なら任せてよ。ウチ、そういうの得意なんだから」

そう言って親指を突きたてた。

「おいおい、仰天してる間にもう四人も賛成してるじゃねえか。これじゃ俺も小林も反対できないだろ」

「俺、人前に立つの苦手なんだけどなあ……」

「大丈夫さ、佑也。照明というポジションがある」

「あ、じゃあそれなら……」

「おい、小林、騙されるな。それは一番地味で辛い役だぞ」

俺達は、笑いあう。

「部活と称してボウリングやカラオケに行くより、ずっと真面目なイベントだわ」
全くもって、村越の言うとおりだった。

結局、こうして演劇部は、村越の一声で、初めて演劇部らしい企画を立ち上げた。誰も演劇なんてしたことは無かったが、俺の心は妙に踊っていた。何故だろう？ それは多分、この仲間だから。この七人でなければ、きつと俺達はこうして、笑い合えていないからだ。夕陽がゆっくりと沈んでいく。初夏の一日が終わっていく。それを感じながら、俺は自分が満たされていることをはっきりと感じた。

——俺、素晴らしい高校生活を送れているんだな。

そして俺達は別れの挨拶を交わして、それぞれの帰路についたのだった。

宿題をやり忘れていることに気付いたのは、その日の就寝間際だった。

二章 第一の事件

誰しも予感めいた朝を迎えることはある。目覚めの気だるさや、カーテンを開けたときの鈍重な曇り空。どんよりとした一日の始まりに、俺はそうした、形容し難い不吉さを感じたのだった。

そういう朝は、大抵自分にとって悪いことが連鎖する。小さなことだが、テレビで流れる占いの順位とか、赤信号に引っかかる回数とか。学校にやってくる頃には、俺ははっきりと意識していた。今日は運が悪い。何か、嫌なことが起きる前触れなのかもしれない、と。

演劇部が企画を立ち上げた、その翌日だった。俺は学校に到着するや否や、チャイムの音に落胆し、先生から遅刻の注意を受けたのだった。

「今日は時間との勝負に負けたんだね」

「うるさいぞ、有希」

席に着くと、後ろの有希に笑われた。こう茶化されては恥ずかしくてたまらない。出欠確認が終わってからこちらにやって来た村越にも、

「しっかりしなさいよ、部長」

とたしなめられるのだった。

「俺、村越が部長になればいいと思うんだけどなあ」

別に嫉妬でも何でもなく、昨日の村越を見て、俺は素直にそう思った。彼女が部長になれば、何をするにも全力投球、みたいな部活になりそうなのだが。

「私、あんまり慕われる要素ないから。無愛想に思われることもしょっちゅうあるしね。だから、部長は翔斗でいいと私は思うよ」

「……そ、そうか。ありがとな」

何だろう、今のは褒められたのか、それとも部長を押し付けられると思ってそれとなく回避したのか。周囲は彼女に対して、体育会系という評価ばかりしているが、案外彼女は思慮深いのもかもしれない。

「はあ、まあとにかく、これから俺が、しばらく演劇部を指揮していかなくちゃならないわけだな。真面目な部活として」

「自由気ままに過ごすつもりで計画してた張本人だけどね」

有希、それは言うな。

「……とは言っても、これまでの気ままさは無くならないと思う。何てったって、武とゆみがいるしさ」

「ううん、それは言ってる」

橋谷は結構な面倒くさがりだし、望月は菓子やジュース、その他色々なものを持ち込んでくるし。それは演劇をすることになっても変わらないだろう。望月の方は、息抜きになるから歓迎なのだけど。

「武は、もう少し精を出してほしいわ」

全く、村越に同感だ。

「今日から劇の立案か。果たして、どうなることやら」

「上手くいけばいいよね、村越さん」

「ええ、そうね」

部室でわいわいやっていた七人が、舞台上で役者となって動き、喋る。まるで想像出来ない光景だったけれど、その方が、わくわくする。期待と、ほんの少しの不安が入り混じった、不思議な気持ちだった。

「あ、そうそう」

教室の前、天井近くに掛けられた時計を見て、ふいに有希が口を開いた。

「僕ら、宿題忘れてたよね」

「あ、一時間目だ！」

昨日寝る前に、やってないことを思い出したが、朝にやろうと思ってそのままベッドに潜ってしまったのだった。……まだプリントの空欄は一つも埋まっていなかった。もう間に合わない。

「……はあ」

不幸が続くな。俺はがっくりと肩を落とした。

*

この日の四時間目は体育の授業で、俺達は三階にある第二体育館内で汗を流していた。

「しっかり受けるよ、佑也」

「う、うん。頑張るよ」

俺は、後ろで両手を突き出して身構えている佑也を励ましていた。前を向くと、ピンと張られた大きなネットの向こうに、相手チーム六人の姿が見える。後衛の女子が、ボールを持ってサーブの構えを見せている。

バレーボールだ。

六月下旬になれば、プール開きとなるが、それまでは室内競技が続いていた。四月はマツト運動と跳び箱で、五月がバレーボール。バレーボールをするのは初めてだったが、ある程度試合をするとな慣れてきた。今ではサーブを打つときのコツも分かって、サーブエースを取ることも出来る程になっていた。

チーム内には別クラスの佑也がいるが、それはこの学校の体育が、二クラス合同で行われているからだ。一、二組で合同、三、四組で合同、そして五、六組で合同。このように分けられて体育の授業が行われている。一、二年生は六組がないので、五組だけは止む無く一クラスで体育を行っているようだ。とにかくそんなわけで三組の佑也が俺と同じチームにいる。彼と仲良くなったのも、体育の授業を通してだった。

俺のチームにはもう一人、村越がいたのだが、活発な彼女も今は見学中だ。今日はどうやら、風邪気味で運動が出来ないらしい。そんなこともあるのだな、と思う。村越がしおらしくしているのは何とも奇妙だった。昨日今日と、彼女の意外な一面、みたいなものをよく見る。仲良くなってもう二ヶ月、そろそろお互いに、そういう面が見え始める頃なんだな。

見学者の数は普段より少し多い。風邪が流行っているのだろうか。有希もまた体育館の端の方で、縮こまっている。女子の見学ばかりのようで、男子は一人だけ。女子に期待しているバレーの苦手な男子は、少々落胆気味だ。

体育で見学する際にも、体操着を忘れてはならないので、見学者は全員、体操着でこちらを見つめている。村越や有希もそうだった。平常点が加味されるので、着ていないと損をするのだ。今バレーを教えている若い男の先生は、見学でマイナス一点、見学時の体操着忘れで更にマイナス一点、とする先生だった。ちなみに、男子と女子は勿論着替える場所が分かれており、男子は教室で、女子はこの第二体育館にある更衣室で着替えることになっていた。

「来るぞ！」

敵チームの女子が、ボールを高く上げた。そして、強く平手で打つ。こちらのコートに、青、黄、白の入り混じったボールが凄まじい勢いで向かってきた。後衛の佑也は、齒を食いしばりながら膝を曲げ、腕を伸ばし、レシーブの体制を取る。

——そこまでは良かったのだが。

「あつ」

ボールのあまりの速さに、彼は最後におびえてしまったようで、突き出した手を引っ込めようとし、それが仇となって指を突いてしまう。痛みに仰け反った佑也は、見事に尻餅をついた。

俺はその一連の流れを呆然と見つめながら、佑也を心配するのではなく、女子ってやっぱりバレーが上手いなあ、などと感心していた。

「大丈夫かよ！」

隣の男子が、手を押さえてうずくまる佑也の元へ駆け寄る。そのときになってようやく、俺も彼のそばへ近づいた。

「ううん……指突いちやったみたい。痛てて」

佑也は左手で、右手の中指を包むように押さえていた。腫れてはいないようだったが、いかにも痛そうな表情だった。

天井近くに掛かっている時計を見ると、針は十一時五十五分を指している。もし後にもう一戦あったら、人数が減っては辛い、片付けがあるのを考慮すると、これが今日最後の試合になるだろうから、抜けさせてやってもいいか。

「試合はもういいから、とりあえず保健室に行ってこいよ、佑也」

「でも……」

「俺が二人分頑張るさ」

「……うん。ありがとう、翔斗」

佑也は、右手の中指を押さえたまま、小走りで体育館を去っていった。それを見送りながら、俺は溜め息を吐いた。……あいつ、本当に運動が苦手だな。

五人になってしまったが、仕方がない。佑也には悪いが、運動音痴のあいつがいても、そう戦力にはならないだろう。

もう一度、相手側のサーブだ。守備位置を時計回りに移動していくので、今度は俺が後衛になり、鋭い攻撃に備えた。

平手でボールを打つ、乾いた音。横から見るのと、直面するのではやはり、怖さが違った。

しかし、佑也の二の舞にはならない。俺は何とか組んだ両手でボールを受け、自陣の空中へと飛ばした。

後は、前衛が走り、トスで位置を調整して、相手のコートにスマッシュを打ち込んだ。

＊

佑也が帰ってきたのは、授業が終わる五分ほど前だった。

右手の中指には、ぐるぐると包帯が巻かれている。戻ってくると彼はすぐ、俺達の所へやって来てぺこりと頭を下げた。

試合は、土壇場で味方の女子が踏ん張ってくれて、こちらのチームがからも勝利を収めていた。バレーボールの授業が始まって三時間目、勝率は五割を超えているから、悪いようにはならないだろう。

汗を拭っていると、甲高いホイッスルの音が響き渡る。

「じゃあ、片付けを始めてください」

Tシャツ短パンという姿の、爽やかな身なりの先生が、大きな声でそう告げた。すると、そこで全ての試合が打ち切られて、生徒達はがやがやとお喋りしつつ、ネットを外し、床の穴に挿し込まれていたボールを抜いて、片付けを始める。準備と片付けは全て生徒がやることになっているが、これが一苦労だ。

試合結果を書き込む用紙も生徒が記すことになっているので、手の空いた生徒はその用紙が挟まれたフォルダを先生の所へ持って行っている。試合結果は取ったセット数で表すのだが、決着のついていない試合もあり、それは現在のセット数を書き込み、次回の授業に持ち越しとなる。

「タイミングの悪い時に帰ってきたな」

俺が佑也の背をちよんと突くと、

「いや、せめてこれくらいは手伝わないと」

佑也は、臆病ながらも優しい性格の持ち主で、片付けも掃除もサボったことはない。橋谷とは大違いだ。あいつ、滅多に掃除をしないそうだから。

「はは、出来た奴だなあ……それにしても、全く、見学者は羨ましいぜ」

見学者は当然のことだが、準備も片付けもしなくて済む。なので、有希や村越は、一足先に着替えに戻ったようだった。体育館の隅には、もう誰もいない。

「さ、ボール運ぶぞ」

「突き指したからネットがいんだけど……ああ、まあいいか」

ネットは既に、他の男子がきっちり畳んでいた。やれやれと首を振り、佑也はボールの片側を両手で持ち上げる。俺も反対側を持ち、バランスを保ったまま奥の倉庫へと運んだ。およそ六十人が六人一組になっている為、計十チーム。コートが五つ必要なので、ボールは二倍の十本必要だった。それが全部一所に集まるため、片付け時間の今、倉庫前はかなり混雑していた。

「これが面倒なんだよなあ」

「うん……あ痛」

佑也が、隣の生徒達が持っているボールに足をぶつけたらしかった。本当に、この時の倉庫前は大変だ。昼休みには食堂へ急がなくてはならないので、スムーズに進んでほしいのだが。

前が空くと、俺達はポールを台の上に乗せる。ここで指を挟む生徒もいるらしいので、慎重に。

こうして道具を全て片付け終わったのは、結局チャイムが鳴る直前だった。先生が最後に整列の号令をかけ、生徒を並べてから、挨拶をする。

「礼！」

「ありがとうございます！」

礼儀は重んじるものだ。

「じゃ、さつさと帰りますか」

「うん、そうだね」

俺と佑也は、食堂でパンを買うべく、急いで体育館を抜けた。佑也の方は突き指のせいで、体育館シューズを脱ぐのにもたついたが、それでも他の生徒より早く抜けられた。体育館の出口からまっすぐ行けばすぐ階段なので、俺達は急いで上がる。

四階に上がって、自分達の教室へと急ぐ。まだ誰も帰ってきてはいないようだった。

そこで、俺は気が付く。

「あ、そうだ。帰ってきてないってことは……」

「鍵、だね」

そう、誰も帰ってきていないのだから、鍵が掛かっている筈だった。以前から度々、体育や特別実習時の盗難被害があった為、教室を空ける際は戸締りをするのが絶対になっている。誰かが面倒くさがって、鍵を掛けないままにしておかなかったかと、前と後ろの扉の施錠を確認してみたが、どちらも手応えがあった。すりガラスの窓もがたがたやってみたが、やはり鍵が掛かっていた。佑也も自分のクラスの施錠を確かめ、こちらを向いて首を振る。

「やっぱ取りに行かないと、か」

「仕方ないよ。行こう」

各教室の鍵は学年室にまとめて保管しておくことになっている。なので俺達は、二組付近にある学年室を目指すことにした。

だが、中央階段の辺りに差し掛かった時、学年室から二人の生徒が出てくるのが見えた。

「失礼します」と礼をして、扉を閉めてからこちらへ歩いてくる。そして、

「鍵ならあるよ」

という、聞きなれた声。有希と村越だった。着替えも終わり、体操着を入れた袋とシューズを入れた袋の紐を右手で持って背中に戻している。二つの鍵は、有希の左手でぶらぶらと揺れていた。

「ありがとな、有希、村越」

俺はとりあえず、感謝の意を伝える。

「上がって二人が見えてね」

有希は、まず三組の鍵を佑也に渡し、それから俺の所へやって来た。俺はまた、手を合わせて大げさに感謝し、有希から鍵を受け取った。そして、鍵を差込口に入れて回す。小気味いい音を立て、扉は開錠された。

「さつさと着替えて行かないとな」

「うん。本当、ありがとね、有希ちゃん。それに村越さんも」

「いやいや」

有希と村越も、丁度教室へ戻るところだったのだから、感謝するのは確かにおかしいかもしれないな。

ともあれ、佑也はすぐに三組へ引っ込み、俺達も教室に入る。そして、俺はてきぱきと着替えを始めた。女子がいると言つても、友人なら構わない。まあ、村越はそれとなく視線を逸らしてはくれたが。

「暑い。有希、窓開けてくれないか？」

「僕は暑くないんだけど……まあ、了解」

俺の後ろの席にいる有希は、すぐ左隣にある窓の鍵をカチリと外して、窓をスライドさせた。涼しい、湿った風が肌をくすぐる。松の木の枝葉が揺れる、ざわざわという音も今は快い。俺は、自分の場所の窓も鍵を外して、スライドさせた。

――と。

突然、後ろの扉が大きな音を立てた。どうやら、誰かが鍵が掛かっているのに気付かずに、開けようとしたらしい。あまりに唐突だったので、俺は一瞬、飛び上がりそうになった。胸が激しく鼓動を打つ。

さっき俺と佑也も施錠の確認はしたが、あそこまで大きな音は立てなかった。今扉を開けようとした奴は、かなり乱暴な性格だな、と勝手に推測してしまう。

前の扉が開くと、予想通りがっしりとした体格の男子が入ってきて、

「悪い、悪い」

と頭を下げた。確か、彼は体育委員の、三吉みよしという奴だったような。

謝られたので許すしかないが、正直かなり驚いた。全く、傍迷惑なことだ。

「村越、鍵閉めた？」

「いや」

三吉の問いに、村越は無愛想に首を振った。彼女もびっくりさせられて、腹が立ったのだろう。

教室の扉は、前が鍵で両側から開け閉め出来、後ろは内側からのみサムターンみたいなつまみを回して開け閉め出来るので、誰かが中にいるなら後ろを開けてくれてる筈、と思っただけかな。

とにかく、単なる思い違いで良かった。俺はほっと胸を撫で下ろし、廊下で待つてくれた佑也と共に、食堂へ駆け下りていった。

……ただ。

後になって思ったが、もしかすれば、これが悲劇の始まりを告げる銅鑼のようなものだったのかもしれない。俺達に、これから続く悲劇が幕を上げたことを知らせる、大きな銅鑼の音。

何故なら、この時既に、目覚めてからずっと感じていた不吉の、その象徴とも言える恐ろしき事件が、既に起きていたのだから。

この時既に、俺達が着替えていたすぐ下の教室で。……一人の男の命が、失われていたのだろうから。

*

「きゃああ！」

そんな悲鳴が聞こえたのは、丁度俺達が食堂へ行こうと、階段を下りている最中のことだった。俺達と同じように階段を下りて、或いは上っていた他の生徒も、何事だろうと立ち止まり、悲鳴の出所を探す。

「多分、三階だぜ」

「何が……」

俺達も気になったので、二人頷きあって、三階へ向かうことにした。パンは後でも構わない。……売り切れなければ。

三階の廊下へ出ると、どうやら四——いや、五組の前で女子が叫び声を上げたようだ。壁際に座り込んで過呼吸気味になっている女子と、彼女を落ち着かせようと躍起になっている生徒が数人見える。そしてその前、教室の扉のすぐ前には、それより多い十人程度の人だかりが出来ていた。

野次馬根性だ。先日的一件で、上級生には少しばかり嫌悪感があったが、出来るだけ目立たないように人だかりへ近づいて、何が起きているのかを確かめようとした。

「おい、マジかよ」

「お、俺、ちゃんと戸締りはしてましたよ？　なのに……」

「とにかく、警察だよ、警察！　それと救急車も！」

「そ、そうだよ、誰か携帯くらい持ってないのかよ」

教室の前の生徒達は、口々にそんなことを言っていた。その様子から察するに、何か室内で、警察沙汰になるような事件が起こったらしい。救急車、ということは、怪我人もいる？

けれど、その時はまだ、血も凍るほどの陰惨な事件が起きたとは思わなかった。ただならぬ、禍々しい空気を感じながらも、それだけは否定していた。

……だから俺は、佑也が袖を引っ張るのも気にせず、教室の中を、人ごみを潜り抜けて、覗いてしまったのだ。それを、すぐに後悔することになるとも知らずに。

そこには、想像を絶する光景が待っていた。

「なっ……」

「え？　え？　な、何なの？　翔斗……」

言えなかった。眼前に飛び込んできたその光景が、あまりに非現実的で、それを佑也に伝えることなど、すぐには出来なかった。……理解するのに途方もない時間を要した気がする。そしてその時、もう隣には、自分の目で確かめようと、俺と同じく人ごみを掻い潜ってきた佑也の姿もあった。

「ひっ！」

そう。誰もがそうやって、驚愕する。だって、こんなことは、自分達の暮らす場所では、決して起きないと信じているから。

だが、それは確かに今、ここにこうして降臨しているのだった——。

「あれ、淵江だろ！」

「そうよ、毎回あそこでサボってるもの」

「首に、首にあんな……」

三年生達が、被害者の名前を口にしている。淵江という名前らしい男。後ろの窓際の席で、頭だけを窓の外へと突き出しているような体勢になった男。それはまるで、そびえ立つ松の木の天辺を見上げているようにも見えた。しかし……。

その男は、間違いなく、……死んでいた。何故断言できるか。それは、彼の首元に、彼自身のネクタイが、深く食い込んでいるから。そしてその周りが、赤黒く変色しているから――。

携帯を持っている生徒はようやく、怯えた様子で警察や消防に連絡していた。言葉はたどたどしく、「しっかりしろ」といった声が周りに飛ぶ。だが、その声もまた震えている。「ど、どうしよう、何かしたほうがいいのかな」

「いや、触るな。とりあえず先生に伝えてこよう」

数人の生徒が職員室へ走り出す。俺達はその姿を茫然自失の体で見送った。そして、また視線を現場へと戻す。

電気の付いていない教室。男子の制服が畳まれて置かれているいくつかの机。そして、一つだけ開いている窓と、そこから首を出している男の、死体。

そうだ、あそこにあるのは紛れもなく死体だ。上級生の、淵江という男の、死体。

ああ、そして、もう自分でも気付いているだろう？ そのことを。不自然な体勢のせいで、半分以上は見えないが、あの醜悪な顔を、俺は間違いなく覚えていた。

そうだ。淵江という死者は、……あの日、春子に声を掛けてきた、不気味な男だったのだ……。

「そんなことって……」

奇妙な廻り合わせに感じた。ついこの間、春子を脅してきた相手が、いまここで無残にも事切れているなんて。

そのことに、何か意味があるのではないかと思った。単なる思い付きだったが、人は法則性を見つけたがるものだ。

何故、淵江は殺されたのだろう。あんな風に、首を絞められて。

誰が、淵江を殺したのだろう。あんな風に、首を絞めて。

……俺が朝から感じていた不穏な空気は、恐らくこのことだったのだ。

この事件が起きることを、恐らく俺は、予知していたのだろう――。

どたどたと慌しい足音がこちらに近づいてきた。さっきの生徒が、先生を連れて戻ってきたのだろう。「どいてどいて」という声が聞こえる。脇腹に手が差し込まれ、俺と佑也は脇に退けられた。その間から、数人の先生が教室へ入っていく。

事件。殺人事件だ。テレビや小説でしか見ないようなことが、この光耀高校で、起こった。

それをしっかりと理解すると、俺の足は突然、がくがくと震えだした。

＊

淵江が殺されているのを発見してから、先生はすぐに生徒達を近づかせないようにし、警察と救急車の到着を待っていた。俺と佑也はそれからしばらく、何かに縛り付けられたようにそこから動けず、鑑識や救急隊の人達が到着して、幾つかの作業が行われ、死体が

運び出されていくまでを呆然と見守っていた。他の生徒も、大体同じような状態だった。昼休みもう終わる時間。俺達は最早食堂に向かう気にはなれず、佑也と共に四組へ戻ってきた。教室内では、真下の教室で起きた騒ぎに、何事かと全員が窓の傍に集まっていた。

「あ、翔斗くん、小林くんも！」

村越と二人で窓から頭を出して、下を眺めていた有希がこちらに気付く。「何があったか見てた！？」

「あ、ああ」

俺は曖昧な返事をして、佑也の方を見る。彼の方は、答えたくないというように、ゆるゆると首を振った。

「ヤバいことになってた」

仕方なく俺が言うと、

「ど、どうしたこと？」

村越も、こちらを振り返った。

俺の言葉に、周りのクラスメイト達も反応して、何が起きたのか教えてくれとせがんでくる。佑也は思い出すのも嫌だという風に、俯いて唇を噛んでいたので、仕方なく、俺が簡単に話すことにした。

「……生徒が死んでた」

それを聞いて、どよめきが起こる。

「死んでたって……」

「じゃあさっきの騒ぎは」

「何か、あの首出してた生徒……」

どうやらこの教室の窓から見下ろすと、淵江の顔が見えていたようだった。

「どうも、殺されたみたいだった」

またどよめき。

「殺されたって何だよ？ 誰かに刺されたりしたのか？」

体育委員の三吉が聞いてきた。俺は首を振って、

「首を絞められてた」

それだけを言った。

あまり語りたくは無かった。自分の見た光景を、出来れば夢であってほしいと思っていた。現実の世界から、どこかで足を踏み外したようだった。それくらい、唐突で、実感のない……。

今は、硬く口を閉ざしている佑也が正しいように思えた。貝のように口を開きすことが、最善のように思えた。

更なる追求をされそうになった所で、校内放送のチャイムが鳴る。冷静さを装ってはいたが、若干上ずっている、そんな女性の先生の声だった。

「生徒の皆さんに連絡します。今日の午後からの授業は中止となりますので、生徒の皆さんはそのまま教室で待機しておいてください。繰り返しします——」

*

その日の放課後。俺達は、帰宅命令を無視して演劇部の部室へ集まっていた。あの時現場にいなかった残りの五人は、俺と佑也にしつこく事件についての説明を求めた。有希と村越の二人も、あの程度では当然納得しなかった。まずは座らせてくれ、と頼んでから、全員が座布団の上に座り、俺と佑也が交互に詳細を語ることになった。

「殺されたのは淵江っていう男子みたいだ。同じ組の、つまり五組の生徒が名前を呼んだから、そうに違いない。何でも、淵江は毎回体育をサボって、窓際にある自分の席で眠りこけていたんだと」

「その、淵江は、自分がしていたネクタイで首を絞められて殺されているみたいだった。窓が開いていて、そこに首を突っ込むような格好で死んでいたんだ」

「酷い……」

女子メンバーが口元を押さえる。

今は午後二時、普通なら五時間目が終わろうという時間だった。集まってから二十分ほどが経っていたが、注意をしにくる先生もいない。ここは秘密の隠れ家のように機能しているらしかった。

殺人事件が起きた、という情報はすぐに広まったが、生徒が死んでいるという情報が伝わって来るのが躊躇われたのか、野次馬の第二波が押し寄せたのは、死体が外に出された後。そのため、俺達は二年生で事件現場を目撃した数少ない人物になってしまったようだ。事件の情報と共に目撃者である俺達のことにも広まってしまい、ここへやってくるまでどこへ行っても質問攻めで困惑した。尾行する奴までいたので、複雑な動きをしてここまで来なければならなかったくらいだ。あの時口をつぐんでいれば、或いは見ていないと嘘を吐いていれば、と心底後悔した。

「何で殺されたんだろうね……。事故や自殺だって身の回りで起きるのが信じられないのに、殺人だなんて……」

春子が言うので、俺は少しばかり声のトーンを落としながら、

「それがさ」

「……何よ、何なの」

村越が息を呑む。

「実は、その殺された淵江っていう生徒……。先週春子が声を掛けられた、あの生徒だったんだよ」

一同は、示し合わせたように驚きの声を上げた。

「あの人が……」

春子が目を見開き、口元を押さえる。驚愕と困惑が入り混じった表情だった。

「何があったんだろう？ それにしても、すごい偶然だな……」

橋谷はそう言ったが、望月は、

「いやいや、もしかしたら偶然じゃないかもしれないよ？」

「どうしてだよ？」

「特に根拠はないけどさ。ほら、春ちゃんって、すごく可愛いでしょ。その、淵江っていう人が声を掛けてきたみたいに、他にも春ちゃんに惚れている人がいるかもしれない。そういう人の一人が、淵江を危険人物だと思って殺しちゃった……とか」

彼女は、お得意のこめかみに指を当てる仕草をしながら、やや自慢げに自説を語ったが、「何だよそれ。アイドルの猛烈なおっかけとかじゃあるまいし。殺人なんて方法をとらなくとも、気をつけてって声をかけるとか、先生に報告しておくとか、もつと直接的だしでも、喧嘩を売るとかそのへんで終わってただろ、絶対」

「いやいや、たとえばその喧嘩が、ああやって首を絞める結果になったかもしれないし」「そんなことあるかねえ」

淵江は柄の悪そうな生徒だったので、仲間内での揉め事、というのならもしかするとの可能性はある。だが、喧嘩でネクタイを使って首を絞めるようなことがあるだろうか？ 殴り合い以上にはならない気がするし、不意を突いていきなり襲い掛からない限り、そんなことは出来ない気もする。この時ばかりは、橋谷の方が正論を言っているように思えた。

春子は黙り込んだままだ。望月の仮定で、自分が殺人事件の発端となったのかもしれない、と罪悪感を感じているのだろう。詰め寄られたのは彼女の方なのに、可哀想だ。

「理由は今のところ不明だ。望月も、あんまり穿った考え方はするな」

「はい……」

俺が目でサインを送ると、望月は春子が顔を伏せているのを察したようで、しゅんとなつて頭を垂れた。

「……ただ、どうして淵江が殺されたのかは、どうしても気になるよな。今みたいに、春子に関わってるだとか考える連中も出てくるかも分からない。あの時、淵江の他に二人、三年生がいたからな」

半数くらいが、こくりと頷く。その内村越が、

「私、その辺りのことをちよつと調べた方がいいと思うな」と提案した。

「春子が淵江って言う生徒に声かけられたのも、その淵江が殺されたのも、どっちも突然のことで、おまけに短期間に起きたから関連性が高いと思われそうだし。そういう疑いが残るの、やっぱり春子にとつても私たちにとつても嫌なことじゃない？」

「うん、それはそうだよな」と有希。

「でも、殺人なんだから警察がちゃんと調べてくれるでしょ？ 心配するほどのことかな」

「甘いわよ、佑也。その警察が、まず初めに目をつけるのが春子かもしれないわ」

「でも、泉ちゃんが正直に話せば、すぐに疑いは解けるだろうし……」

「簡単には信じないわ、きつと。それよりも、私たちが今のうちに、春子が無関係だつてことを証明しておいた方がいい」

「光代ちゃん……」

ふと隣を見ると、春子が村越を見つめ、目を潤ませていた。……こんな表情を見てしまうと、村越に賛同せざるを得ない。

「演劇部の仲間が疑われるっていうなら、その疑いは仲間が晴らしてやらないといけないよな。俺はいいと思うぜ、調べてみるの」

「うーん……でも、俺達が調べて成果があるかな？」

「そこは努力次第だろう。そんなに自信なさげなこと言うなよ、佑也」

「あ、ごめん」

佑也はまた悪い癖が出たと、ぺこぺこ頭を下げる。

「けど、面白そうではあるよな、そういう探偵ごっこって」

「ごっこじゃなくて、やるなら本格的にしたいわね。ウチ、そういうのもちよつと好きだし」

橋谷と望月は、乗り気のようにだった。有希も、さつき村越に賛成していたし、依存はないということだろう。

「調べていくうち、犯人まで分かっちゃうかもしれないわ」

「はは、さながら少年探偵団だな。いや、高校生はもう年齢的にアウトか？ とにかく、それじゃあ皆で調べることにしようか、淵江のことについて」

「うん。演劇部探偵団結成だね」

全くネーミングセンスが無かったが、それが望月だ。クレインゲームで取ってきた、白くて丸い不思議生命体のぬいぐるみに、雪見大福と命名するのが望月だ。

「ありがとうね、皆。……私も、自分のことだし聞いてみようかな」

そう言つて、春子はようやく微笑んだ。

こうしてこの日、少年ならぬ演劇部探偵団が結成され、淵江の死の原因探しが始まった。この時はまだ、後に起こる不和を、悲劇を、知る由も無かったのだが――。

幕間 木本剛志からの手紙

——だから俺は、翔斗が言った通りの方法で、淵江大吾を殺した。あいつにいいめられていた頃に夢想していた計画を、あの時になって実行したんだ。そしてそれは思いのほか上手くいった。俺が木本剛志であった時なら疑われて然るべきだったのだけど、別人として過ごしていたから、俺に疑いの目はまるで向かなかった。皆も、まさか俺が犯人だとは思っていなかったみたいだし。

あのトリックは多分、推理小説が好きだから考えついたんだろう。俺が推理小説を好きだということは、例の文章でも分かっただろうけど。俺はたった一つ、彼があんなことさえしなければ、事件は際どい所だけど、決して解明されることはなかったんじゃないかと思うよ。

……俺は、淵江大吾を殺したことを、後悔はしていない。あのままあいつを野放しにしていれば、やがて胸が張り裂けそうになるほど痛ましい破局が訪れていただろうから。ただ、事態が予期せぬ方向へ進んでいるらしいことが分かってから、俺は迷いを抱き始めたんだ。

淵江を殺した時は、俺には二つの目的があった。自分が木本剛志であるという事実を隠すことと、春子ちゃんを守ること。そしてそれらはどちらも淵江を殺すことで達成できた。しかし、春子ちゃんが事件の容疑者になってしまうのではないかという話がメンバー間でされた時、俺の目的はこれから、両立しなくなるのだということを痛感した。

仲間を、春子ちゃんを守るか。それとも、俺という存在を守るか。その時も俺は、人殺しの罪を背負っていた。だから絶対に、俺が犯人であることも、俺が木本剛志であることも、知られたくはなかった。……でも、皆に、春子ちゃんに悲しい思いをさせるのも嫌だった。絶対に嫌だった。相反する二つの思いに、俺はひたすら葛藤し続けた。

だけど、あの時——……

三章 殺人の因果

翌日の空は、昨日の鈍重な厚い雲が嘘のように綺麗さっぱりと無くなっていた。良くある例えだが、見上げれば落ちていきそうな、澄んだ空色だった。不吉な何かが、とりあえず一旦は過ぎ去っていったのを、俺は感じた。

自室を出て、階下に行くと、父親が朝食を口に運びながら、テレビのニュースを食い入るように見つめている。俺の分の朝食を、盆に載せて持ってきた母親までが、その場に凍りつくようにして、画面を見つめていた。

俺はその内容を見て、得心した。

「翔斗、これお前の学校か」

父の言葉に、俺は無言で頷く。

「……物騒だな」

再び画面に視線を戻して、父はぼそりと呟いた。

テレビに映っているのは、あの強面の顔だった。……テロップには、淵江大吾、とある。昨日の殺人事件がニュースになっているのだった。

「死亡した被害者は、都立光耀高校に通う男子生徒で、体育の授業が終わった後、教室に戻ってきた生徒が、倒れている被害者を発見したということのようです。学校側は、警察からの発表があるまでコメントは差し控えさせていただくとの……」

「この近くにまだ犯人がうろついているかもしれないから、気をつけるのよ、翔斗」

「う、うん」

母は、犯人が外部の人間だと思っているようだ。恐らく、ニュースでは現場の状況などについて語られていないのだろう。だが、詳細を知っている俺からすれば、犯人が外からやって来た暴漢だとは考えられなかった。あの事件の犯人は、まず間違いなく学校内の人物だ。

「ほら、早く食べなさい。急がないと遅れちゃうわよ。昨日は遅刻だったんでしょ」

「おっと、そうだった」

急いで朝食の並ぶ席に着き、俺は合掌する。そして箸を手にして、目の前の料理をかつ込み始めた。

*

昨日の天気の名残はそれでもあるのか、幾分か涼しい風を受け、俺は初夏の麗らかさを肌を感じながら、通学路を自転車で走りゆく。

淵江が殺害されたことは、すぐに学校中に広まったが、学校が休校になることはなかった。大きな混乱を避けたという意図があるのかもしれない。

学校に着くと、校舎横にある駐輪場——所構わず自転車止められ、かなり混沌としていた——に何とかスペースを見つけ、自分の自転車を止める。そして玄関に向かい、下足ロッカーの鍵を開けて、靴を履き替え校内に入った。

八時二十九分、いつもながらぎりに教室に転がり込んで、村越と有希に挨拶する。それが終わった直後に、きりよくチャイムが鳴った。

「おはようございます。では、出欠をとります」

井上先生は、極めて気さくな人物なのだが、授業中と朝礼、終礼の時は職務に忠実で、硬い言葉で生徒に注意をしたりする。何人かの生徒が、昨日の事件のことを質問しようとしていたが、彼は「静かに」と言うばかりで、何も語ってはくれなかった。それでも、心苦しそうな顔をしていたのは見て取れた。

「昨日、警察が色々調べていったらしいんだけど、事件についての詳細はあんまり分らなかったみたい」

出欠確認が終わり、先生が去った後に、有希が話しかけてくる。

「俺も似たようなもんさ。ニュースでも、詳しいことは何も言っていなかったしさ」

「でも、望月さん小林くんは、何か情報を仕入れたみたいだよ。小林くんはお姉さんがいるからだけだね。望月さんは……話好きだからなあ」

佑也には、高校三年生の姉がいる。今までに数度、彼の自宅で顔を合わせたくらいだが、すらりとした身なりで、結構な美人だった。この光耀高校に在学中らしいので、学校でもその内会えるかもしれない。現場では見なかったが、彼女なら淵江について詳しく知っていてもおかしくないな。

望月の方は、喋り好きな性格のおかげで、色々なクラスに友人がいる。そうした友人の所属する部活の先輩なんかも仲が良いらしく、かなり顔が広い、というのが演劇部メンバーの共通意見だ。この件も、三年生の友人に聞いたのだろう。

「どんな情報なのか気になるが、とりあえず放課後になってからだな」

「そうだね」

有希は首を縦に振った。長い髪が揺れる。

「さて、一時間目は古典か。今日はちゃんとやってきたぜ、宿題」

「あつ」

古典の教科書を取り出した有希は、そのまま凍りついた。「忘れた」

「おいおい、この前国語の宿題で懲りたばかりだろ。……仕方ないな、ほら」

リアクションが大げさで面白かったので、俺は有希に宿題を見せてやることにした。

「翔斗くん、ありがとう……。いや、本当に助かったよ」

プリントを受け取りながら、有希はそう言って感謝の意を示した。微かに目が潤んでいる。そこまでありがたいか。

「ただ、そのプリント問題三十問あるから、多分提出に間に合わないぜ」

「えっ」

俺が言うと、有希はまた身を固まらせるのだった。

*

……俺は、幼少時から物事を信じ込みやすい性格だった。クリスマス之夜には靴下を吊るし、テレビのUFO映像には目を輝かせ、アニメで魔法や超能力を使う人物がいれば、もしかしたら自分にもそんな力があるんじゃないだろうかと思っただけのことだった。勿論、今ではそういう話を信じる純粋な心は無くなってしまっているのだが、現実的な話においては、まだ俺の悪い性格は直っていない。

例えば、テレビでよくやっている討論番組。賛成と反対の意見を持つ者が対立し、互いの考えを主張しあう。その中で、どちらかの人物が言葉に窮したりするのを見ると、そこらが間違っているように思えてくるのだ。実際何が正しくて何が間違いかなんていうのは、一概には言えない。ただ、何となくの雰囲気で、俺は優勢な方を信じてしまうのだった。温暖化問題だってその一つだ。二酸化炭素の排出が影響を与えていると考えている人が大多数だから、俺もそう思っているが、その仮説がひっくり返るような事実が浮かび上がって、あつと言わされるかもしれない。人間が地球の環境をそこまで狂わせることが出来る筈ないだろう、という人もいる。……大勢の意見に流されてしまうというのは、人間の弱さなのかな。どうなんだろう。もしそうなら、俺は心の弱い人間なのだろうか。

——ともかく。

今日の会では、そういった弱さが出ないように、自分の頭でしっかりと考えをまとめなくては。俺はそう、心に刻んだ。

別館三階、演劇部の部室内。長机の周りには、昨日のように七人のメンバーが座り込んでいた。珍しく、橋谷が本を読んでいる。机の上には、人数分の缶ジュースとスナック菓子が広がっていたが。

「和気藹々とした調査会だな」

「それがウチらの演劇部だし」

悪びれる様子もなく、駄菓子を持ち込んだ張本人の望月が言った。

「さ、それじゃあ皆気になってるだろうから、始めるとしましょうか。昨日の主役は翔斗くんと佑也くんだったけど、今日はウチも仲間入りよ」

「その代わり、俺は主役から陥落だな。ま、よろしく頼むよ」

謙遜したように言って、俺は白い歯を覗かせた。

「まっかせなさい」

これより、演劇部探偵団による調査会が始まる。

「まずはウチが説明させてもらうわね。ウチはもう、佑也くんから簡単に話を聞いたんだけど、佑也くんの話は事件背景に関することなの。つまり、誰が淵江を殺すに値する動機を持っていたか、ね。そういう重要な話は後に置いて、まずは基本的な事項から話したほうがいいでしょ。死因とか、死亡推定時刻とか、そういう」

「どうしてお前が死亡推定時刻とか知ってるんだよ」

聞いてみると、彼女はにやりと笑って、

「三年生と、それに仲のいい先生にも聞いてみたのよ。特に先生の方は、簡単に事情を聞かれたらしくて、捜査情報をいくつか教えられたみたい」

「なるほどなあ……」

こんな事件が起きたときには、彼女の情報収集力を羨ましくも感じる。殺人事件なんて、生きているうちに遭遇すること自体、稀なのだが。

「じゃあお願い、ゆみちゃん」

「任せて、春ちゃん。では説明を始めますと。……事件が起きたのは五月二十六日の水曜日。四時間目が終わった後、三年五組の女子生徒が、死体を発見したのよね。その後女子生徒は悲鳴を上げて、何事だ、と周りにいた人たちと、翔斗くん、佑也くんが見物に行った……」

「軽々しい行動だったと反省してるよ、本当に」

「うん。あんな場面を見るとはね……」

佑也は身を震わせる。

「絞殺された死体を見るなんて、恐ろしいわよね。ウチも目撃してたら、叫んじゃったかも……。二人が当日説明したとおり、死因はネクタイで首を絞められたことによる窒息死だったみたい。先生の話なんだけど、死亡推定時刻は十一時四十分から十二時十五分といったところ。四時間目の最中に、淵江は殺されたってことになるわ。首を絞められてすぐに発見されたわけだけど、あんまり時間の絞込みは出来なかったみたい」

「結果的には犯人にとつていい具合になったわけだけど、犯人はすぐに見つかることを承知で淵江を殺したってことになるよね」

有希が意見を出した。望月は「そうね」と頷く。

「けど、突発的な犯行——例えば喧嘩がエスカレートして、とかかもしれないわよ」

眉をしかめながらそう言ったのは村越。しかしそれに対して望月は、

「いや。この事件は突発的な犯行じゃないと思うわ。何故かと言えば、この事件にはありありと犯人に計画性が窺えるから」

「計画性ねえ」

「例えば光代ちゃん。犯人は凶器にネクタイを使ってるのよ。被害者自身がつけてたネクタイをね。これは、犯人が凶器を持ち込んだら、その痕跡とかから足がついちやうかもしれないと思ってるのよ。と考えると考えられない？ それと、これはウチの予想だけど、犯人は手袋をしてネクタイに指紋がつかないように注意してたんじゃないかしら。警察も凶器から指紋が出れば、その人を当たってみる筈だし、まだそういう兆候がないしさ」

「指紋がつかないように注意してたっていうのは尤もらしいけど、ネクタイの方はどうかしらね。腹が立ってネクタイを思いっきり引っ張ってたら死んだ……そういうことも有り得るわよ」

殺人事件の推理をしているのだから仕方ないのだが、村越の奴、さらっと怖いことを言うな。

「ううん、それは否定出来ないけどね。でも、光代ちゃん。突発的犯行っていう説を否定する問題が、もう一つあるのよ。しかも、これは本当に難しい問題で、決定的なの」

「何だよ、その問題って」

俺が聞くと、慌てるな、とでもいうように望月は人差し指を立て、

「今からちゃんと言うわよ……。五組の生徒が淵江の他にいなかったのは、五組と六組がその時間、体育だったからなんだけど。そのクラスの体育委員が言うにはね？ 淵江は毎回体育の授業をサボっているから、自分の席で寝ているのを起こさずに、そのまま教室の鍵を掛けて一階の体育館に向かったらしいの。そして、体育委員より先に帰ってきたのが、第一発見者の女子生徒なわけ。面倒臭かったんでしょね、その子は鍵を学年室に取りに行かずに、そのまま教室へ向かい、そして扉を開けてみた。すると、扉は何の抵抗も無く開いた……。これっておかしいでしょ？」

「そうだね。鍵を掛けたはずなのに、帰ってきたら鍵が開いていたことになる」

佑也が相槌を打った。

「そうなのよ。戸締りを確認した生徒は几帳面で、廊下側の窓の鍵もしっかりと掛けたら

しいし。おまけに、三年生の学年室には、五組の学級委員が鍵を掛けに来た後、死体が発見されるまで一度も生徒の出入りが無かったって先生が証言してる。学年室を留守にしたことは無いって……だとすると、犯人は教室の扉が開いていないのに、室内へ入れたことになるのよ」

「犯人は密室内に侵入して、淵江を殺したって事になるのね……」

その不可解さに、確かな計画性を感じるようで、村越も呟くようにそう言って俯いた。突発的な犯行、という線は消してもよさそうだ。

密室。推理小説などではよく、密室殺人がテーマになっているものがある。犯人は、犯行現場にどうやって鍵を掛けたのか、もしくはそう見せかけたのか。そして、犯人は何故、現場を密室にしたのか……。昨日の事件は、それと少し似ている。密室を構築した方法ではなく、密室の中に侵入した方法が問題だ。

――だが、よく考えてみれば、あの教室は完全な密室だったわけではない。

「淵江は窓から首を突き出して死んでたよな。つまり、窓は開いてたわけだ。何とかして窓から入ることは出来る」

「窓からか。扉から入れないなら、まあそうなるよな」

橋谷が相槌を打った。すると望月が、

「その可能性も勿論あるわ。けど、どちらかと言えば現実的なのは、誰かに起こされた淵江自身が鍵を開けた、という可能性じゃないかしら？」

「あ、そうか」

望月が挙げた説の方が、現実味があつた。窓から苦心して侵入するより、淵江自身に開けてもらった方が早い。

かと思っていると、

「でもよ、望月。犯行時間は多分、授業中だぜ？ その時間に、開けて、とか声を掛けたら、扉を叩いたりしたら、誰かに気付かれる可能性が高いんじゃないか？」

などと橋谷が鋭い指摘をした。

「おっと、その点を考慮してなかったわ。ウチもまだまだね」

いけない、いけない。俺も望月の意見に流されかけた。議論は確固たる証拠が提示されるまで、信じたりはしないと決めたばかりじゃないか。

……しかし、それだとやはり、窓から侵入する以外の方法は無いと言うことになる。

「窓から入る人なんて、それこそ誰かに気付かれたりしないかな、普通」

「でも、六組も合同で体育だし、四組の生徒は後ろを向かないと五組は見えないわ。窓から入った可能性だって十分にあるわよ」

「確かに。望月の言うとおりだね……」

佑也がうんと唸る。「でも、窓から入るなんて器用なこと、出来るかなあ」

そこが難しいところだ。どこから外へ出たか、というのも見当がつかない。可能性があるのは、三年六組と二年四組か。それ以外の教室は生徒がいただろうし、学習教室は現場から離れているので、生徒のいる教室の壁を通ることになって、確実に誰かに見つかってしまう。

「うちのクラスは鍵掛かってたから……。佑也の所も同じだろ。学年室で鍵が拝借されてないか確認しないと正確なことは分かんないけどさ」

「そうだね」

佑也がこくりと頷く。

「あと橋谷、お前は五組だろ？ 窓から何か見えなかったのか」

「俺は実際の席じゃないんだよ。というよりウチの先生、席は自由に決めてくれとか言うから、授業中に居眠りしてる奴ばっかりが窓側にいるんだ。どうにかしてほしいぜ」

……それでは目撃情報なんかは期待できそうもないな。

どうやらこれ以上は、現時点では進めない。学校内には、生徒、先生、事務員と、五百人以上の人間がいるのだから、犯人の特定もこの程度の情報だけでは不可能だ。

「四階の教室の鍵については、また先生に聞きに行こう。それなら望月じゃなくても聞けるからな」

「お願いするわ」

望月が、ウインクをして、眼鏡をぐいと指で押し上げた。

「情報感謝するよ、望月。大分事件の詳細が分かった」

「ええ、どういたしまして」

俺が言うと、彼女は仰々しく頭を下げる。

「……さて、と」

頭をそろそろと上げてから、望月は短い髪をかき分けた。

「それじゃあ、おほとりの佑也くん。そっちの話をしてあげなさい。ちよつと重い話だけど」

「う、うん」

重い話？ 一体事件の背景に、何があるというのだろうか。

「ええと、俺のは姉に聞いた話だから、まるで俺の手柄じゃないんだけど……」

佑也はやや照れたように頭を掻いた。姉に聞いたのだろうということは、だいたい予想がついていたので、特に誰も口は挟まなかった。

重い話。それが意味するところは何なのだろうか。一体淵江という生徒は、どのような人物だったのだろうか。ただの不良ではなく、深刻な揉め事を起こすような人物だったというのか。

あれこれ考えるまでもなく、今にも佑也の口からそれは語られるのだが、それまでの間に色々と想像してしまった。

……どこかで一度、重い話を聞いた事がある気がする。

「……どうも淵江はね。一年前にこの高校で起きたいじめ事件で、被害者の子をいじめ続けていた張本人だったらしいんだよ」

——この教室、昔いじめがあった教室らしいんだ。ゆみから聞いたんだけど。

村越の言葉が甦る。

その時俺は、部室の空気が急激に重くなったような錯覚に陥った。

＊

一年前、この光耀高校では、一人の生徒がいじめを受けていた……そんな話を、望月から聞いたのだと、以前村越が俺達に話していた。昼休みのことだ。

被害者の生徒は、一年前の丁度今頃に登校拒否となって、以後誰も姿を見ていないらしい。その生徒は去年の二年生、つまり今の三年生であり、当時その生徒をいじめていたのが、他でもない、淵江だったそうだ。

「いじめを受けていた子の名前は、木本剛志。こんな名前だし、男子生徒だろうね。本が好きな子だったらしくて、学校の図書室にいることが多かったみたい。引っ込み思案な性格で、友達も全然いなかったらしいんだ」

いじめられっ子の典型的なパターンのような気がする。木本という生徒には悪いが、俺はそんな感想を抱かざるを得なかった。

「一方、昔から粗暴な性格で、気に入らないことがあるとすぐに手を出すような危険児だった淵江は、学校中から恐れられる存在だった。そんな彼にとって、木本剛志という気弱な生徒もまた、気に入らないものの一つになったわけだね……」

佑也は静かに語る。彼もまた、木本剛志というそのいじめられっ子と同じような性格の持ち主だ。自分とその生徒を重ね合わせて、沈痛な面持ちになっているのかもしれない。

「淵江には、この前翔斗と泉ちゃんが会ったみたい、何人かの話し相手はいるみたいなんだけど、皆面倒ごとが嫌いで、淵江に話を合わせて彼の機嫌を取っていただけみたいだね。だから、気が置けない友人は淵江の方にもいなかったわけで、実質剛志くんをいじめていたのは、彼一人だったんだ」

「じゃあ、誰かが気付いて止めてあげられたんじゃないの……？」

春子が言ったが、佑也は無言で首を横に振った。

「皆、そう思うよね。でも残念なことに、友達でもない剛志くんを助けよう、と思う人なんて、一人もいなかったんだよ。誰も、彼に手を差し伸べる勇気が無かったんだ。そんなことをして、自分まで巻き込まれてしまうのが、皆怖かったんだろうと思う」

「全部が全部、典型的なパターンだな、そりゃ。いじめっ子といじめられっ子。そしてそれを見て見ぬ振りするクラスメイト達……。いじめが育つ絶好の状態だ」

どこの学校でもありそうなことだった。まだ、他の生徒が積極的に加担していなかっただけ、ましと見るべきだろうか。いや、見て見ぬ振りをしていた時点で、いじめられっ子を絶望させるには十分だっただろうな。

「いじめが始まった時期は、去年じゃなくてももう少し前、一昨年の秋頃からだったんだって。つまり一年生の頃から、剛志くんはいじめを受けていたんだね。だから、そういう事実があったからこそ、彼は友達を作ることが出来なかったのかもしれない。関わると、巻き込まれるから。誰も剛志くん、手を差し伸べられない……」

自分だったら、どうしただろう？ 俺は考えてみて、胸のむかつきを覚えた。……自信は無い。その子に手を差し伸べて、救ってあげられる自信など、全く。相手が一人だったとしても、俺は今の平穏を守りたい、だから静観しよう、と思うだろう。知りもしない生徒一人より、見知った友人達との満ち足りた学校生活を、当然優先するに違いない。静観なんて言葉が良すぎる。見捨てたも同然だ。

「まあ、彼自身控えめな性格だったから、秋になるまでに友達を作れなかったんだろうけど。高校に入ってすぐ、誰かと仲良くなれてれば良かったのに……」

佑也は、ここにはいないであろう彼に、同情するかのように言って、溜め息を吐いた。

木本剛志の痛みが、彼にはきつと、一番わかってる。

「……淵江によるいじめは、半年以上続いたらしいよ。勿論当事者はもういないから、詳しくは分からないけど。ただ、一つ二つ生徒が覚えている事件があつて、それがいじめ終結に、いい意味でも悪い意味でも一役買っていたみたい」

「それは？」

橋谷が聞く。すると佑也は、入り口扉、いや、本館の方を見やって、

「ほら、この高校に生えている、松の木は皆当然知ってるよね。美術室の前に植わつていて、翔斗達のクラスから見える松の木。あの松つてさ、生えている地面の周りに鉄柵をしてあるじゃない？ 生徒が近づけないように。あれ、表向きは生徒がふざけて木に登らないようにつてされているんだけど、実は違うんだ」

「まさか……」

「そう、そのまさかなんだよ」

春子はその先を悟り、顔を歪める。かつてのいじめられっ子の境遇に、酷く心を痛めているようだった。それは皆同じだったが。

「どうしてそんなことをするのか理解できないけれど、淵江は木本くんを、思い切り苦しめたかったんだろうね。淵江は、木本くんを松の木に登らせたらいいんだ。かなり、卑劣な方法でさ。体育の授業を以前からサボりがちだった淵江は、誰もいなくなった教室で、木本くんの鞆を取つて、それを松の木に向かって投げたんだよ。その年も彼は、彼と木本くんは、松の木が見える組にいたから」

そして、木本くんは鞆が無くなっていることに気づく。淵江が笑う。犯人は分かりきっている。だけど、何も言い出せない。目撃者はいない。頼れる人もいない。だから、木本くんは自力で取り戻すしかない。その為に、松の木を登るしかない……。

「救われない話ね……」

「そうだな……」

村越の言葉に、俺は神妙に頷いた。何か、変えられなかったのだろうか。難しい問題では、あつたけれど。

「死の原因に重要な意味を持つっていうのは、もう分かったよね？ 要するに、この件がはっきりしてくると、容疑者として浮かんできてる人がいる」

「そうね。あくまで、今もここにいればの話だけど」

「うん。光代ちゃんの言うように、もしいじめ事件の被害者、剛志くんがまだこの町にいたなら、彼が最も怪しい人物になる」

長きに渡つて虐げられ続けてきた、その復讐か。なるほど、それは殺害に踏み切る十分な動機となる。追い詰められた人間は、最後になつてその鬱積を爆発させて、普段は考えられないような行動に出るものだ。

木本剛志はまだ、この町にいるのだろうか。姿を見たという生徒がいないので、学校には来ていないと思われるが……もし、彼がまだこの町にいたとすれば、すぐに疑いの目が向けられるのは必至だった。

「けど、木本って奴が犯人だったと仮定するとき、ハードルは高くなっちゃうな。登校拒否の生徒なわけだから、堂々と玄関から入ったら、先生達に「よく帰つてきた」なんて大歓迎されて、目立ちそうだし。そう考えると、生徒や先生に気付かれないよう、校内に忍び込んで待機しておかなきゃいけないわけだろ？ それだけでも難しいってのに、あの

密室の問題であるんだから」

橋谷の言うとおりだ。更に難しい点として、木本剛志が果たして今学期の時間割を、そして最近の淵江の行動を把握しているのかということもある。事件があった時刻は、上手い具合に現場付近のクラスは皆移動教室で、そんな中淵江だけが授業をサボり、一人残っていたという偶然にしては出来すぎた状況だった。天が彼に味方した、とでもいうのか。そんなことは納得できない。

「計画的な犯行なのか、奇跡的な犯行なのか……」

「木本くんが犯人だとすると、素直に領けない点がいくつもあるのは、確かよねえ」

望月が呟く。隣の佑也は、喋り疲れたようであぐらを掻いて喉を潤していた。
「……さて」

咳払いをしながら、佑也がまた口を開く。

「もう一つだけ話しておこうと思うのが、淵江の交友関係についてなんだ。さっきも言ったように、彼の友人は殆どが話をあわせてるだけの、友人とも呼べないような人が多かったわけなんだけど。どうも最近、それ以外に関係があった生徒がいるみたいなんだよ」

「もったいつけるなよ。誰だ、それ」

橋谷が佑也の脇を小突く。

「ご、ごめん……淵江と同じクラスの、寺河香織^{てらかあや}っていう女子生徒なんだけど、姉が言うには、どうも付き合ってたんじゃないかって。度々二人で授業を抜け出してた時があるし、よく席を陣取って話し込んだりもしてたって。ただ彼女ははじめとは全く関係ないと思う。親密そうにし始めたのは、今年に入ってからだからね」

「ふうん……」

もしそれが本当だとすると、それが事件にどう関わってくるのだろうか。はじめの件とは違い、こちらはさほど重大な動機を想像できない。あるとしても、交際関係のもつれとか、その辺だろう。それくらいで殺人を犯すだろうか。まだ高校生だというのに。

……ただ、寺河という女子生徒が仮に犯人だとすれば、教室の密室の問題が解決出来るのではないだろうか。淵江と付き合っている、というのを聞いて、俺には一つの仮説が浮かんでいた。

「密室のことなんだけども、こういう解法はどうだ？ 淵江は体育の時間、よくサボって教室で寝ていたというのは周知の事実だった。それを寺河も知っていて、自分もサボると淵江に告げる。着替えの時間になって女子は教室から一度出て行かなくなっちゃいけないから、寺河は一旦教室から出るけど、淵江以外がいなくなってから戻ってきて、淵江に鍵を開けてもらって入る。後は、彼を絞殺して教室を出て行けばいい……。これで、あの現場状況が出来上がるってわけさ」

我ながら、いい推理だと思った。鍵を淵江が開けた、という可能性はまだ残っているのだ。普段寝ているというのだから、この犯行が可能になる条件は二つ、淵江がサボっている時間中に会いたいと思う人物であるということ、予め淵江に訪問を伝えておくことだろう。寺河はその条件を満たしている。

「ほうほう、上手いね。動機はともかく、そう考えると辻褄はあう」

望月が手を打った。「動機なんて正直、当人達にしか分からないしね。意外な事実が隠れてるってこと、あるかも」

犯人が寺河と仮定した場合、次なる問題はアリバイだろう。彼女があの日あの時刻に何をしていたか。それをはっきりさせる必要がある。警察よりも進んだ推理をしている気がする、さながら探偵のような気分だった。

「木本剛志と寺河香織。もう少し詳しく調べてみたいよな」

「今のところ、疑わしい人物トップツリーになっただけね」

「ランキングならせめてスリーくらいまでは欲しいけどな」

「と言っても三番目になりそうなのは……」

声を潜めながら、佑也はそつと目で合図を送る。……春子か。嫌なことを思い出した。

「確かに警察からすれば、疑わしいかもしれないけどな。俺達は春子を守るための捜査をしているわけだから、リストに入れるわけないだろ」

「そ、そうだよ。ね。ごめん」

佑也は慌てて頭を下げた。

とにかく、疑わしい人物をピックアップ出来たのは収穫だろう。ここから更なる事実を掘り下げて見なければならぬ。

「うーん。成果があるかどうかは分からないけど、ウチの友達とか、先生に聞いてみる？」

そう提案したのは、顔が広い望月だった。

「構わないなら、そうしたいな。仮説を作ったら、最後まで確かめなくなっちゃったし」

「なら決まりね。多分、今行っても大丈夫だと思うけど……聞きに行ってみようか？」

「待て。どこの誰に聞きに行くんだ」

「美術部よ」

望月は若干声を上げて言った。「絵の上手い友達がいるの」

「はあ、お前、漫画が好きだもんな。話よりキャラクターが好きだと言ったりもしてるし」

「そんなことは今いいでしょ。ほら、どうするの？」

望月の友人だとしても、他のメンバーからすれば他人だ。おまけに、彼女の知り合いとなると、趣味が特殊だったり話好きだったりする。……進んで手を挙げる者がいなかったの

で、俺は仕方なく一番に立候補した。

「俺は行くよ。自分が立てた推理だし、行かないや悪い」

「あ、じゃあ僕も行こうかな」

と有希。こうなると、

「じゃあ俺も行くよ」

「お、俺も」

「私もいく」

「うん」

と、芋づる式に、結局全員が行くことになった。大所帯で訪ねて迷惑じゃなからうか。よしよし。美術室は一階にあるから、行きましょ」

こうして望月を先頭に、俺達は美術室へ向かうことになった。

*

美術室は、松の木が植わっている場所の隣、つまり事件現場の真下に位置している。特別教室なので、教室二つ分の広さがあり、天井近くには、石膏で作られたヴィーナスやブルータス等の首像、或いは胸像が掛けられていた。

後ろの作品棚には、授業で作られた生徒の作品が並んでいる。まだ乾いていない粘土の像に、奇怪な形の針金オブジェ。去年俺が描いた、『空』をテーマにした絵も壁に貼られていた。どこが空なんだと橋谷に言われたことがあり、見ているとまた恥ずかしくなってくる。ちなみに橋谷は、乱暴に様々な色を塗りたくった結果、それが逆に味を出して、表現派の作品のようになっていた。まるで絵の才能が無いのに、一段と目立つ場所に貼られているのが少し癪に障る。

授業の際はごった返しているこの教室も、美術部が使っている時はがらんとしていた。どうやらこちらの部員も、一桁ほどしかないらしい。

イーゼルに画板を立て掛けて作業をしていた女子が一人、望月を見つけると立ち上がってこちらへやってきた。

「や、ゆみ。今日は一人じゃないんだね。まだ活動の最中なんだけど、何か用かな？」

「それはこつちもだけだね。活動なんて、ウチはあつてないようなもんだし」

「こら、一応目標は立てただろ」
「おっと、そうでした」

見た感じ、美術部も比較的自由な部活という感じだ。まず、顧問が見当たらない。うちのように、滅多に来ないのかもしれないな。それから、絵に集中している子もいれば、机を前に向かい合って談笑している子もいる。男女比は女子が多く、男子は二人しかいなかった。男子はやりにくいのかな、と思ったら、案外気さくに女子と話したりもしている。「えっと、はじめまして。私は岡美里おかみさとって言うの。ゆみとは一年生の時に仲良くなってるね」とはいつても、私四組だったけど。まあよろしくね」

どうやら望月と同じ話好きの人間らしい。はきはきとした話し方に少々気圧されながらも、俺達は口々に自己紹介をした。

「で、用は？」

「それがさ、昨日ちょっと聞いたじゃない？ 殺された淵江って生徒について。そのことについて、また先輩に話を聞ければいいなーって」

「ああ、水原先輩みずはらにね。分かった、じゃあ呼んでくる」

岡は、小走りで美術室の奥の女子の所へ駆けていった。その様子を見つめながら、俺は気持ちと和むのを感じた。先輩か。うちにも一人くらい、先輩がいれば良かったな。待っている間、橋谷はつま先で床を鳴らし、有希は前髪をしきりにすいていた。

いくつかやりとりがあつてから、水原という女生徒と一緒に岡が戻ってくる。

「おまたせ」

「淵江くんのことをもっと知りたいんだって？ ゆみちゃんって、案外物好きね」

水原さんは、長い茶髪を弄びながら、そう言つて口元を綻ばせた。

「そんなじゃないませんよ、水原先輩。昨日も言つたでしょ。……ウチの友達が疑われそうだから、事件について、ちょっと調べてるって」

「そうそう。そうだったわね。で、どの子？ 淵江くんが声を掛けた子っていうのは」

「わ、私です」

春子がおおずと手を挙げる。

「まあ、可愛い子ね。私だったらすぐ美術部へ勧誘してるわ。けど、そうね。淵江くんはもつとちやらちやらした人と付き合ってたばかりいたし……」

「どうやら、彼女も望月と同じような人物らしい。こちらは主に、趣味が。いや、望月とは反対の方だが……もしかして美術部の女子は、全員この先輩がスカウトした子だったりするのだろうか。」

それはいいとして、春子に一目惚れした、という可能性は、聞く限りあまりないようだ。「その付き合っていた人で、寺河って人のことを知ってますか？」

直球勝負で俺は聞いてみた。

「ああ、寺河さんね。最近になって淵江くんと付き合い始めた人だったわ。授業中に良く喋るから、皆に煙たがられてたみたいだけど……」

想像に違わぬ生徒のようだ。

「その人が事件の日、どこで何していたか分かりますかね？」

「うん？ どうして知りたいのかしら」

俺はかいつまんで自説を話した。水原さんはそれを聞くと、手で口を覆ってくすくすと笑う。

「ふふ、警察顔負けの推理力、といったところかしら？ そうね、誰も物音を聞かなかったようだし、考えられる可能性としてはそれが妥当かもしれないわ」

「あ、ありがとうございます」

否定の言葉が出なかつたので、俺は無性に嬉しくなつて、照れながら頭を下げた。いや、俺だってやる時はやるもんだ。

だが、浮かれているとすぐに現実を引き戻される。

「……だけど、残念ね。寺河さんがその日、学校にいたら可能性が高かつたんだけど」

「え？」

「いやね。寺河さん、その日は授業どころか、学校にも来ていなかったみたいなのよね」

その言葉に、俺はがくりとうな垂れるしかなかった。仲間達がこちらに失意の眼差しを向けてくる。つい先ほどとはまた違う意味で照れ臭かつた。……畜生。

「で、でも、だからと言って犯行が不可能ってわけじゃないですよ。学校を休んでいても、校内に忍び込んで犯行に及ぶことは出来るし——」

「——そして、そんなことをするくらいなら、学校を休む意味はあまりないわよね」

「う……」

痛いところを突かれた。学校を休むことで容疑を逃れられるわけがないし、体調が優れていないのなら、休む意味がない。そして体調が悪いのなら、わざわざその日に殺害を決行するとは思えない。

「矢井田くんだったかしら。蓋然性の高い仮説を考えることは上手いようだけど、もつと色んな可能性を考えないとね。一つの所で立ち止まってちゃ駄目よ。今考えていることと真相は、実はとても離れた所にあるかもしれないのだし」

「そう、ですね……」

ぐうの音も出ない。淵江が自身で扉を開けた、というのは妙案だと思ったのだが。可能性が全く無くなったというわけではないが、寺河が犯人だという根拠は薄弱になつてしま

った。

「残念だったね、翔斗くん」

有希が肩を叩いて慰めてきた。何だか情けない。

「教えてくれて、ありがとうございます。いや、未熟さを思い知りましたよ」

「そんなことないわよ。途中までは、見事な推理だったと賞賛するわ」

どんだん恥ずかしくなってくるので、これ以上はフォローしないでほしかった。

これで、容疑者の一人については聞いた。残るはもう一人だ。

「水原先輩、寺河さんのことは分かりましたけど、あともう一人、聞きたい人がいるんです」

望月が、人差し指を立てる。

「誰かしら？ まあ、予想はつくけれど」

「以前淵江にいじめを受けて、それを苦に高校から去っていった生徒……木本くんのことです」

それを聞くと、水原さんはやつぱり、というような顔をして、軽く息を吐いた。

「私、あの子については良く分らないわよ？ いや、多分生徒は皆、あの子のことを知らないと思う」

「それは……」

「私の口からは言いたくないけれど……そうね、関わってはいけないような、そんな空気が生徒の間で漂っていた。誰も話しかけられないし、見ようともしない。いなくなってから初めて、悪いことをしたなと思った……」

誰しも、自分が代わってあげようとはそう簡単に思えない。助けてあげようなどとは、思えないのだ。だから、それは仕方の無いことだろう。卑怯な選択だとしても、仕方の無い……。

「つい最近になって気付いたんだけどね？ 私も含めて、木本くんの顔をはつきりと覚えてる人、いないのよ。それってつまり、私達は自然に、あの子と顔を合わせないようにしていたってことなのよね……」

痛切な一言だった。

「……あの子について知りたいなら、先生の方が詳しいんじゃないかしら。うちの顧問は、昔二年生の担任だったから。度々話を聞いたりしてるかもしれないわ」

「本当ですか？」

「ええ、本当よ、矢井田くん。……いいわ、私から口を利いといてあげる。探偵を目指してる君への、私からのささやかなプレゼントと思って」

「あ、ありがとうございます……」

彼女は妖艶な人物だ、と俺は思った。妖しく、そして美しい。彼女に一度心奪われたならば、大抵の人は逃れられないような気がした。——でも、同姓好きな雰囲気漂っているんだよね、この人。

「先生の予定が空いたら、ゆみちゃんに言うから、それまで待ってて」

「はい。ありがとうございますっ、先輩」

望月は、手を額に当てて敬礼のポーズをとった。全く、彼女は動作が豊かだ。

そんなわけで、俺達は美術部を後にした。水原さんが、最後に身を翻し、柔らかな髪が

なびくのが印象に残った。

「なあ、望月」

「うん？」

「水原先輩とも仲良さそうだったけど、あの人とはどういう繋がりで仲良くなったんだ？」

「気になったことを聞いてみた。すると望月は、少しばかりためらいながら、

「まあ、言ってもいいか。……本繋がりよ、まあ、その、マイナーなやつ」

ああ、やつぱり。

四章 合鍵の問題

舞台上がパツと照らされる。そこには二人の少年と、一人の少女の姿があつた。三人ともここ、光耀高校の制服を着用しており、セツトもうちの教室と同じだ。男子の方は机にもたれ掛かりながら雑談をしているようだった。

「あのー」

扉の枠らしい大道具の手前側から、女子が声を掛ける。すると、笑い合っていた男子が振り返り、軽く首を傾げた。

「はい？」

女子は顔だけを室内に突っ込むようにして、

「このクラスの保健委員の、高田つて子いるかな？」

二人にそう言った。すると、二人の内右側の男子が、もう一人の男子の方を向き、見られた方の男子は顔を上げて、女子に何かを言おうとしていた。しかし、

「コウちゃん、高田つて知ってるか？」

と右側の男子が、今にも口を開こうとしていたそのコウちゃんに聞いた。

「え？ ええと、それは」

コウちゃんがややどもりながらも、何かを続けようとするのだが、その時舞台の袖から新たに二人の男子がやってくる。

「おう、ヨッシーとミツルじゃん。丁度いい所に」

「うん？ どうしたんだ、タカシ」

どうやらコウちゃんの隣の男子は、タカシという名前らしい。そのタカシは、新しくやって来た二人の内、ミツルの方から聞かれて、

「いや、ウチのクラスに高田つていう名前の奴いた？」

「さあ、知らないけど」

「じゃあヨッシーは」

「知らないよ。どうして？」

タカシはそれを聞き、少女の方へ向き直って、

「クラス間違えてるんじゃない？」

と言った。やや馬鹿にしたような調子だった。

「でも、ここ三組ですよね？」

「うん、そうだよ」

「じゃあ間違いないです」

このやりとりの最中、コウちゃんと呼ばれている少年は、ずっと俯いたまま震えているようだった。

「おおい、エツちゃん、ヨウスケ、ちょっと来てくれ」

タカシは更に二人の友人を呼んで、高田という名前の生徒がいるかどうかを聞く。しかし、二人とも首を振って、

「全然分かんない」

と言うのだった。

少女は困った様子で足をもじもじさせていて、それを見ていたタカシが、

「やっぱり、何か間違えてるんだよ。一旦戻って先生に聞いてきな」

「はい……そうします」

しゅんとした様子で、少女は帰ろうと身を翻した。

——と、その時になって、ずっと俯いたままだったコウちゃんが、急に顔を上げる。

「もう！」

彼が大きな声を上げると、舞台上の全員が驚いて、彼を見つめた。コウちゃんは、泣きそうな顔で、わざとらしく大きく息を吸って、

「僕の名前が高田なの！ あだ名しか覚えてないなんて、皆酷いよ！」

そこで館内に笑いの波が起こり、照明はフェードアウトしていった。

パチンという音がして、教室の明かりが点く。鑑賞中是不思議な緊張感が体を強張らせていたが、それがふっと抜けていくのを感じた。

「どうだった？」

「とても面白かったです。ありがとうございます、井上先生。こんなのが残ってたなんて」

「いや、お礼なんていいよ。君らが演劇に取り組んでるなんて、初耳だったけど。矢井田のことだから、てっきりあの時は体育系の部活を探してるんだと思ったよ」

担任の井上先生は、人のよさそうな笑みを浮かべつつ、リモコンを操作してビデオを停止させた。割と古いもののように、停止ボタンを押したときに、ガガツという音が聞こえた。

「部室にも古いテレビがあるんだろう？ 時々見て参考にするといいよ。十年くらい前のけど、文化祭の時のが後二本くらい残ってるから」

月の変わった六月一日。俺達演劇部のメンバーと井上先生がいるのは、六階にある生物教室だった。引き出し付きの実験机が等間隔に六つ設置されており、机の真ん中には水道が二つ付いている。俺達はその机の下から丸椅子を引っ張り出して、昼食を広げながら、過去の文化祭での、過去の演劇部員による演劇を鑑賞していたのだった。

演劇のタイトルは『高田くん』。勘違いを主題にしたコメディのようで、その構成もさることながら、やはり役者の演技力が凄かった。ショートコント風なので、台詞が一つしかない人もいたが、それでも歩き方や喋り方などで個性を出しているし、何よりオチの部分のコウちゃんの必死さが、こちらの笑いを誘った。当然ながらこれは高校生の演技なので、そのレベルで言うところのことだが。まあ、それでも俺達では到底真似できない演技だ。

「誰が撮ったんでしょうね」

有希が先生に聞くと、

「俺はこの高校に来て三年目だから、知らないんだけどね。多分、前任の顧問じゃないかなあ」

「じゃあ、昔は今の顧問じゃなかったんですか」

「そうみたい。人気がなくなってたから、忙しい先生に顧問を回したんじゃないかな。君達も苦労するね」

「いやいや」

苦労するどころか、大いに楽しんでますよ、とは口が裂けても言えない。

「俺が赴任してきたときには、もう部員が五人くらいしかいなくてね。発表しようにも登場人物の数が少なすぎるってことになって、結局取りやめに。そこからぼつぼつと減っていった、幽霊部員ばかりになって、廃部寸前になったみたいだ。いや、君らが入ってくれて、演劇部も命拾いだね」

「というか、割と最近まで部員がいたんですね。むしろその人たちに救われましたよ」

「ははは、上手いこと言うね」

いや、心からそう思っているんです。

「君らも、この人たちみたいに頑張りなさい。そうすれば、また演劇部も人気を取り戻すかもしれない」

「ええ、ウチらで頑張りますっ」

望月が、力を込めて宣言した。

「……さて、それじゃあそろそろ君らは戻りなさい。次の時間、ここで実習なんだ」

井上先生は、そう言って立ち上がると、ビデオを三本手に取って、俺に差し出してきた。俺はそれを、一礼してから受け取る。井上先生は、僅かに目を細めると、「じゃあ」と言っている隣にある準備室の扉の方へ向かった。彼は、見かけに似合わず生物を教える理系の先生なのである。

「あ、二つほど聞きたいことがあるんですけど」

俺は、そう言って先生を呼び止めた。実を言えば、演劇の資料を見たいという理由だけで、井上先生に声を掛けたわけではなかった。事件に関して、聞きたいことがあったのだ。「うん？」

「ちよつと変な質問なんですけど、気にせず答えてほしいんです」

「まあ、内容にもよるけどね。プライベートなことは駄目だよ」

井上先生は白い歯を覗かせる。俺は「いや」と首を振って、

「聞きたいのは、淵江大吾っていう生徒が殺された日のことなんです。不謹慎なんて言わずに、出来れば答えてくれませんか？」

「……どうしてその日のことを？」

井上先生が眉をぴくりと動かす。

「ちよつと事情があるんです」

「事情、ねえ」

先生には、話しても構わないだろうか。人のいい性格だし、黙っててほしいと言えば守ってくれるだろう。俺が春子に目配せすると、彼女は静かに首を縦に振った。

「……実は、事件の前の日に、淵江に絡まれた部員がいました。もしかしたら疑われるかもしれないってことで、自分達で調べてみるんですよ。勿論、警察なんかには敵うとは思ってませんが、せめて部員の疑いくらいは晴らそうと……」

信じてもらえるだろうか？ 内心おどおどしながら説明しきったが、その不安はどうやら杞憂のようだった。俺の説明が終わると、先生は涙を浮かべそうな表情で、

「お前、いい奴だなあ」

などと俺を褒め、肩をぽんぽんと叩くのだった。……この人、感情豊かだなあ。

「じゃあ、聞かせてくれますか？」

「ああ。いけないとは一応言われてるんだけど、君達なら構わないよ。答えられる範囲な

ら何でも。ただし、時間はあんまりないぞ」

先生に言われて時計を見やると、時刻は一時十六分になっていた。後四分で五時間目の予鈴が鳴る。

「分かりました。……先生に聞きたいのは、鍵のことなんです。教室を空ける時、学年室に掛ける鍵」

「何でまた、鍵なんだ？」

その問いには橋谷が、

「三年五組の教室の扉が、最初は閉まってたっていうからさ。犯人が窓から入ってきたんなら、生徒のいない教室から外へ出た筈なんだよ」

そしてその後を佑也が続ける。

「考えられる教室は、二年三組、四組、そして三年六組です。そして、三年生の教室の鍵は全て、事件が発覚するまでの間使われていないことが分かっているので、残りは二年三組と四組ということになるんです」

そう、三年生の教室の鍵は、実質全て使えないと言っている。五組の生徒が鍵を掛けに來てから、事件発覚までの間、学年室には誰も入ってこなかったという先生の証言があるので、つまり六組の鍵も、いや他の組の鍵全て、事件発覚までは誰にも取ることは出来なかったことになるのだ。

「なるほど、よく考えてるね。鍵の問題か、それは確かに。……犯人は窓から、か。スパイダーマンみたいだな」

自分でそう言うてから、井上先生はくくつと笑った。某映画のように、ぺたぺたと壁を登る、赤い蜘蛛の巣模様の全身タイツを着た犯人でも想像しているのだろう。

「それで、二年生の方の鍵はどうだったか、知りませんか？」

「おっと、そうだったね。ごめん、ごめん。……実は俺、その時学年室にいたんだよ」

「えっ！」

有希が驚く。そう言えば、有希と村越が鍵を取りにいったんだったか。

「気付かなかっただろう？ あそこ、衝突があつて奥が見えないからね。とにかく俺はあの時学年室にいたんだ。早瀬と村越と一緒に來たの、ちゃんと覚えてるよ」

「ど、どうも……」

有希は頭を下げた。村越も、黙ったままほんの少し首を動かした。

「そうだね、君らの応対をしたのは、斉賀先生だったか。あの時間は俺と斉賀先生の二人でいたんだ。だから、鍵のことについては、確実なことを言えるよ」

斉賀先生とは、日本史の先生のことだ。気難しい性格の初老の男性で、授業が厳しいこととで有名だった。

「是非、教えてください」

春子がするように言うと、井上先生は、参ったな、というように軽く仰け反って、

「君みたいな子にお願いされると断れないな。まあ、断る気もないんだけど。……二年生の鍵も、三年生のと同じだよ。あの日、四組の生徒が鍵を掛けに來てからは、少なくとも早瀬と村越が取りに來るまでは、一度も生徒は來なかったんだ」

「それ、絶対ですね？」

佑也が念を押す。

「ああ、絶対だ。俺一人だったら怪しいと思われても、まあ仕方ないが。斉賀先生もいたんだから、信用してくれるだろう？」

「は、はい」

斉賀先生、という言葉に、急に緊張したのか、佑也は背筋を伸ばして答えた。

「ということは、鍵に関してはどの教室も使えなかったとみていい……」

周辺教室の鍵が使えなければ、そうみなしてもいいだろう。つまり犯人は、生徒のいない教室に正規の鍵を使って入ることは出来なかったというわけだ。

後はもう一つ。

「なら、先生」

「何だい？」

「正規の鍵以外が使われた可能性っていうのはありますか？」

「それは……どう？」

「例えば、予備の鍵とか……犯人が作った合鍵とか、そういうものです」

合鍵。それがもし使えるのなら、学年室の鍵は関係なくなってしまう。この合鍵説が正解なら、何というか、面白みがまるでないの、早々に可能性を潰しておきたいのだが。

「合鍵ねえ。普段使ってる鍵の他に、コピーが一本あるにはあるけど。でも……」

先生がそこまで言ったところで、運悪くチャイムの音が響き渡った。一時二十分、五時間目が始まる五分前を知らせる予鈴だ。

井上先生は頭をわしわしと掻いて、

「鳴っちゃった。悪いけど、この話は後で頼むよ」

「ええ。すいません、ありがとうございました。昼休みなのに色々してくださいって」

俺は先生に、感謝の言葉を告げた。

「どういたしました。役に立てたならいいんだけどね」

先生は、そう言っただけに終わった。彼は本当に好人物だ。

「それじゃあ失礼します。ビデオ、参考にさせてもらいますから」

「ああ、頑張ってくれよ。君らは期待の星だ」

本気でそう言ってるのだから、小恥ずかしかった。

*

放課後の演劇部には、俺と春子、そして望月の三人が先にやって来ていた。有希と村越、それに佑也は掃除当番、橋谷は漫画を買いに行っているのだとか。これ以上漫画を増やされても困る。週刊誌のものは二ヶ月に一冊増えるのが辛い。

望月は何やら奥に置かれたノートパソコンで作業をしている。家にはあと一台デスクトップパソコンがあるのだとか。俺も一台欲しいものだ。

俺と春子は、暇だったので事件についての論議を始めていた。

「……鍵が使えない以上、犯人は何処から外に出て、窓から侵入するか、淵江に開けてもらって入るかの二つでしか犯行に及べない。ここまでは確実だと思う」

「うん。合鍵は使えないみたいだったしね」

「ああ」

終礼後、俺はすぐ井上先生に、昼休みにした話の続きを聞いた。彼が言うには、この高校には確かに合鍵があるのだが、その鍵を犯人が使った可能性はまずないらしい。

その理由をまとめると、こういうことだった。

光耀高校では、教室等の鍵が紛失した時のために、予め一本だけ合鍵を作っている。その合鍵の全ては、職員室内の鍵の掛かった引き出しにしまわれており、その鍵は教頭先生が責任を持って管理しているというのだ。

教頭先生によると、最近鍵が無くなったという報告はないそうで、つまり誰にも合鍵を貸し出してはいないという。井上先生はこの事実を、昼休みに俺から合鍵のことを聞かれ、すぐに教頭先生に質問してくれたようだった。ありがたい限りだ。とにかく、そういうわけで学校にある合鍵は、使われていないだろうことが判明した。教頭先生だけが合鍵を管理しているのだから、彼が調べられればすぐに足がつく。そういうものを使う犯人などいない筈だ。

では、犯人が鍵を複製した場合はどうだろうか。そちらについても聞いてみたのだが、井上先生はやはり首を振った。学校や大企業のオフィスなど、比較的大きな施設の鍵というのは、防犯上合鍵を作るのに許可がいるらしい。鍵の見た目で鍵屋には分かるようだから、内緒で持っていくてもばれてしまう。犯人が新たに鍵を作ることは、出来ない仕組みなのだ。

合鍵の所在ははっきりしていて、新たに鍵を作ることも出来ない。これらの事実から、合鍵説は完全に消滅したも同然だった。

「残念だった？」

春子は、俺の顔を覗き込んでくる。円らな瞳と視線が交差して、俺は恥ずかしくなって少し仰け反った。

「そ、そうでもないさ。むしろ、それが正解だったら落胆してたと思う。もっと難しい問題じゃないと、熱が入らない。ミステリーみたいに、頭を捻って正解を導き出したいんだよ」

「ふふ、そういう意気込みなんだ。翔斗くんらしいね。……でも、現実と小説はやっぱり違うと思うなあ」

「そうかもしれないけど」

それでも、難問だと思って挑戦したいじゃないか。

「……さ、ここからだな」

俺は春子を見つめてから、居住まいを正した。彼女の表情が瞬間、僅かに強張る。

「事件があつたあの時間、春子は運悪くトイレに立ってたということだけど。クラスメイトは時間をしっかり覚えてくれたみたいで」

事件当時のアリバイについては、一度春子に聞いていた。死亡推定時刻内の十二時丁度、彼女は教室を抜けてトイレに行ったという。彼女のクラス、二組の生徒からの裏付けもあった。十二時ということは、四時間目の授業が終わる二十分前。我慢できていれば、と彼女は悔やんでいた。いやいや、我慢は良くないだろう。

「春子に好意を抱いた淵江が彼女を呼び出した、というストーリーを作ることは出来る。けど、春子がネクタイを使って、淵江を相手に首を絞められるかと言えば、無理じゃないか？ その辺りは自分でも分かっているだろう？」

「そうだね……。私、あの人には近づくだけでも怖いし。状況だけ考えると疑いは晴れそうに無いけど、私には絶対に出来なかったと思う」

そもそも、呼び出されたからといって出向く必要はないのだし。春子と淵江の接点は——少なくとも俺が知りうる限りは——あの時だけなのだから、あの一件が気に障って淵江を殺した、なんて動機はあまりにも馬鹿馬鹿しい。

時間の上でも、春子に犯行は出来なさそうだ。彼女がトイレに立ったのは、せいぜい一、二分ということだから。

「……それでも、警察は何らかの方法を見つけて、犯人の可能性があるって言い出したりするんだろうか。アリバイが確立されていない以上、あり得そうな方法を探していつて、それが春子に出来ないってことを証明するくらいしかないのかねえ……」

「ごめんね、翔斗くん」

「いやいや、春子が謝ることなんてないさ。……しかし、犯人が寺河でない限り、やっぱり侵入経路は窓だと思うな。ただ、窓から入るとなれば、何処かに経路があるとして、壁を登る道具とか、体力も必要だろうから……女じゃ無理かもしれない」

村越くらい運動神経が良ければ、女子にも壁を登れるかもしれないが。

「うーん、進まない。こう言っちゃ悪いけど、寺河って女子が犯行を認めてくれればいいんだけどなあ……」

「可能性は低いって言われちゃったけどね」

「そうだけどさ……」

春子の言葉に、俺は昨日の水原さんの微笑を思い出した。見る人を引き込んでしまうような魔力のある……。

——と、その時部室の扉が開く。有希と村越が入ってきた。

「ああ、もう泉さん、翔斗くんとそんなに馴れ馴れしくしないの」

有希は入ってくるなりそう言っ、俺と春子の間に割り込んでくる。

「翔斗くん、割と女の子にだらしないんだから」

「そ、そんなことないと思うけど」

「そうだぞ、有希。そんな証拠どこにもないだろ」

「昨日、水原さんに見とれてた」

う。それは言い返せない。

「そんなことより泉さん、この前言ってた本、タイトル何だっけ？ 図書館にあるって言うってたから、借りてみようと思っ」

「あ、本当？ じゃあ私も行こうかな。一緒に行こう、有希ちゃん」

有希ちゃん、と呼ばれると、また有希は恥ずかしげに頭を掻いた。けれども何も言わずに、二人はそのまま部屋を出て行った。

あれで案外、仲がいいよな。

「翔斗くん」

後ろから、突然声が掛かる。見ると、さっきまでパソコンで作業をしていた望月が、不敵な笑みを浮かべて立っていた。

「どうしたんだよ、望月」

「いやいや。翔斗くんは鈍いなあって」

「鈍いつて何が」

望月は尚もにやついている。こう言つては何だが、女性らしからぬ顔だ。いや、こういう話をする時の女性性は、彼女みたいな顔をするものなんだろうか。

「有希ちゃん、翔斗くんのが好きなのよ、きつと」

……やっぱり、そういうことを言うか。

「馬鹿、あいつはそんなじゃないよ。想像と違って悪いけどな。俺だつて違うぞ」

「そうかな？ もうあれは嫉妬にしか見えないけど」

「嫉妬ねえ」

望月の考えていることは見当違いだろうが、彼女の言葉で、俺は別のことが気になった。

——皆、そういう年頃なんだよな。

俺も、有希も、春子も、佑也も。橋谷と村越は何故かいい感じだと聞くし、……望月は良く分らないが。

俺も誰かを好きになれるのかな。ふいに思う。

一度は誰もが考えるだろう、妙に哲学じみた、馬鹿げた疑問だった。

*

結局橋谷はこの日、演劇部に戻つてはこなかった。漫画を買い込んだ日は、そのまま家に帰つて読み耽ることがしばしばあったので、特に気にしなかった。俺達六人は、五時まで思い思いの時間を過ごし、それから部室の鍵を掛け、職員室に鍵を返却してから玄関へ向かう。

外へ出ると、初夏の心地よい風が肌をくすぐる。

「日に日に暑くなつてくるね」

春子が手で顔を扇いでいる。夏が近づいてきているのが分かる。

「そうだな。うちの文化祭は九月だし、夏休みが終わればすぐだ。……例のあれ、準備し始めないと間に合わなくなるんじゃないか？」

俺が言い、有希が、

「演劇だね。うん、そろそろやること決めて、必要な物揃えていかないと」

と言つて、頬を軽く撫でた。黒い髪が、風にふわりと舞い上がった。

文化祭。去年はクラスが展示作品だったので、店番もいらず一日中満喫できた。しかし、舞台で場を盛り上げるのも悪くない。演劇部のくせに、今まで散々好き勝手にやつてきたのだ。一度しかない青春なのだから、思い出に残るようなことを成し遂げたい。

「大事なのは台本だよな。あんまり酷い話だと、演じる方が嫌になっちゃうから」

「でも、佑也は照明がいいんだろ？」

「ま、まあね」

俺が指摘すると、佑也はばつが悪そうに苦笑した。

「台本なら任せてよ。ウチならとびっきりの作れるわ」

という望月に、春子は、

「ゆみちゃんに任せたら、何か凄い話になりそう」

これには皆笑った。

「ファンタジーと恋愛を取り入れたストーリーっていうのを、目下検討中なんだけど。と
うか、軽く下書きしてみたりもしてるわ」

「もしかして、今日ずっとパソコンの前に座ってたの、それですか？」

「正解」

望月は、親指と人差し指で丸を作ると、いたずらっぽく笑った。

「あんまり趣味を織り交ぜないでくれ」

望月の趣味はメンバー内には周知の事実なので、何人かが力強く頷いた。佑也も何故か
頷いている。お前は関係ないだろ、照明なんだから。

「善処します」

そしてまた、皆で笑った。

望月は自宅が遠く、電車通学らしいので、校門の前で別れる。そして、残る五人で自転
車置き場へ向かった。

「僕ら、まるで初心者だけど……上手く出来ればいいよねえ、演劇」

「上手いに越したことはないけどさ。俺達が楽しめるってのが、一番大切だと思うな」

村越の受け売りに近い台詞だったが、俺は心からそう思っていた。

「僕らが、楽しめる……」

有希が、俺の言葉を噛み締めるように繰り返した。「たまにはいいこと言うね」

「たまにはって何だよ」

俺は、軽く有希の頭を叩いた。

演劇か。俺達が入部した理由は、不純なものだったが、果たして。俺は上手く、何かを
演じられるのかな。

……誰がこの中で、一番演技が上手いのだろう。俺は四人の顔を、それとなく見比べて
みるのだった。

五章 議論の一日

それから土曜日と日曜日が過ぎて、月曜日になった。五月も今日で終わる。明日からは、子供手当ての支給が始まる六月だ。

二時間目が選択授業だったので、俺は本館六階の地学の教室にいた。隣には、佑也と橋谷も座っている。

三クラス合同授業なのである。

物理、地学、生物が選択できるこの授業は二年生からの科目で、一組と二組、三組から五組がそれぞれ一緒に授業を行う。それで同じ地学を選択していた、三組の佑也と五組の橋谷がいるというわけだった。ちなみに望月は物理、有希と村越、それに春子は生物を選択している。春子は前半組なので、有希と村越とは一緒に授業を受けられないのが少し可哀想だ。

地学の授業は、普段なら席順は決められており、本来は佑也も橋谷も俺の隣にはいない。しかし、今日は先生が病気で休んでいるらしく、自習という文字が大きく黒板に書かれ、教卓にプリントが置かれてあった。このプリントをやって提出すれば、平常点を加えるということらしい。そういう経緯で今、こうして三人で同じ机に向かって座っているのだった。

「なあ、これ何だ？」

「あー、何だっけ。火砕流だったような」

「ふーん……じゃあこれは？」

「それは火山弾だよ」

主に答えを聞いてくるのは橋谷だった。佑也の方は、黙々と空欄を埋めている。集中すると無言になるらしい。

「岩の名称なんて一つ一つ覚えられるかってんだよ、全く」

「はは、それには同感だけだな。試験で書けなくても、言い訳にしかないぞ」

「世知辛いなあ」

留年するなよ、橋谷。

そんなやりとりをしていると、

「ふう、終わった……」

「え、もう？」

佑也が突然そう言って顔を上げたものだから、驚いて声が上ずった。まだ授業が始まってから、十分しか経っていない。

「うん、俺、面倒なことは先に片付けちゃう性格だからさ」

「はあ、いい性格だな。俺も有希も、宿題とか何回も忘れてるし、佑也くらい几帳面ならいいんだけど」

「いやいや。こんな性格だと、結構大変だよ」

「そうかねえ」

佑也が顔を伏せたので、俺はそれ以上は言わないことにした。几帳面な人間には、特有の悩みがあるんだろうな。一つのが気になるのと寝られない、というような人もいるのだし。

「……俺、有希ちゃんや翔斗みたいな人が時々、羨ましくなったりするんだよね」

「うん？ どうして」

「何だか、色んなことを気兼ねせず楽しんでる感じがしてさ。俺もそんな風に、気楽に生きてみたいんだ」

一瞬褒められているように聞こえたが、それは要するに、俺や有希が後先考えずに、目の前の楽しさを常に優先していると言いたいのではないか？

そんなことはないぞ、と言いたかったのだが、

「宿題とかやらなくても、きちんと好成绩取ってるし、遊ぶときもいつのまにか俺達の中にいたりするし。ちよつとはしやぎすぎなところはあるけど、うん。二人とも、すごいなっ」

などと言われると、上手い反論の言葉が出てこなかった。というか少し照れる。

「それは俺も思うな。光代がイベントの企画をして、翔斗と早瀬がその主役になってる感じ？ ま、望月とかもかなりはしゃいでるけどさ。もう何か、翔斗と早瀬は似合いのカップルだよな」

「カップルって、よせよせそんな冗談」

橋谷が笑うので、俺は恥ずかしくなつて両手をぶんぶんと振った。お前にまで望月と同じことを言われたくはない。

「ははは……はあ。けど、成績良いのはマジで凄いやな。どうしたら学年順位が二桁になるんだよ、教えてくれ」

「いや、それは普通に勉強あるのみだろ」

宿題するしないは別にして、俺は試験前にはしつかり勉強している。だから成績がそこそこのいいのだ。努力なくして成果は上がらない。面倒くさがりの橋谷には悪いが、そこは理解しておいてほしかった。

「俺、ノートもちゃんととって、試験前の勉強もそれなりにするんだけどね。いつも姉に負けちゃうんだ。親も姉と比べないでほしいんだけどなあ……」

姉を持つ佑也ならではの悩みだな。誰かと比べられるのは、確かに苦痛だろう。俺は一度佑也の成績表を見たことがあったのだが、少なくとも俺よりはいい成績だった。

さっきの俺と有希への憧れみたいな言葉も、そういう部分があるからかもしれない。自分のことだけを考えて、自由に行動してみたい。常に姉と対比される日常から、少しは解放されたい。……そんなところか。ひよつとすると、彼が演劇部に入った理由も、そういうことなのかもしれない。

「ま、何だ。そういうのは、自分の考え方次第だと俺は思うぜ。演劇部に入るのを選んだように、ちよつとは楽しさ優先の選択を試してみてもいいんじゃないか？」

俺は、そう言って彼の背中を少し強く叩いてやった。

「……うん、そうだね。ありがとう。何か、人生相談みたいになっちゃった」

「言ってる」

「でも、翔斗って聞き上手なところがあるからね」

「そうか？」

「うん。翔斗には何か、心を開かせる大らかさがあるというか」

この言葉は、素直に嬉しかった。

「要するに、年寄りっぱいってことじゃねえ？」
うるさいぞ、橋谷。

「——そういや橋谷は、何か悩み事とかないのか？」

「ん、俺？」

ふと気になって聞いてみると、彼はううんと唸って、

「あれだよ、よく言うじゃん。悩みがないのが悩みの。俺はそういうやつかな」
聞くんじゃないかった。

*

悪い報せが届いたのは、その日の昼休みのことだった。クラスにいる演劇部メンバー、つまり有希と村越で昼食をとっていたのだが、そこに望月が現れたのである。彼女はいかにも慌てた様子で、すぐに用件を伝えねば、という使命感のようなものが伺えた。

「三人とも、ちよつとちよつと」

「何だ、こんな時間に」

別に悪いというわけではないが。周りの生徒がこちらに目を向けているのが恥ずかしかった。

「それがさ、寺河香織が捕まったんだって！」

「え？」

思わず箸を落とした。カランという音が教室に響き渡り、辺りが静まり返る。……気まずい。

いや、それよりも。

「どういうことだ？ まさか、寺河が犯行を認めたとか？」

机の下に潜り、箸を取りながら、上目遣いに望月を見る。彼女は、

「ううん、そうじゃないの」

と首を振った。「別の件で捕まったのよ」

話が見えなかった。別件とは何だ？

「よく聞いてね。寺河香織はその日、学校を休んでたって先輩が言ってたわよね。そこで警察が、まず彼女を疑って見たらしいのよ。幸い春ちゃんのこととは、まだどこからも漏れてないみたい。……それで、警察が寺河香織の当日の行動を調べてみたらしくて、その日彼女が自宅にいなかったことが家族の証言から分かったのよ」

「いなかった……」

やはり彼女は、仮病を使い学校を休んでいたのだ。

「けど、そこからが問題。彼女の行動を追った警察は、彼女が別の罪を犯していたのを知るわけね。……それは、殺人でも何でも無い、ただの万引き。監視カメラに移っていた女子の制服を見て、この高校の生徒だと知った店の人が、高校に一報を入れてきたらしくて、興味を持った警察が調べてみると……という成り行きらしいわ」

「万引き？ 寺河香織がやったのか？」

望月は腕を組んで、

「そう、彼女は犯行を認めたって。なんでも、彼女には淵江以外にも付き合っている男の

人がいるらしくてね。淵江とはほんの遊びだったって感じなのかもしれないわ。……で、本命らしいその男の人は、近くの高校に通う柄の悪い生徒だったの。夜中にバイクを乗り回してると噂であるような」

遊びで付き合う、という感覚が俺には分からなかったが、とりあえず領いた。この時だけはほんの少し、淵江が哀れに感じられた。

「寺河香織は、その男と一緒に、事件があった日の十二時、コンビニに立ち寄っていた。そこで彼女は、彼氏にそのかされて万引きをしてしまうわけ。詳しいことは分からないけど、お酒を何本か盗んでいったらしいわ。きっと彼氏と二人で飲む気だったんでしょね……」

そこまで語り終えてから、望月は嘆息を吐いた。理解できない、と思っているのがよく分かった。俺も恐らく、彼女みたいな人のことを、一生理解できないと思う。

「まあとにかく、犯行時間コンビニで万引きしてたってことは、淵江を殺しに行くことは出来ないってこと。皮肉なことに寺河は、捕まることで殺人の容疑から逃れたってことね……」

本当に皮肉な話だった。そして俺達は、そんな彼女に長いこと踊らされていたわけだ。もう彼女を疑うことは出来ない。そうなれば、残る容疑者は今、一人しかいなかった。

「残ったのは、木本剛志か」

「ええ。現時点では、その子が一番疑わしい人物になるわ」

迫害され続けた悲しき少年。やはり彼が、淵江の命を奪ったのだろうか。辛い日々の恨みを晴らすべく、その手で彼のネクタイを掴み、そして首を絞めたのだろうか。

「少なくとも、これで翔斗くんが考えた、約束をとりつけた上で淵江が鍵を開けたという線は殆ど無くなったわ。春ちゃんなら僅かに可能性はあるかもだけど、ウチらは彼女を守る為に推理してるわけだし」

「ああ……」

容疑者は減ったが、犯行方法はまた五里霧中になってしまった。恐らくもう扉から入る線を考えるのは無意味だろう。やはり、あの窓からどうやって侵入したのかを考えるしかない。

「じゃあ、ウチはこれからお昼食へに行くから、また放課後にね」

「分かった。伝えにきてくれてありがとな、望月」

「どういたしまして」

そして彼女は、現れたときと同じように、風のように去っていったのだった。

「……解決しそうだったのになあ」

俺は呻くように言った。隣でハンバーグを突いていた有希が、

「まあ、そう簡単にはいかないよ。……けど、泉さんが疑われることさえなければ、警察が事件を解決しちゃう気もするね」

「そうだな……」

警察の力を見くびってはならない、と思い知らされた。また水原さんの言葉が脳裏に蘇る。

——何だか、悔しいな。

「私は、翔斗が考えてること、何となく分かるよ」

突然、村越が俺に言った。

「警察に對抗心を燃やしてるんでしょ、翔斗は」

「え、ええと……」

「私も分かる。体育でも、私より運動神経がいい子見ると、もっと上手になりたいと思うし。この件だって、少なからず翔斗と同じ気持ちになってるのよ」

「村越……」

彼女の目にも、爛々とした光が伺えて、俺は驚いた。そうだ、彼女も負けず嫌いな性格だった。警察よりも先に、事件を解決してみたい。彼女もまた、そう考えているのだろう。「同志がいてありがたいよ。お互い、頑張ろうぜ。犯人も犯行方法もまだ分からないが、すぐに尻尾を掴んでやる」

そう言っただけ握りこぶしを突き出すと、村越は快活に笑った。

*

放課後になれば、俺達は自然と演劇部に足を運ぶようになっていた。陽が傾くまでを気ままに過ごす場所、それがここだった。

その演劇部も、今大きな転換点に差し掛かっている。……なんて言うのは大げさかもしれないが、少なくとも初めて真面目な活動を始めようとしているのは確かだった。

橋谷は、今日はちゃんと来ていたが、本棚に目をやると、予想に違わず単行本が三、四冊増えていた。もう少し増えたら、積みであるのが倒れそうで危なっかしい。

掃除当番の有希と村越、そして佑也が数分遅れで来て、全員が揃うと、春子が唐突に手を打って視線を集めた。

「ちよっと話があるんだけど、聞いてくれるかな」

何だ何だと、全員が彼女の方へ体を向ける。

「途中で嫌な事件が起きちゃったりもしただけど、前に決めた、文化祭での演劇について、そろそろ具体的な計画を立てよう？」

「あ、そうだな」

橋谷は思い出したように言うと、読んでいた漫画を後ろへ置いた。それくらいの礼儀はあるようだ。

「今まではのんびりと名ばかりの部活動に興じてたけどさ。私達もやっぱり、演劇部に入った以上、劇の一つくらい、ちゃんとしないとね」

真面目な春子のことだ。正直なところ、彼女はだらだらと過ごすこの部活に、我慢ならなくなったのではなからうか。

「というわけで。ここにノートを用意したから、色々決めていきましょう」

「了解」

俺が言い、残りのメンバーも首を縦に振った。

「まず決めないといけないのは、台本、衣装、道具の三つを誰が担当するか、だね。台本はゆみちゃんに任せようと思うから、後は衣装と道具」

「え？ 望月が台本書くのか？」

橋谷が素っ頓狂な声を上げた。金曜日に漫画を買いに行っていなかったので、経緯を知

らないのだ。

「もうアウトラインくらいは出来上がってるから、お楽しみに」

「全然楽しみじゃないぞ」

彼はそう言って、露骨に大きな溜め息を吐いた。

「ごめんね、橋谷くん。でも一番シナリオ作りが上手そうなの、ゆみちゃんしかいないから。それは分かるでしょ？」

「ま、まあ……皆が納得してるならいいんだけどよ」

春子に言われると、文句を言えないようで、橋谷はそれ以上は反論しなかった。そんな橋谷を村越は睨んでいる。

「じゃ、残るは衣装と小道具かな。どんな物を作るかは、ゆみちゃんの台本次第だから、まだ不明だけど。衣装は縫い物をしたりするから、そういうのが得意な人がいいかも」

「衣装は家庭科、道具は図工って感じがするな」

「家庭科の成績がいい奴が衣装担当ってのはどうだ？」

俺と橋谷のやりとりで、

「でも、家庭科は他にも色々するから……」

と、有希が意見した。そう言えば、有希は料理が上手いんだった。

「家庭科の成績はいいけど、裁縫は苦手ってこともあるか。そうになると、挙手制にしかないな。お互い、裁縫してるの見たことないんだし……」

「だね。この中で縫い物が得意な人、いる？」

有希の問いかけに、初めは誰も手を挙げなかった。居心地の悪い沈黙が辺りを満たす。すると春子が、

「はあ。……じゃあ、私がします。下手かもしれないけど、許してね」

小さく息を吐いてから、首を僅かに傾けて微笑した。

「あ、ありがとう、泉さん……」

有希は照れたように、言葉に詰まりながらも感謝の言葉を告げた。

春子はノートに、台本の下には望月、衣装の下には泉と書き込む。しばらくは、シャーペンがノートの上を走る音だけが聞こえた。

そして、彼女が再び顔を上げ、

「もう一人くらいいいかな？ 道具に五人もいらなさそうだし」

くりくりとした可愛い目で、一同を見回した。

「あ、あの」

一人のメンバーが、おどおどしながら手を挙げる。それは、佑也だった。

「笑われると思って挙げなかったんだけど……。中学校で裁縫の実習をした時、先生に褒められたことがあるから、俺もやるよ」

「マジか？」

「う、うん。二年も前だけど、何とか力にはなれると思う」

「流石だ小林、助かった！」

橋谷が、やや大げさに佑也を褒め、彼の背を叩いた。佑也は「痛いよ」と言いながらも、若干頬を赤らめて照れている。

多分、衣装担当が嫌だから、挙手してくれた佑也を褒めちぎったのだろうが。

「ただ、突き指が治ってからね。もう少しで完治すると思うから」

「ああ、バレーボールのどっけ。うん、構わないよ」

春子は少しだけ、心配そうに佑也の指を見つめたが、すぐに笑顔に戻った。とにかく、これで各担当が決定したのだった。台本は望月、衣装は春子と佑也、道具が残り四人、俺と有希、橋谷と村越。後二ヵ月半ほどで、どれだけ完成度の高い劇を作り上げることが出来るか、それは分からないが、出来るだけ全力を出し切ったものにしたかった。

「後は、舞台使用の許可を取ったらオッケーだね。夏休みが始まる前に、登録する期間があるらしいから、その時に用紙を貰って、先生に渡せばいいだけだよ」

春子がノートに名前を書きながら言った。

「そこは部長がやってくれないとな」

「半年で交代じゃなかったか？ ……まあ、分かったよ」

にやにやしている橋谷が少々気に食わなかったが、俺はしぶしぶ承諾する。

そんなわけで、大まかな役割分担が全て終了すると、春子はノートをパタリと畳んで、それからぺこりと頭を下げた。

「じゃあ、私の話はこれで終わり。スムーズに決めてくれて、ありがとね、皆」
その言葉に、俺達は「いやいや」と笑顔を返すのだった。

＊

五時を過ぎ、俺達は演劇部を後にした。そのまま全員が帰路につくと思っていたのだが、何故か村越は、運動場の方へ向かうおとしていた。グラウンドでは、今も野球部が厳しい練習を続けている。

「どうした？ まさか野球部の練習を見たいとかじゃないかな？」

他のメンバーが自転車置き場へ向かう中、俺は気になって村越の肩を叩いた。

「違うわよ。大丈夫、演劇部以外に入るつもりはないから。ちょっと、思うところがあるてね」

思うところとは何だろう。おおそ普通の村越からは想像もできない言葉だ。

「翔斗、私が何か考えてるなんて珍しいけども思ってるんでしょ？」

「い、いや」

心を見透かされたようにずばり言われたので、俺は焦ってしまった。村越は、しかし、意味深な笑みを浮かべる。

「明日になったら、教えてあげる。成功でも失敗でもね」

「どういう……？」

「だから、明日にね。それまで待ってて」

村越の謎の言葉に、俺はただ頷くことしかできなかった。

「じゃ、また明日って皆に言っといて」

「ああ。また明日な」

夕陽を正面に受けて立つ彼女に別れを告げ、俺は他のメンバーの所へ戻った。ちらと後ろを見ると、彼女は校舎の陰に消えていった。

——最近のあいつは、珍しいことだらけだ。

「どうしたの？ 翔斗くん」

戻るなり、春子が聞いてきた。

「村越からの伝言。また明日、だつて」

「何だよそりゃ」

橋谷が顔を歪めて、腕組みをした。一緒に帰れないのが不満なのだろうか。昨日は漫画を買いに行つてたくせに。

「やりたいことがあるみたいだから、仕方ないじゃないか。俺達は、先に帰らせてもらおうぜ」

「はあ。よく分かんねえ奴だ」

——いや。

昼休みに彼女が話した言葉を思い出して、俺はそうか、と思つた。

恐らく、村越もまた、一つの仮説を立てたんじゃないだろうか。

それを試そうと、一人で学校に残ったんじゃないだろうか。

六章 大木の経路

六月二日。淵江大吾が殺されてから、早一週間が過ぎた。警察の捜査が進展したという話も聞かないし、ニュースで取り上げられることもなくなった。下手をすれば、このまま事件が迷宮入りとなってしまう気さえしてしまう。

俺と有希、村越、それに佑也は、あの日と同じように、四時間目の体育で汗を流していた。違うところはといえば、有希と村越が見学しておらず、元氣いっぱいコートに駆け回っているところか。やつぱり、村越はチーム内のメンバーに相当頼られている。

俺と佑也のチームの試合が終わり、佑也は三組の友人と話しに、別のコートの方へ歩いていった。まだ突き指が完治したわけではないが、レシーバーにさえならなければ、十分にバレーボールが出来るまでは回復していた。

「おつかれさま、翔斗くん」

壁を背にして座り、休んでいるときに、有希の声が聞こえて俺は顔を上げた。

「翔斗くんって、初めてやることでもすぐに上手くなるよね。尊敬するなあ」

「そんなことないって。第一バレーボールをやり始めてから、もう四時間目だけ」

「その四時間で、僕も小林くんも全然上達してないんだけどね」

そう言っただけで肩を落とし、有希は俺の隣に座り込んだ。細く白い腕や足には、薄っすらと汗が滲んでいる。

「翔斗くんって、結構もてるでしょ」

「え？ な、何でだよ」

いきなり言われたので声がどもってしまふ。有希はそんな俺を見てくすくすと笑い、「いや、さ。そういうフレンドリーな雰囲気とか、格好良さとか。僕でもそう思うんだから、きっと他の子も同じなんじゃないかとね」

「お前に思われてもな」

現実はどうも甘くない。俺には生まれてこの方、そういう甘い体験談は無いのだ。

「俺は一度ももてた経験なんてないぜ。残念ながら」

「本当？ じゃあ、彼女とかいないの？」

「いない、いない。今まで一度も出来たことなんかないさ」

「そうなんだー……」

俺、何で有希にこんなことを告白してるんだろう。口にしてからだんだんと後悔し始めた。

「今も好きな人とか、特にいないんだよね？」

「ちよつと待て、そんなこと聞いてどうするんだよ」

有希が言い切らない内に俺がそう聞くと、

「うーん、こういう話、案外皆してると思うんだけど」

「まあ、望月みたいな種類の奴はな。俺はお前とそういう恋愛話はちよつと……」

「そんなもんかなあ。でも、好きな人がいるかくらい、教えてくれてもいいでしょ？」

どうしてか今日の有希は押しが強いというか、諦めが悪いな。そんなに聞きたいんだろ
うか、俺のプライベートなことを。

別に隠しておきたいことでもないのに、俺の方が折れて、有希に言っただけだ。

「今のところは、特にいないよ。それでいいのか？」

「う、うん。そうなんだ、いないんだね」

俺の答えを聞くと、何故か有希は露骨にほっとした様子で、「そうなんだ」ともう一度繰り返した。

「ありがと、翔斗くん。じゃあ、僕はそろそろ次の試合みたいだから」

「お、おう。まあ頑張れ」

「うん」

俺の恋愛経験なんかを聞いて、何の意味があっただろう。俺は走り去る有希の背中を見つめながら、ぼうつと考えてみたが、結局分からなかった。

そして、この日の昼休みには、何の事件も起きはしなかった。

*

村越が、自身の立てた仮説について発表したのは、その日の放課後のことだった。有希が言うには、普段にもまして掃除をテキパキとこなし、急いでここへやって来たのだとか。それを裏付けるかのように、彼女は上機嫌で、すぐにでも自説を披露したいという気持ちがありありと伺えた。

全員が揃った後に、彼女はこう切り出したのだった。

「皆揃ったし、私も昨日の春子みたいに始めるわ。話があるから、聞いてちょうだい」

村越の機嫌を損ねるのは悪い、というより不利益なので、皆素直に彼女に従った。彼女は全員の目が集中すると、ふふんと得意げに笑って、

「私も翔斗のようにさ、一つ立ててみたんだよ。犯行方法の仮説ってやつ」

一つ、の所で、彼女は人差し指を立てた。

「光代が？」

「うるさい、武」

茶化すように笑った橋谷に、彼女はチョップを食らわせる。

「こんなことするお前だから、驚かれるんだよ」

「私だって頭捻ることくらいするわ。第一、私の成績、あんたの倍あるわよ」

「そ、それは言うな」

倍？ 何かの聞き間違いかと思ったが、橋谷の慌てようを見ると嘘ではないようだった。

橋谷、お前どれだけ成績悪いんだ。

村越は一つ咳払いをして、

「演劇部探偵団とか言って、皆で調べようってことになったんだから、こうして集まってくるときに話そうと思ってね。情報は共有した方がいいと思うし。ただ、実行できないような仮説じゃ話す価値もないから、昨日は一人で試してみたってわけ」

それはそうだ。出来もしないことを論じるわけにはいかない。ともかく、彼女はどんな仮説を立てたのだろう。

「翔斗の推理みたいに、後から出てくる情報で簡単に駄目になるかもしれないけど、それじゃあ話すわ」

座布団の上にあぐらをかいて、およそ女性らしくない振る舞いながらも、彼女は淡々と

自説を語り始める。

「寺河が捕まったっていうのは、ゆみから聞いたわよね？　どうも、注意を受けただけで彼女は解放されたいらしいけど。とにかくその一件で、寺河が犯人だっていう線は消えたわ。翔斗にとっては残念なことだね」

まだ犯行方法まで否定されたわけではないが、寺河が容疑者になり得ない以上、淵江が自分で扉を開けたという仮説で犯人になり得る人間は、いなくても同然だろう。春子については容疑者から外しておくとして。

「ということは、残っているのは窓からの侵入と考えていいわよね。合鍵についてはもう、井上先生が使えないとばかり否定してくれてるんだし」

そう言って彼女はこちらを見、一瞬だけ不敵な笑みを見せた。

「そんなわけで、私が考えたのは窓からの侵入説。こっちなら窓が開いているから、鍵の問題であれこれ悩む必要はない。淵江くらい乱暴な奴が、ネクタイで首を絞められて殺された点から考えても、犯人は不意を突いて淵江を襲った可能性が高いし。そう考えてみても、まずまず淵江自身が鍵を開けたという線は薄くなるわ」

気付けば全員、村越の推理に聞き入っている。淵江が無防備でなければネクタイで首を絞めるのは難しい、というのは納得だ。暴れられたら、春子や望月なんかには押さえつけられそうにない。

「じゃあ、どうやって窓から入るか？　忍者が使う鉤爪付きのロープでもどこから投げて侵入するのか？　勿論そんな筈はないわ。犯人は、既存のあるものを使って、三階の現場までよじ登ったのよ」

「既存の、あるもの……？」

そんなものあったかと、佑也が眉をひそめる。

「あるじゃない、とびきり大きいのが。いつも私達の目の前にある、大きなものが」

「そうか！　松の木か！」

俺は思わず大声を出した。

「そう、犯人はね。あの松の木を登って、三階の教室までたどり着いたのよ」

その手があった。何故俺は、あの松の木の存在を今まで忘れていたのだろう。あの松は、美術室の辺りから生えており、その上には丁度、三年五組の教室があるのだ。更に面白いことに、木の中心辺りが丁度淵江の席の位置にある。

「大きすぎる盲点ね。犯人はあの日、外にいたのよ。そして鉄柵を無理やりよじ登って、松のところまでやってくると、後は手馴れた感じで登っていくの。何故手馴れてるかって？　だって、いじめられていたその子なら、簡単に登れるはずじゃない。一度、登らされたことがあるんだから」

「あ……」

そうだ。全くその通りだ。木本剛志なら、あの松の登り方をよく知っているに違いない。一度、淵江に登らされた苦い記憶があるのだから。そして、当時のいじめの方法を使って殺人を行うことで、淵江に対しての強烈な皮肉にも繋がる。『どうだ、お前が強いた苦行のおかげで、俺はお前を殺せたんだ』というように。

「そう、犯人はやっぱり、去年いじめを受けて学校からいなくなった、木本剛志なのよ。彼が再び学校にやって来て、松の木を登り、眠りこけていた淵江の首をネクタイで絞め、

殺害したの……！」

彼女は最後に、力強く言い切った。その勢いと自信とに、俺は一瞬、彼女の推理が本当に的の中心を射止めているのではと感じた。

「でも……」

と、その時春子が口を開く。

「光代ちゃん。鉄柵って、そんなに簡単に越えられるかしら？ プールにあるような、上に棘が付いた柵だし……」

「それは、簡単にはいかないわ。けど、始めに言ったように、私は昨日一人で試してたのよ。何度か練習した結果、幹まで辿り着くことが出来たわ。そこまで行けば、登れる筈」

「ううん、どうかな。それに——」

首を傾げる春子の言葉を遮って、村越は、

「口だけで納得してもらえとは思ってないわ。今から皆に見せてあげる。そうすれば、この推理が当たってるってことが分かるわよ」

そう言うと、皆に立つように急かし、自分が一番に部室の扉を開けて外へ繰り出した。その勢いに、誰も逆らうことは出来なかった。やはりそこは、行動派の少女である。後ろで橋谷の溜め息が聞こえた。苦労が絶えないな。

俺達は重い腰を上げ、村越の後を追う。春子の方をちらりと見ると、彼女は不満げな表情をしていた。

*

玄関の下足場で靴を履き替え、外へ出る。そして、運動場の松の木のそばまでやってきた。木の周りを高さ二メートル弱の水色に塗られた鉄柵が囲っており、その天辺には、鋭い突起が狭い間隔で付いていた。

放課後なので、グラウンドでは野球部の姿がある。爽快な金属音も何度か聞こえた。そして、美術室には美術部のメンバーもいた。その内岡と水原さんが近づいてきて、窓を開け、

「あら？ どうしたのかしら、皆さんお揃いで」

と水原さんが尋ねてきた。

「ちよつと試したいことがあるんです」

俺が返すと、

「そう？ もしかして、また矢井田くんの推理かしら？」

「いえ、今日は違います。この村越って奴が」

俺は、手を村越の方に向けて示す。

「ああ、貴方、去年の」

去年の、というのは、去年の体育祭のことだろう。彼女が一躍有名になった行事だ。村越は「そうです」と、小さく頷いた。

「何をするかは分からないけど、頑張ってね」

そう言って、水原さんは例の妖しい微笑みを浮かべた。

観客が増えたが、村越はあまり緊張していないのか、むしろ嬉しそうに身を翻し、松の

木を見上げる。

「ねえ、やっぱり危ないよ、光代ちゃん」

という春子の注意にも、

「いいのいいの。私ならこれくらい……」

朝飯前だと鼻で笑ってから、彼女は柵に手を掛けた。そして体重を掛け、鉄柵をよじのぼろうとする。

それに合わせて鉄柵は、ぎしぎしと嫌な音を立てる。岡と水原さん以外の美術部員も、何事かとこちらに目を向けてきた。

「光代はいいとして、何かこつちが恥ずかしいんだが」

橋谷が柄にもなく、手で顔を覆う。

「まあ、気持ちは分かるよ」

自分の彼女が放課後に木登りに興じようとしているのを想像すると……何とも言えない。しばらく村越は、鉄柵と格闘しながら、それでもゆっくりと上の方へ登っていった。しかし、彼女が足を乗せる度に、鈍い金属音が。

「……うん、何か違うよね」

有希が呟く。

「どういうことだ？」

「いや、だつてさ。こんな音がしたら誰かに気付かれるでしょう、普通」

「……まあ、それは」

不快な金属音。ここにいる全員が聞こえるほどの音量だから、確かに、この音の大きさは誰かの耳に届くだろうな……。

「何とか上手くやってみせたのかもしれないじゃない、もう、これくらい」

なおも村越は、松の木の幹まで辿り着こうとする。昨日もこれと同じ練習をしたのだろうか。その胆力は認めるが……。

「でもさ、村越さん。木本くんがいたときは、この柵無かったんだよ？ 柵を登るのも上手かったとは言えないんじゃない？」

「とにかく登れることが証明できたらいいでしょっ」

彼女は引き下がらなかった。懸命に鉄柵と格闘し、遂にあと一歩というところまでやってくる。

だが、その先をどうすると言うのだろうか。そこから足を掛けられる場所は、突起の付いた天辺部分のみだ。そんな所に足を置けば、怪我をするのは目に見えている。

村越は慎重に体を伸ばし、まず両手で木の幹をがっちり掴んだ。制服の袖に木屑が付く。それから、足をおさるおさる上げていき、突起と突起の間に挟むように、足先を自然な形に折り曲げたのだった。

「こ、これで、上がれるでしょ……？」

村越は、辛そうな表情をしながらも、振り絞るようにそう言った。全体重が曲がった足に掛かっているので、体を小刻みに震わせている。

残念ながら、これでは首を振るしかなかった。

「村越、悪いことは言わないからそこまでしとけ。練習じゃそまで行ったらよしとしたんだらうけど、それ以上は無理だ。足が曲がってるから力が入らないだらうし、無理

に木へ飛びつこうもんなら、尻に棘が刺さるぞ」

酷なようだが、はつきり言った方が村越のためになると思って、俺はそう告げた。

「……あとちよつとだったのに」

結局、村越は幹にしがみつくところまでしか行けず、落胆の体で俺達の元へ戻った。――失敗だ。

「やっぱり無理でしょ？」

「……そうね」

不服そうな顔の村越だったが、流石に春子の言葉に同意するしか無かった。突起さえなければ何とかなりそうだが、そうさせないためにあるのが突起なのだから。

「それにさ」

「まだ何か言いたいのか？」

春子は、自らの仮説が否定されたばかりで悔しがっている村越の剣幕に、やや躊躇いながらも、やはり言わなくてはと、ゆっくり口を開いた。

「最初に言おうとしたんだけどね？ この上職員室だから、ばれずに上がるのはどちらにせよ、無理だと思う」

「あ」

実的に射た指摘だった。生徒が木をよじ登っている所などを目撃すれば、どんな先生でも大慌てで注意するだろう。

「申し訳ないけど、私からも一点いい？」

その声の主は、ずっと無言で村越の実演を見ていた岡だった。

「何かしら」

村越は無愛想に応じた。

「……美術部だから知ってるんだけどさ。事件があった水曜日の四時間目って。一年一組が美術の授業で、ここ、使ってるんだ」

それが止めの一撃になった。

*

こうして村越の説は消え、廊下側からも窓側からも、侵入は困難だというのが改めて把握できたわけだが、まるで嬉しくはなかった。必死になって立てられた推理がいつも簡単に否定されるのが、酷くむなしく思えた。

「犯人は、どんな手を使ったのよ」

村越は頭を手で押さえながら、呻くように言う。隣では、橋谷が影法師のようにそっと寄り添ってやっていた。

演劇部の扉に鍵を掛け、俺達は廊下を歩き出す。夕陽が窓から射し込み、渡り廊下を幻想的に彩っていた。窓から外を見やると、すぐ下には茜色に染まるプールの水面が見える。夏は、少しずつ近づいている。

「この事件も、そろそろ警察が暴いてくれると信じてさ。俺達はこれから、演劇について本格的に取り組むべきなのかもな」

「……そうだね」

橋谷が言い、顔を半分紅く染めた有希が、前髪を弄りながら頷いた。

「警察がこつちに来ないなら、もうそれでいいと思う。結局俺達には、手に負えない事件だったんだよ」

そう言ったのは佑也だ。悔しいが、否定は出来なかった。

「現実じゃあ、漫画や小説みたいに、俺達は簡単に主役にはなれないってことだな。俺達が主役になり得るのは、せいぜい演劇の中くらいだってことだよ」

「上手いこといったつもりか、橋谷」

彼はへらへらと笑っていたが、彼なりに無念な部分もあるのだろう。俺には分かる。ここにいる皆、少なからず対抗心を持っているのだから。未解決の事件が、仲間が疑われそうなの事件が解決出来ないというのは、歯がゆいものがあった。

「仕方ないわよ」

「……仕方ない、か」

そう片付けるしかないんだろうか。村越のように。

仮説が一つ否定されるだけで、こうやって傷心するようでは、探偵なんて務まらないのかもしれない。

胸にぽっかりと穴が開いたような気分だった。

七章 仮面の俳優

「明日、必要な物を買いにホームセンターへ行くから、放課後になったら学校前に集合してくれない？」

六月三日。演劇部に七人が集まったところで、そう切り出したのは望月だった。

「ああ、構わないよ。どうせ全員、いつもここに集まってるんだし」

俺も含め、特に用事があるという者はいなかった。望月はにんまりと笑って、

「ありがとつ。じゃあ明日の放課後、千円用意して集合ね！」

「げ、俺達で金出すのかよ？」

「当然。ウチも払うんだから、文句は言わないこと」

そう言われると反論出来ず、俺は——それに橋谷と佑也、有希も——がつくりとうな垂れるしかなかった。

「この部活に活動費なんて無いし、製作に使うお金は皆で公平に出し合わなきゃ。結果を出せば、次からは活動費が入るわよ」

残念なことに、全く以って正論だ。

「そう言えば、台本は進んでるのかな、ゆみちゃん」

春子が聞く。

「うん、今のところは筆が乗ってるわよ」

望月は、二の腕をばんばんと叩いて自信の程を示す。

「何か、まだちょっと気に食わないんだけどなあ」

俺がそう言うと、

「気に食わないって何よ、翔斗くん」

「いや、趣味趣向がさ」

望月の好きな漫画は、少々変わったものが多いし、平然と同人誌なんかを読んでいたりもする。漫画に対する造詣が深い、とも言えるが、何というか、方向性が違うような気がする。

自分でも普段から、簡単な文章を打っているらしいので、シナリオ作りは恐らく、この七人の中では一番なのだろうけど。

「とんでもない世界観のファンタジーとかじゃないならいいんだけどさ」

「任せといてよ。今書いてるの、ウチが前から構想してたストーリーなの。キャラクターは五人。性別がちよっと合わないけど、何とかするわ」

性別が合わないって、どうする気だ。

「まあ、ゆみが変な話考えても、私達が修正していけばいいじゃない。大まかな担当はあるにしても、皆で作っていくんでしょ」

「そうだな。よく監視しとかないと」

「何よ、光代ちゃんも武くんも。そんなこと言うと、二人を主人公とヒロインにしちゃうわよ」

「させねえぞ、絶対」

俺達は笑った。

「まあでも、演劇をやるって決めてから、もうだいたいの配役は決めてあるのよねー。主

人公は翔斗くん、ヒロインは有希ちゃん」

今度は吹いた。有希もあまりの驚きに、咽こんでしまっていた。

「お前な、何で俺と有希にこだわるんだよ」

「そ、そうだよ！ 他にいるでしょ、もっと適役が！」

有希はそれとなく春子を見る。彼女は何を言えいいのか分からず、口をばくばくさせていた。

「でもウチ、翔斗くんがマント羽織って剣をかざして、有希ちゃんが後ろからドレス姿で寄り添うシーンとか見てみたいんだけど……」

「ははは、そりゃいい！」

橋谷はそのシーンを想像して、ツボにはまったようだった。……うるさい。

「望月、俺達はやりたい役しかやらないからな？ 分かったな？」

本当の演劇の世界では、そんなことは認められないだろうが、俺達は自由気ままがモットーの演劇部だ。自分のしたい役をする権利がある。……少なくとも俺はそう思う。

「分かった、分かったわよ。でもさ、主人公とヒロインってのは物語には必要だからね？ 誰もやりたくないってなったら、抽選してでも決めるわよ」

「……そうになったらまあ、覚悟決めるさ」

ただし、度が過ぎた演出は全カットで。

春子が記録を付け始めたノートを何気なく見て驚いたのが、衣装も道具も、全て下書きは望月が担当する、という所だった。彼女は自分の作品に、かなり愛着を持っているのだろう。ただ、姫の役がかなり凝ったドレスを着ることになっているのが気になった。これ、作れるのかな。

衣装は全員分のラフが完成している、これから製作開始となるのだろう。バレールで指を負傷していた佑也も、もう完治しているようで一安心だ。後は、道具の方を考えなくては。

ついこの間までは、自由気ままに遊び倒していたこの部だが、今になって一つのことに取り組み始め、連帯感が生まれてきた気がする。

道具全般はダンボールで作ることになった。どうやら橋谷の家の近くに、ダンボールが積みまれている引越し業者の支店があるらしい。無料で貰えるらしいので、後はそこにペンキで色を塗れば、小道具や張りぼてとして十分に使える。

衣装は古着などを活用しよう、ということになった。装飾などは百円ショップでも買えるだろう。これで全員が出す金額は、ペンキ代とそれを塗るハケ代、そして装飾品代だけだ。明日の千円で事足りるだろう。……助かる。

「基本的なことはこれで全部決まったわね。それじゃあ、今日のところはこれでおしまいにしようか」

望月が言い、全員が頷いた。これにて今日の活動は終わる。

着々と、文化祭に向けた準備は進んでいくのだった。

*

予定通り、放課後は演劇部には向かわず、メンバーは一度高校の玄関前に集まった。他の生徒達は肩を並べて帰宅の徒についている。

「うん、これで七千円ね」

六人から千円札を受け取った望月は、満足そうに頷く。傍から見れば、まるでカツアゲをしているようだった。それを見て橋谷は、

「無駄にすんなよ」

「大丈夫、皆にどれが安いとか選んでもらうし、お釣りはちゃんと一円単位で返すわ」

「それならいいけどよ」

そう言つて彼は口を尖らせる。

「さ、それじゃあ行きましょう。歩いて十分くらいなのよね？」

「ああ。結構でかいから、何でも揃うよ」

望月は遠くから通っているの、あまりこの辺りの地理が分からないらしい。電車通学で自転車も無いため、俺達は歩いてそのホームセンターへ向かうことになった。七人で道路を歩くと、氣を使つても通行人の邪魔になるのが申し訳なかった。

学校を出発してから、いくつかの信号を過ぎ、これまたいくつかの角を曲がれば、ホームセンターが見えてくる。巨大なコンテナを彷彿とさせる、簡素な外観をした店だった。入り口の上には、店名の書かれた大きな看板が掛かっている。広い駐車場には数十台の車が止まつており、平日にも関わらず、比較的多くの人が出入りしていた。

「僕、こういう所あんまり来たことないんだよね。大きいなあ……」

有希が感慨深げにそう言つたので、

「迷つたりするなよ」

俺は頭を乱暴に撫でる。有希はその手を払いのけるようにぶるぶると首を振つて、

「そんなことないよっ」

と頬を膨らませた。

店内に入ったところにすぐ貼つてある案内図によると、一階は主に日用品や家具が置かれていて、目当てのものは無かった。ペンキやハケなどは、二階にあるらしい。それが分かると、俺達はすぐに近くのエレベーターで、二階へ上った。

「そうね、手分けしてもいいんだけど、ウチが台本を書いてるわけだし、衣装や道具のイメージもウチの頭の中にあるから、皆一緒に行きましょう。ペンキを塗るハケなんかは、使いやすそうなのとか安いのを選んでくれたらいいわ」

望月の中では、既に演劇全体の大まかなイメージが既に出来上がっているんだろうな。そういう才能には脱帽するばかりだ。

俺達はまず、衣装の装飾を探しに向かった。するとすぐに、何十色というボタンやら、ひらがな五十音全てのアップリケやらが陳列されたコーナーが現れ、その種類の多さに驚かされる。ラメにビーズにラインストーンと、お姫様に憧れる女の子などは大喜びしそうな品揃えだった。

「そうね、やつぱりドレスはこれがあるでしょ……あと、このラインストーンは袖に……うん」

望月は、一つ一つ吟味しながら、衣装に合いそうな商品を選んでいく。時には衣装係の二人に、

「これって、白のドレスには合うかな？」

と意見を求めたりもしていた。残念ながら、俺にはさっぱり分からなかったが。裁縫が上手いと褒められただけの佑也も、衣装の装飾については分かっているに違いない。しどろもどろなのが見えていて面白かった。

幾つかの商品をバスケットに放り込んで、望月は「よし」と言った。

「それじゃ、次はペンキとハケを買いに行きましょう」

ペンキの種類も、かなりのものがあつた。色の違いだけではなく、特大、大、中、小と大きさが分けられて四つの缶が棚に並んでいる。数十色のペンキがあつたから、それに四を掛けるとどれくらいになるんだろう、と計算してみると、実に二百近くの種類があつた。「これ、光沢有りと光沢無しって分かれてるけど、違いがよく分かんないわよね？ どうしよ」

黒のペンキが、望月の言つたように二種類に分かれていたので、俺達はしばらく頭を悩ませた。紙に塗られたサンプルを見ても、あまり違いが分からない。

「多分、他のペンキも光沢はそんなに無いだろうから、無しにしよっかな」

と、望月が最終的に選んだのは、光沢無しの方だった。

「緑はこれか？」

橋谷の声がしたので、そちらを向くと、彼は大きな緑色のペンキ缶を、危なっかしく持ち上げている。

「緑はそんなに使わないわ。お金を節約したいんだったら、一番小さいのをお願い」

「えー、これ戻さないといけないのかよ」

文句を言いつつも、やはり節約はしたいようで、橋谷は苦心して大きいペンキを上棚に戻し、小さなペンキを下棚から取り出した。

「後は小さい青、それと茶色も小さいので……うん、ありがと。これで十分かな」

そんな感じで、望月の持つバスケットに、大小のペンキ缶が六つ収まった。

ハケは大中小をそれぞれ二つずつ買うことにした。漫画でお金を浪費している橋谷が、真剣に安い物を探しているのが可笑しかった。

「なあ、望月」

その橋谷が、ハケを弄びながら聞く。

「何？」

「ペンキ塗るのって汚れたりしないか？」

「何言ってるのよ、去年の文化祭はどうしてたの？」

「いや、俺んところ展示じゃなかったし、クラスの垂れ幕は他の生徒が描いてたから……」

「はあ、それでも作業してる子見たこともないかなあ」

望月は、サボっていたんじゃないかという疑惑の視線を橋谷に投げかけ、溜め息を吐いた。

「汚れる作業をする時は、体操着に着替えてするのよ。洗っても完全には落ちないけど、制服でやるより嘛だから」

「はあー、なるほどなあ。じゃあ俺達、これから部室に体操着置いてった方がいいか？」

そう言うと、村越は洗面を作って、

「止めてよ、部室が臭くなるわ」

いや、体育の後まで置いていくわけじゃないだろ。そう突っ込みを入れたくなかったが、橋谷が不服そうにしているのを見て、何も言えなくなった。

——それにしても。

ペンキを塗る時に、体操着に着替えるというのは、勿論俺も覚えていた。去年は文化祭で、展示作品を作ったことがあるからだ。しかし、それを思い出した俺は何かが引っかかるのを感じた。

——汚れないように、着替える、か。

この日の買い物は、占めて五千七百八十円。一人当たり三百十五円くらい返ってくる計算だ。ペンキが思いのほか高いのに驚いたが、まあ予算内に収まって良かったと思うべきだろう。

荷物は分担にして持つことにし、俺達は演劇部へ戻ることにした。

*

部室に戻ると、俺達は買ってきたものを袋ごと部屋の隅に置いた。俺はペンキを二つ持っていたので、肩が疲れていた。

「おつかれさまー」

望月が、伸びをしながら俺達にねぎらいの言葉をかけた。

「さ、残りの金は山分けだな」

山分けというのは意味が違うと思うが。とにかく橋谷はすぐに資金の返還を求めた。

ただ、そう都合よくはいかないものだ。

「ああ、ごめん。お釣りそのままだと、千円札一枚と百円玉二枚、それから十円玉二枚だけなの。だから今日は返せないわ。ちょっと待ってて」

「ちえっ」

そんなやりとりを聞きつつ、俺は時計を見上げる。時刻は午後五時になるところだった。

「よし。もうそろそろ五時になるし、じゃあ今日はこれで——」

望月の言葉が、ノックの音に遮られる。誰だろう？ メンバーは全員揃っている。

一番扉に近かった村越が扉を開くと、そこには女性の先生の姿があった。見覚えのある先生だ。確か——

「あ、田崎先生……」

名前を呼んだのは、望月だった。そうだ、この女性は田崎先生。美術を教える先生だった。

先日水原先輩が、美術部の顧問に口利きしておくとおっしゃっていたので、田崎先生は美術の先生であり、美術部の顧問でもあったということか。

「どうも、皆さん。……へえ、演劇部ってこんな感じなのね。望月さんのことを聞いて、ここまで来たのよ」

そう言って先生は口元を緩めた。

「ありがとうございます、田崎先生」

望月が立ち上がり、お辞儀をする。俺達もそれに倣って頭を下げた。

田崎先生は扉の傍に立ったまま、腕組みしてこちらを見つめる。

「で、望月さんが聞きたがつている話だけ……。木本剛志くんのことよね？」

「はい、そうです」

返事を聞いて、彼女は眉をひそめた。

「残念ながら、私には分からないのよ」

「え？　でも、先生は美術の先生だし……」

分からない、というのはおかしいのではないか。一年次は、美術は必修科目だ。

「もちろん、そういう生徒がいたことは知ってるわ。大人しくて、あまり目立たない子だった……。だから、詳しいことを何も知らないのよ。それに、今調べても、その子のことは何一つ出てこないの」

「出てこないって、どういうことです？」

「それがね。いじめられっ子のこととは、どうやら校内でのタブーになっているというか、痕跡が出来るだけ消されているみたいなの。それも、いじめられっ子だった木本くんへや、家族の方への配慮なのかもしれないけれど」

それが配慮なのだろうか？　木本剛志という生徒がこの高校にいた事実を消してしまうことが、彼の為になるのだろうか？　もしそのことを木本くんが知ったら、どう思うのだろう。少なくとも一年以上過ぎていたこの学校から、自分のいた痕跡が、一つ残らず消されていたなら……。

「提案したのは校長先生らしくて。私、校長先生に話を聞いてみたのね。演劇部のことを言って、彼らがいじめられっ子について聞きたがつてるって……。そうしたら、校長室へ呼んでも構わないって言うてくださったの。普通はそんなこと、生徒に教えないのよ？　どうしてなんでしょうね」

「校長先生が……僕らを？」

髪を梳きながら、有希が呆然とした様子で言った。俺や他のメンバーも皆一様に驚く。……校長先生が直々に生徒と話すなど、あるだろうか？　それも、消し去りたがつているいじめられっ子の過去について。

「本当は、隠すべきことの筈なんだろうけど……。でも、話してくれることになったんだから、良かったじゃない。とにかく、聞いてくるといいわ」

「は、はあ……」

田崎先生は楽天家のような人だった。あまり話の深刻性を理解していないようだ。

何故、校長先生は、隠しておきたい過去を俺達にさらけ出そうとしているのだろうか？　それを知ること、何かを期待している？　活動の実態もまるでない、ただのお気楽演劇部に？

「忙しくてあまり時間がないようだから、今から行ってらっしゃい。ここの鍵は、私が返しておきますから」

そう言うと、先生は壁に掛かっていた鍵を取る。そして、俺達に出て行くよう急かした。頭の中にクエスチョンマークが絶えなかったが、俺達はとりあえず、校長先生から真意を聞くために校長室を目指す。

職員室の前で、田崎先生とは別れた。彼女は本当に、代わりに鍵を返してくれた。なので俺達は、そのまま奥にある校長室へ歩く。中央階段を挟んだ向こう側に校長室はある。緊張の面持ちで、俺は他とは違う、重厚な木の扉をノックする。聞きなれない、掠れた

男の声がしたので、ノブを捻って扉を開き、俺達は恐る恐る校長室へと足を踏み入れた。

＊

真つ赤な絨毯。そして分厚い本が幾つも並んだ本棚に、各クラブや教職員が手にしたトロフィーが仕舞われたガラスケース。それらが両脇に配置された部屋は、まさしく校長室、という装いだった。

部屋の奥に、見事な造りのデスクがあり、そのデスクに向かう年老いた男が、回転椅子を回してこちらに顔を向けた。

「……来たかい」

光耀高校の校長先生。名前は確か、遠野隆弘といったような。

六十を過ぎたばかりの遠野校長は、豊かな体の持ち主で、頭髮は既に殆どなく、代わりに白い髭が長く垂れている。皺があちこちに深く刻まれており、それが年齢と尊厳を感じさせた。

服装に頓着していないようで、こうして校長室の椅子に座しているときでも、白いカッターシャツにゆったりとした黒のズボンという装いをしていた。ネクタイもしていない。

その校長が、おもむろに口を開いた。

「君がこうして、友人を連れて来たということは……そういう意味だと私は思っているが……」

低いバリトンの声が、室内に響き渡った。その声は、妙な後味を残した。

——何だ？

……どういう意味だ？

胸の痛くなるような、緊張した空気が、瞬時にこの校長室に張り詰めた。

「あの、先生、一体何を……」

有希が声を落として尋ねる。すると校長は、途端に顔色を変えた。

「……話して、いないのか？」

しまった、というような表情をしたかと思うと、後は口の中で何やらもごもごと独り呟く。

「——そんな」

「あ、あの……？」

佑也が声を掛けると、校長は、

「……いや、何でもない」

と、口を真一文に結んだ。

一瞬のことだった。それは、長年隠し続けてきた秘密の、綻びだった。ただ一つの油断が、その口を、その秘密を、開いてしまったようだった。

信じられなかった。だが、今の校長の言葉を聞いて、一つの事実が急速に浮かび上がってきた。今のは恐らく、きつと。

「……先生。まさか……」

俺は一度、生唾を飲み込んだ。そして、憚られたその一言を、口にする。

「……この中に、……木本剛志が、いる？」

校長は、俺のその言葉に、びっくりと体を震わせた。
馬鹿な。

俺達は、互いに顔を見合わせる。
今まで、共に過ごしたこの七人の中に、いるというのか？
一年前の被害者、木本剛志が。

それって一体、どういうことだ？

「校長先生、どういうことなんです！？ 教えてください！」
俺は大声で訴えた。他のメンバーも、動揺を隠し切れないようで、しきりに視線を動かしていたが、その一言で校長の方へ向き直った。

「この中に木本剛志がいるんですか……？ だとしたら、どうして！」

どうして俺達の中に、紛れ込んで。俺達の仲間として、ここに。

叫びにも似た訴えの後、室内は静まり返る。夕陽を受けたトロフィーが、赤い光を反射している。

校長は、しばらく深い皺を寄せて目を瞑っていた。しかし、やがて心を決めたように、「——そうだね。君達が驚くのも、無理はないことだ。しかし、分かってほしい。知らないということは、知ってほしくないのだということ」

遠まわしに、認めるということだ。

「この中に……本当に、木本剛志が、いるんですね？」

その言葉に、校長先生はほうっと息を吐いて、顔を伏せた。

信じられる話ではなかった。この二ヶ月間、共に過ごした演劇部の仲間達。この中の誰かが、かつて淵江大吾にいじめられ、学校を去った木本剛志だなんて。

それが本当の話なら、一体どうなっているというのだろう。姿を消した彼が、何故今になってこんなところに、それも偽名を使って戻ってきているのだろうか……。

「……いいかい？ 今から君達に、話してあげよう。しかし、あくまでこれは、去年この学校から姿を消し、今も戻ってきてはいない一人の少年、木本剛志についての話だ。他の誰の話でもない。それを、どうか分かってくれ」

校長は、目を閉じながら話す。木本剛志が誰なのか、目や体の動きで気付かれないようにしているようだった。

「木本くんは、もうここにはいない」

ゆったりとした口調でそう言う校長の瞳に、その時一瞬、涙の光が見えたような気がした。

彼は、机の引き出しを開く。そしてそこから、一枚の紙を取り出した。

それは、木本剛志と、その家族が住む家の、住所のようだった。俺達が判別できないよう、肝心な部分は折りたたまれて隠されていた。

「……木本くんが学校を去ったのは、去年の六月のことだった。度重なる暴言や暴力に耐え切れなくなつて、彼はこの学校に来るのを諦めた」

椅子を回して、懐かしむように窓の方を見、校長は目を細める。

「いじめの事実を発見するのが遅すぎたことを、私達はその時、悔やんだのだよ」

俺は、校長が微かに唇を嚙むのを見た。

「淵江くんと木本くんの間に、そういう関係が出来上がってしまったのは、恐らく一年次

の九月のことだろうと思われた。文化祭の役割担当で、運悪く二人が同じ担当になってしまったんだ。その頃から粗暴な振る舞いを続けていた淵江くんは、木本くんに役割の全てを押し付けた上、自分がサボっている事を悟られないようにしろという、無理な注文をしていたようだった」

二人でする作業で、いつも木本くんしかいなかったのなら、淵江がサボっているのを隠すことなど不可能だろう。元来そういう性格なのだから、疑われることは必至だ。

「そこから二人の関係がこじれていったんだな。……木本くんには逆らう勇氣も無かったし、助けてくれる友人もいなかった。淵江くんは生徒達の間で恐れられていたし、誰も進んで干渉しようとはしなかった。これが木本くんにとっては災いし、いじめは誰に止められることもないまま、進行していった……」

「先生の誰かが気付くことは、無かったんですか？」

堪らず俺は口を挟んだ。すると校長は、静かに首を振り、

「木本くんを気にする先生が、そもそもいなかったんだ」

「そんな……」

残酷な言葉だった。

「目立たないが成績はいい。それに、クラス全体がいじめに加担しているわけではない。淵江くんだけがそういう行為に及んでいたのだから、先生の目に止まらなかった。……だから、あの時になるまでは、発覚しなかったんだ」

あの時。それは、例の松の木の事件か。

「あの松の木の事件がきっかけで、いじめは発覚した。それから、淵江くんは停学処分。木本くんは、休学扱いのまま在籍させ続けることにした。いつか、彼が戻ってくる日が訪れると信じてね。……半年以上にも及んだいじめは、それで幕を閉じたんだ。木本くんが学校を去るといって、理不尽な結末で……」

校長は、再び俺達に向き直った。そしてまた、目を閉じる。

「……木本くんも、学校に戻りたい、という気持ちに残っていた。だが、問題は決して、いじめだけではなかったのだ。彼は、自分自身に酷く劣等感を抱いていた。自分が臆病だから、誰一人友人も出来ず、挙句いじめられるようなことになってしまったんだと」

「……………」

「一度私が、直接家を訪ねた時、木本くんは、その思いを打ち明けてくれた。自分は、このままではいけないのだと。……だが、既に寡黙ないじめられっ子というレッテルが貼られた自分では、相手にされないに違いないと、私に言ったのだ」

まさか。俺にはその先が予想できた。木本剛志は、それで二年生の中に……？

「私は、それを聞いてすぐに計画を立てたのだよ。……木本くんに関する記録を、可能な限り全て消して。……そして、彼に新しい名前を与え、新しい生徒として迎える……。それは出来るだけ自然な形で行い、誰にも気付かれずに成し遂げよう、とね」

……そして。

「それで、木本剛志が、新しい生徒としてこの学校に迎えられ、俺達と、仲良くなった、と……？」

校長は、頷く代わりに、こう言った。

「計画が実行されたかどうかは、……君達の好きに、想像してくれても構わない。ただ、一

つ言っておこう。『木本剛志』はもう、ここにはいない」

……あまりにも衝撃的な真実だった。そして、間違いなくこの中に、『木本剛志』から名前を変えた誰かがいるのだと、ようやく俺は理解した。

こんなことが、起こりうるのだろうか。奇妙な運命のめぐり合わせのように感じた。

俺達七人の中に、木本剛志がいる……。

「どうか、木本くんの気持ちを、分かってあげてほしい。無論、彼があの事件の犯人じゃないことは、私が保証する。あの子が、あんなことを出来る筈がないんだ。だから、分かってあげてほしい」

校長先生は、悲痛な面持ちで、俺達に懇願する。

その言葉と表情とが、俺の胸にいつまでも残り続けた。

*

夕焼けの空が、俺達を照らしていた。誰一人、口を開くものはいなかった。

血に染まったような色となった校舎を仰ぎ見る。そこには、彼の幾百もの苦しみが未だ刻まれているのだろう。

消し去ろうとしても、消えない傷。目には見えなくなっても、それは残り続けているのだ。

そして、俺達の中の誰かが。

「もう、これで終わりにした方がいいんじゃないか？」

橋谷がぼそりと呟いた。彼の目はじつと地面のタイルを見つめている。この中の誰かが木本くんであると知り、誰とも目を合わせられないのかもしれない。

「橋谷くん……」

春子は、今にも泣きそうな顔をしていた。

事実を知った途端、こんなにも全てががらりと変わってしまうなんて。築き上げてきた信頼、友情が、一つの事実によって揺らぎ、消え去ろうとしている。

残るのは、疑心だけ。一体、この中の誰が、悲しみを背負った被害者なのか。誰が、淵江を殺した犯人なのか。

事件の真相を暴くのが、怖くなった。今日までは、仲間の疑いを晴らすため、そして少しの好奇心のため、事件の調査を行ってきたけれど。その事件の犯人が、他ならぬ演劇部メンバーの中にいるかもしれないなんて。

春子を守ろうと事件を調べ始め、結果それが、俺達の中の誰かを奪う羽目になってしまったとしたら……。

「そうだよ。これで、あの事件のことは終わりにしよう？ それに、昔の事件のことも……誰がそうだったとか、もう関係ない。俺達は俺達なんだ。それを疑うなんてこと、もう止めておこうよ」

佑也の言葉が重く、胸に押し掛かる。もう、これで幕引きにするべきなのだろうか。本当に。

「うん。ウチらには、これからもっと他に、やるべきことがあるんだもん。もう、これで終わろうよ、これで……」

望月が言う。苦しみの刻まれた校舎を見つめながら、手をぐっと握りこむ。

——だけど。

心のどこかで、この場の空気を否定する俺がいた。

知らないままできて、いいのだろうか。罪を隠し続けて、本当の自分を隠し続けて、木本くんは幸せなのだろうか。

……教えてくれ、木本くん。今きみは、一体どんな思いをその胸に仕舞いこんでいるというんだ？

そんな問いが浮かんできてくる俺には、このまま全てに目を瞑ることが、どうしても出来なかった。

八章 第二の事件

六月十一日。あれから、一週間以上が過ぎた。

遠野校長との一件の後、特筆すべきようなことは何も起こらなかった。更なる犠牲者も出ず、警察の捜査も進展した様子はなく、何一つ進まないまま、ただ時だけが流れた。

進んだことと言えば、首相が変わったことくらい。ここ最近、一年に一度変わるものだから、俺達にとっては最早興味をそそられない出来事だった。

俺達は——いや、俺以外のメンバーは、なるべく事件を忘れようと努めていた。たまに以前のように遊び呆けたり、菓子を持ち込んで食べたりしながら、少しずつ演劇の準備を進めていた。

表面上は平穏が続いていた。心の中の不和も、やがては静まるだろうと皆が思っていた。——しかし。

そんな俺達を嘲笑うかのように、悲劇は再び、この光耀高校に舞い降りることになるのだった。

その日の朝も、淵江大吾が殺された日と同じように、黒々とした暗雲が立ち込め、町は淀んだ空気に包まれていた。行き交う人の動きもいつになく緩慢で、それが何らかの不快感、予感を孕んでいるようだった。

「翔斗くん！」

そんな声が掛けられたのは、学校に到着し、いつもながら大混雑の自転車置き場に自転車を止めた時だった。振り返ると、そこには有希と春子、それに橋谷もいた。

「あれ、お前らなんでこんなに遅いんだよ？」

俺の第一声はそれだった。俺の登校時刻は、常に八時半の直前なので、有希や春子がこの時刻に登校してくるのが珍しかったのだ。おまけとして橋谷まで付いている。

「はは……実は、橋谷くんにダンボール運びを手伝わされたって訳だよ。ほら、演劇の道具をダンボールで作るって言ってたでしょ？ だから朝から橋谷くんの家まで言って、自転車でダンボールを縛って、学校まで持ってきたの」

「ああ、なるほど……」

見れば、一人当たり四箱分ほどのダンボールを抱えている。重くはないだろうが、大きさが大きさなので、持ちにくそうだった。

「とういか橋谷、持ってくるの遅すぎるだろ。ダンボール貰ってくるって言ってから、もう一週間以上経つぞ」

「悪い、すっかり忘れててよ。光代に言われて気付いたんだ。心臓止まるかと思ったぜ」

一体どんな風に言われたんだろう。物凄く気になる。

「おっと、立ち話してる場合じゃないよな。急いで部室前に置きに行こうぜ」

「うん、もうすぐチャイム鳴っちゃうし」

俺は、一人から一つずつダンボールを奪うように取って、歩き出す。丁度一人三枚ずつになった。

「あ、ありがとう、翔斗くん」

有希と春子は、そう言ってくれた。橋谷も感謝の一つくらいしてほしいものだ。少しばかり周囲の好奇の目を感じながらも、俺達は玄関で急いで靴を履き替え、校内に

入る。八時半頃になると先生の内誰かが玄関の先で待っていて、遅刻した生徒を注意するのが通例だった。この日も、こちらへ向かってくる先生が三人いた。

しかし、その中に一人、妙に整った身なりをした一人の男の姿が。

「あ、あれ……校長先生じゃない？」

春子があごを少し動かしした。両手がふさがっているためだ。

確かに、あの顔は校長だった。びっしりとした黒いタキシード姿で、ネクタイもしている。だが、どうして今日に限って、校長は正装を纏っているのだろうか。夏にさしかかろうとしているこの頃はネクタイもせず、上着すら着ていない日もあるのに。

校長はどうやら、これから外出しようとしているらしく、中へ入ってくる生徒に、こやかに挨拶をしていた。こちらには気付いていないようで、そのまますれ違ってしまう。

「……重要な会議かな？」

「そうかもね。変な感じだけど」

服装に無頓着な性格で、先週招かれた際も楽な着こなしをしていたので、生真面目そうな装いをしているのが少しおかしいのは確かだった。

「おい、君達。何だそれは。いやともかく、早く教室に行かないと遅刻だぞ」

校長に見とれていると、遅刻指導の先生に怒られてしまう。俺達は申し訳なさに一礼すると、まずは演劇部に向かって駆け出した。廊下は走っちゃいけないが、今だけは勘弁だ。

*

一時間目、二時間目と授業が終わり、三時間目の授業まで十五分間の休み時間がある。

その時間に、また望月がやって来た。彼女は上機嫌で、

「ねえ、今日から昼休みは演劇部でご飯食べない？」

「いいのか、それ。部室で飯食ってる部なんて殆どないぞ。それに、許可も取ってないだろ」

俺が言うと、彼女は「大丈夫」と親指を立て、

「顧問に許可を貰いました」

「え？ あの無関心そうな顧問に？」

「そう。無関心そうな顧問に」

聞かれてたら怒られるだろうな。俺は心の中で謝った。ごめんなさい。

「すぐにオッケーだしてくれたの？」

後ろの席にいる有希が聞いた。

「ううん。そういうわけじゃないんだけど」

「じゃあ……」

「先生、忙しいでしょ？ そこにウチが現れて、しつこく部室の使用をせまるの。そしたら先生、仕事の方が大事なんだから、認めてくれるわよね？」

「とにかく、これで昼休みでも部室を使えるわ。皆でお昼食べたり、演劇に使うものを作ったり出来るの」

望月がやりたいのは後者なんだろう。容易に分かる。

「それで、出来るだけ七人揃えたいわけか」

「まあね。文化祭まであと三ヶ月、頑張らなきゃ」

それはそうだ。俺達も望月のように、そろそろ気合を入れてやるべきか。

「分かったよ。じゃあ、昼休みは演劇部に集合な。有希も村越も、それでいいか？」

断る理由はない。二人は素直に頷いた。

「ありがと。じゃあ後は、橋谷くんに言ってくるから」

そうして彼女は、脱兎のごとく走り去っていった。

「望月さん、演劇に凄いい情熱捧げてるよね」

望月が扉の向こうに消えるのを見届けてから、有希が感嘆した様子で言う。

「そりゃ、あいつそういうのが好きだから。活躍の場が出来て、嬉しいんだよ」

体育が村越のフィールドだとすれば、物語の創作は望月のフィールド、ということだ。

「でも、何か空回りしてる感じがする。ああやって明るく努めて、実は結構傷ついてる、みたいなさ」

「……そうかもな」

有希の言うとおりだ。誰しも心の中で、崩壊を恐れている。俺達も、そしてきっと、木本くんも。俺達を結ぶ糸が千切れてしまわないようにと怯えながら、必死で笑顔をとり繕っている。

このままでは、いけない。俺はそんな、使命感にも似た感情が湧き上がってくるのを、ひしひしと感じたのだった。

＊

昼休み。チャイムが鳴るとまず、有希と村越が弁当を持って部室に向かった。俺はと言えば、毎度のことながら食堂へ駆け下りる。この日は淵江が殺された事件の時と同じように、佑也も付いてきた。

「今日から部室で昼食とるんだってね。望月さんも、割と行動派みたい」

「だな。演劇部って、女子の方が活発な気がする」

パンを手に階段を上りながら、俺達は笑い合う。

「裁縫の方は順調か？」

「うん、まあまあだね」

「後どれくらいで出来上がりそうだ？」

「さあ……。何か、望月さんしょっちゅうラフを付け加えてるみたいで、ノートを開くと装飾とかが増えてるんだよ」

「マジ？」

「うん、本当に」

ということ、小道具大道具の方も新しいラフが書かれてるかもしれない。確認しておかないと怒られる。

昼休みなので、三年生のいる三階を通る気にはなれず、俺と佑也は二階から別館へ渡った。

別館の廊下は、電気が点いておらず薄暗い。プールの水面に反射している日差しが、暗い天井にきらきらと揺らめいており、それをぼうつと眺めつつ奥へ進む。

手作り感溢れる看板の下がった部室の扉を開けると、

「待ってましたっ」

という声とともに、座布団の上に座っていた望月が立ち上がった。既に後のメンバーは全員揃っていた。

机の上には、各自の昼食が広げられている。そこに、春子の記録ノートもあった。俺と佑也も席について、昼食をとることにする。

「役もまだ決まっていけないけど、劇の練習ってのはどうするんだ？」

いつ買ったのか、食堂で売っているパンをほお張りながら、橋谷が望月に聞いている。

「ウチらこの部室、半分くらいしか使っていないでしょ。向こうの空きスペースで出来るわ」

「ああ、あそこであ……」

工具などがまだ乱雑に放置されているが、少し整理すれば十分なスペースが確保できそうだった。別館なので、声を張り上げてもある程度は大丈夫だ。

「張りぼてとかもあの辺に置いとけばいいわ。先生からもうブルーシートは貰ってきてるから。ペンキ塗りをするのもあそこだね」

流石望月、用意周到だなと、俺は感心した。そんな彼女は、他のメンバーより早く昼食を済ませ、早速パソコンの前に座り、キーボードをカタカタやっていた。部室に来たときに立ち上げていたのだろう。スクリーンセーバが真っ暗なので気付かなかった。

「台本の進み具合はどうなのよ、ゆみ」

望月の隣にいた村越が、上体を捻ってパソコンの画面を覗き見る。すると望月は体をびくりとさせて、

「うわ、びつくりした。悪いけど、文章打つてるところって見られたくないもんなのよ」

と言い、村越の顔の前に、ストップ、というように両手を突き出した。

自分の書いた文章を見られるのが恥ずかしい、という気持ちは俺にも分かる。小学生の時は、夏休みの宿題とかで書いてきた読書感想文が先生に読み上げられたら、忽ち顔が真っ赤になったものだった。

「望月は、自分の書いた台本で劇やるの、恥ずかしかったりしないか？俺は恥ずかしいと思うんだけどな、読書感想文が読まれるような感じで」

「ううん、そりゃちよつとは恥ずかしいけどさ。それくらいの子供の頃は、皆目立つのが嫌なものよ。後、これは私の個人的な考えだけどね」

そこで彼女は言葉を切り、顔だけを少しこちらへ向けて、「読書感想文って、あくまで他人が書いた本の感想を書くわけでしょ？それってあんまり達成感がないのよ。だから、先生に褒められて、皆の前で発表されることになっても、どうしてそんなので拍手されるんだろって感じちゃうのよね。それに比べたら、物語を作るっていうのは、今までに聞きた知識なんかはあるにせよ、最初から最後まで、作り上げるのは自分なわけだから。自分で考えて、書き上げたストーリーが拍手されるっていうのは、単なる感想文のそれとは雲泥の差があるってことなのよ」

「はあ、言われてみれば確かに。誰かが手伝った作品より、自分だけで書き上げた作品の方がずっと愛情が沸いて、褒められたら嬉しくなるわけだな。それなら分かるよ、俺も親

が手伝ってくれた美術の絵は、正直恥ずかしかった」

「しょ、翔斗くん、それちよつと違うかな……」

余程おかしい例えだったのか、望月は口元を押さえて笑いを堪えていた。……どうやら、無駄に自分の情けない過去を暴露したただだったようだ。ああ、小学校時代の恥ずかしさって、こんな感じだったっけ……。

それから雑談をしつつ数分、昼食を殆ど平らげたところで、俺は佑也の言葉を思い出し、春子の記録ノートを広げてみた。すると案の定、大道具のラフが一つ追加されていて、代わりに古いものがシャーペンで乱暴に塗り潰されていた。危ない危ない。次に作ろうとしているもので、形が簡単だったので、佑也が話してくれなければ、ノートを見ないままダンボールにカッターをいれてしまうところだった。

台本に衣装と道具のラフ。限られた時間で、よくもまあここまできっちりやつてくれるものだ。

「よし、皆食べ終わったみたいね。じゃあ、そろそろ作り始めましょうか。皆、頑張って完成させましょうっ」

振り向いて拳を上げ、望月が高らかに言い放った後、「おー」という、気合の入った、或いは気の抜けた声が疎らに聞こえた。

*

……そして。

その災厄は、放課後にやってきた。

もう二度と、起きて欲しくはない。誰もがそう思っていただろう悲劇。淵江大吾が殺されたあの日と同じ、胸を抉るような痛ましい光景。それはまるで、俺達の願いがどれだけ空しいものなのかを知らしめるような、理不尽で、残酷な事実だった。

第二の事件。

それは、昼休みから始めた作業の続きをしようと意気込んで、七人で演劇部へと向かう最中のことだった。互いに平和なお喋りに興じながら、賑やかに渡り廊下を通り過ぎた時、不思議な光景を目にして、俺達は異変に気付いた。

別館の狭い階段に、人だかりが出来ていた。奇妙なことに、その全員が先生だった。俺達は、一目見ただけで、何か良からぬことが起きているのだということを直感した。俺達は、当初の目的など忘れて、その人だかりに近づいていった。

「あの、何かあったんですか？」

「き、君達、どうしてこんなところに……」

白髪だらけで年老いた、面識の無い先生だったが、彼の慌てようは異常だった。それを見て、何とも言えない、気味の悪い不安感が俺を襲う。

「俺達その、演劇部で。部室がこの三階にあるんですけど、人だかりが見えて……」

俺は、当たり障りの無い説明をする。

「そ、そうか。……じゃあ君達は、部室へ戻っていなさい」

生徒には見せられない何かが、四階にはある。そして、先生はその何かに、酷く怯えている。恐怖している……。

心臓が早鐘を打つ。他の皆もそうだろう。春子は胸を押さえながら後ずさりし、佑也や望月も、落ち着かない様子で眉をひそめていた。

やはり事件は、決して終わってはいなかったのだ。誰かまた、新たな犠牲者が犯人の凶刃にかけられて、命を奪われたのだ。

確信めいた予感。あの時と同じだ。淵江大吾が殺された、あの暗い一日と同じ。

「ねえ、翔斗くん——」

有希は俯きながら、囁くように俺の名前を呼ぶ。戻ろう。そう言いたいに違いない。もう自分達は、この事件に首を突っ込みたくないただ。

「俺は、知りたいんだよ。この事件に隠されてることを、知ってやりたいんだ」

「翔斗くん……」

有希の手が、俺の指を軽く握った。怖いけれど、俺が行くなら付いていく。そういうことなのだろうか。

ごめんな、有希。

「あの」

白髪の先生に、恐る恐る俺は聞く。

「誰か、……死んでるんですか」

「君、そんなこと言うもんじゃない」

「でも！」

耳を澄ませば、少しずつ、聞こえてくる。二週間ほど前に聞いたのと同じ、あの音が。

サイレンの音。心をかき乱す魔の音だ。それは、頭に張り付いたように消えない。夜寝る前に聞いてから、ずつとずつと遠くで鳴っているような気がして、眠れない日もあった。

パトカーが、救急車が。またこの学校にやってくる。それはつまり、誰かが殺されたということに、違いないのだ。

「誰なんです、殺されてるのは」

後ろの六人も、一心にその先生を見ていた。悲しき運命を呪いつつ、けれどもその事実を受け止めようとしていた。

知るべきだ。誰が殺されたのかを。……だって、この中に、木本剛志がいるのだから。

「……はあ」

長く感じられた睨み合いは、先生のくたびれた溜め息で終わり、

「……仕方ない。この件は、他の子に聞かれても話さないように」

と言ってくれた。そして俺達は、先生の後に続いて、階段をゆっくりと上っていく。途中何度か他の先生に止められたが、前を歩く先生がそれを制してくれた。

四階に辿り着く。そこにあったものは。

「そ、そんな！」

全く、予想していなかった光景だった。

どうして、この人が。

「ひっ……」

望月が短く悲鳴を上げて、両手で口元を押さえるのが見えた。春子は気を失うのではないかと思うくらい蒼白になって、壁に寄りかかり、有希はさっきのように俯いたままで、

体をわなわなと震わせていた。

だらしなく垂れた白い髭に、黒いタキシード。……首に巻きついた青いネクタイさえなければその人は、俺達が朝目撃したあの姿そのままだった。その人は、この別館四階の突き当たりで、壁に頭を寄りかけるようにして倒れており、その首には、しっかりとネクタイが食い込んでいたのだった。

……どうして、校長先生が。

「また同じだ、ネクタイで首を絞められて……。淵江のときと、まるで同じ……」

橋谷が声を震わせる。そうだ、俺と佑也以外の五人は、初めて他殺死体を見たのだ。今更そのことに気付いた。見たくなかったかもしれないのに、俺は全然気遣わなかった。申し訳ない気持ちになって、俺は齒を食いしばった。

現実感を喪失したかのように、橋谷と村越が、ふらふらと死体の傍へ歩み寄ろうとしていた。それを察して、他の先生が手で遮って止める。

「駄目だ」

近づいてはならないのだ。ここは殺人現場であって、何らかの証拠が眠っているかもしれない場所。そこに踏み込むことはすなわち、証拠を消し去ってしまうことになるかねない。先生に押し戻された二人は、操り人形のようにぎこちなく後ずさった。

気付けば隣には、虚ろな表情で死体を見つめる、田崎先生の姿もあった。目の焦点が定まっていない。もしかしたら、軽い気持ちで校長先生に、木本くんについて聞いたことを、後悔しているのだろうか。今ここで無残な姿を晒している校長が、誰に殺されたのかというのを薄々感付いて、戦慄しているのだろうか……。

やがてばたばたと、慌しい足音がいくつも聞こえてきた。……担架を担いだ救急隊と、警察の人達だ。

「もう戻りなさい。戻るんだ」

有無を言わせぬ先生の言葉に、俺は素直に従うしかなかった。重い足取りで、階段へと向かい始める。警官服を着た人たちがぞろぞろとやって来、たちまち死体の周りを取り囲んだ。そしてすぐ、立ち入り禁止のテープが貼られる。

足を止め、ぼんやりとそれを眺めていた俺は、春子に袖を引っ張られ、また歩き出す。もうここにはいてはならない。ここはもう、俺達のいい場所じゃない。

春子達の沈んだ表情を見て、俺は後悔した。巻き込んで悪かった。せめて俺一人で、ここへ来れば良かったのに――。

その時、警察官の一人が、「おっ」という声を上げた。

「何か持ってるな」

何だろう？ 俺はそれが無性に気になって、何とか現場が見える位置まで戻ってくる。他のメンバーはそれを一度止めようとしたが、諦めたようだった。皆はそこで、待っていてくれればいい。

「紙だ、紙。しっかり握りこんでる」

紙。聞く限り無価値なもののように思われたが、そうではなかった。その紙には、一つの重大な事柄が記されていたのだった。

「これは……」

くしゃくしゃになった紙を開くと、警察官は露骨に顔をしかめた。まるで意味が分かり

かねるようだ。そしてその警察官は、こちらへやってくると、

「誰かこれに該当する人のことを、知りませんか？」
と尋ねた。

その文面を見た俺は、驚愕した。

そこには、パソコンで打たれ印刷されたと分かる明朝体で、こう記されていたのだ。

先日のお話があります。戻り次第、別館四階へ来てください。
なお、この紙は目立たない場所に捨ててください。

該当者とは、俺達のことには違いなかった。

*

演劇部で、死を待つ囚人のように、俺達はただ、黙り込んでいた。二度目の事件。それがもたらした恐怖は、計り知れないものだった。

何故、校長が殺されなくてはならなかったのだろう。その答えは、実のところはつきりとしていたが、考えるのが辛かった。

……紙に書かれた、先日のお話という言葉。それが、如実に物語っている。校長が殺された理由が、あの時の話にある、と。それはつまり、一年前の被害者、木本剛志がこの中にいることをうっかり漏らしてしまったのが、校長が殺された理由だということ……。

……そんなことで。校長は、ただあのミスがあっただけで、殺されなくてはならなかったのだ。木本くんのことを憂い、そして過去を消し去ろうとした校長が、たったそれだけのことで。

校長は、木本くんが犯人じゃないと、力強く保証していたというのに。そんな校長が、あんな風に、淵江大吾と同じ方法で、ネクタイで首を絞められて、殺されるなんて。

校長を殺したのは、誰なのだろうか。このメンバーの中にいる木本くんの可能性は限りなく高い。だが、違う可能性があることもまだ拭い去れなかった。そう、例えば、木本くんに心許した人がいて、その誰かが木本くんに辛い思いをさせた人間を殺している……。分らない。思考はただぐるぐると同じところを回り続けるだけだった。

「終わってなかったんだ、事件は……」

佑也は呻く。見えない殺人者に、怯えているようだった。そう、この中に人殺しがいるかもしれない。そう思えば、怖くなるのも当然のことだ。

誰かが怪しい。誰もが怪しい。疑いが、消し去れない。

「どうして、この前の話だけで、校長先生が殺されなくちゃいけなかったの……？　もうウチら、木本くんが誰なのかを探そうなんて、思っただけなのに……」

望月が、目を潤ませながら言った。そう。それが、分からなかった。もう誰も、悪い人間なんていないのに。

「誰が、誰が木本なんだよ、はっきりしろよ、もう！」

橋谷が突然立ち上がり、声高に叫んだ。

「止めてよ、橋谷くん！」

それを有希が止める。

恐ろしかった。またしても訪れた突然の混沌に、メンバー内には軋轢が生じていた。誰が木本剛志なのか。誰が、殺人者なのか。隣の人間が、信じられない。今まで仲良くやってきたはずの仲間が、信じられない。

「名乗り出てくれよ、もうさ……。こんなことって、有り得ないぜ……？」

橋谷が唸る。それはそうだ。いじめの被害者が名前を変え、二年生に紛れ込んだり、その生徒に関係した人物が殺されたり……。次が自分達でないとやるだろうか？ 木本くんを守っていた校長先生が殺されたように、今まで彼と楽しく過ごしてきたであろう俺達も、一つの秘密を守り通すために、殺される可能性だってないわけではないのだ。ああ、今もこの中の誰かが、湧き上がる殺意を必死に抑えているのかもしれない……。

「自分が木本くんだって、誰か手を挙げてくれない？ お願いだから……」

春子が、目に涙を溜めながら言った。しかし、誰も手を挙げはしない。こんなことで正体を暴露するのなら、校長を殺しなどしなかったはずだ。木本くんも、或いは木本くんをかばっている人物も。

先ほどまでは、笑いかけていた俺達なのに。今はもう、そんなことは出来そうもなかった。疑惑と恐怖が入り混じり、互いの顔色を窺い続けるのみだった。

これ以上の不幸があるだろうか？ 最高の仲間だと信じあっていたのに。たった一人だけ紛れた仮面の俳優が、その全てを狂わせてしまった。もう、これ以上に悪いことなど、起きるだろうか。俺は深い深い絶望感の中、そんなことを思っていた。

——しかし、悪夢は決して、それだけに留まらなかったのだ。

沈黙が続いた数分後。遂にその時は、やってきた。

打ち鳴らされる扉。誰かが扉の前に立っている。俺は力なく立ち上がり、その扉を開く。するとそこには、先ほど見かけた警察官が立っているのだった。彼はぐると品定めでもするように、俺達七人を見回し、言った。

「一つ聞きたい。ここは演劇部だな。……この中に、泉春子さんはいるか？」

恐れていたことが、現実となった。

春子は、石のように身を硬くしていた。

幕間 木本剛志からの手紙

——だけど、あの時あの人——校長先生が俺の秘密を口にしてしまった時、俺は自分の身を優先せざるを得ないと思った。そうしなければ、俺が誰かということが忽ち明らかになってしまう。俺が木本剛志だと分かれば、それは俺が淵江を殺した犯人だと分かることと同義だ。だから俺は、淵江以外は誰も殺すつもりもなかったのに、ああして校長先生を……淵江を殺したように、絞殺したんだ。俺に新しい命を与えてくれた恩人である、あの人を。

校長先生を殺すのには、具体的な計画は立てられなかった。あの人を殺さなくてはならないと決意したのは、あの人がかつかり秘密を漏らしてしまうというハプニングがあったからだ。まさか俺も、校長先生を殺すことになるとは、想像もしなかった。あの人とは多分、ずっと師弟のような関係で続けられるんじゃないかとすら、思っていたんだから……。

自分で殺しておいてこんなこと書くんて、俺って本当、最低の男だ。思えば俺は、事件を起こしてからずっと、色々なものを守ろうとして、悩んで、あれこれ策を講じて。それで結局、殆ど一つとして守れずにいた。翔斗が俺に、引導を渡してくれなかったら、俺は最後、大切な演劇部の仲間まで失っていたかもしれない。本当に、翔斗には感謝してもきれないよ。

あの事件のすぐ後に、春子ちゃんが警察に連れて行かれて。そして俺は、自分の方に傾きすぎた天秤を、春子ちゃんの方へ戻そうと知恵を絞った。その結果が、あの文章を残すことだったんだ。翔斗が『月光ゲーム』と名前を出してくれたけど、多分春子ちゃんも気付いてたんじゃないかな？ あの文章もそう、推理小説が好きだから真似たんだと思う。

月の狂気。或いは俺の激情もまた、それ故のものだったら良かったのに。『月光ゲーム』を引用したのには、自分の心の中のそういう願望もあったんだろうな。まあ結局、あの文章は演劇部の外へは出て行かなくて、春子ちゃんの疑いが晴れることは無かったけど。

そういうわけで……

九章 犯人の要素

春子はそのまま、警察官に連れて行かれてしまった。今になって、彼女が淵江と接点を持っていたという事実が、どこからか浮かんできたのだろう。ほんの僅かな関係性でも、警察は見逃さなかったのだ。おまけに演劇部には、『先日の件』の該当者が全員揃っているのだから。誰か——田崎先生にでも聞いたなら、そのことはすぐに判明することだった。俺達は、春子が連れて行かれるのを止めることは出来なかった。誰もが悲しげな顔をしていたが、一番悲壮に満ちていたのは春子自身だった。まるで人身御供にでもなったかのように、俺達に向かって一度だけ、弱々しく首を振って、彼女はこの部屋から静かに出て行ったのだった。……後に残された俺達は、ただただ悔やむことしか出来なかった。

いつの間にか、雲間から太陽が覗き、その陽が落ちようとしている。もう五時を過ぎていた。灰色と朱色が交じり合った不思議な光が、寂寞の演劇部室に差し込んでくる。俺はそれを、ずっと空ろに眺め続けていた。

どうすればいいのだろうか？ 春子を救い、他の誰かを疑うのか、或いは春子が犯人だと決め込んでしまうのか、それとも——。

諦めたい、もう何も考えたくないと、一瞬だけ思った。けれど、それをすぐさま否定する俺がいた。

——このままで、いいわけがない。

その日は結局、村越の「帰ろう」という一言で、解散の運びとなった。誰一人、それ以上言葉を発したりはしなかった。

皆、薄々は思っているのだろう。覚悟があるのかどうか。それを、自らに問うているのだろう。

この中の誰かが犯人だ。それを受け入れる覚悟が、果たして自分にはあるのか。

*

心配だったので、俺は夜になってから、春子の携帯へ電話を掛けてみた。彼女は案外すぐに出てくれて、明るい声を聞かせてくれた。

「こんばんは、翔斗くん。珍しいね、電話くれるなんて」

「馬鹿。こんな時だからだよ。……大丈夫か、春子」

俺が聞くと、彼女は穏やかな声で「うん」と答え、

「そんなに大した事は聞かれなかったよ。淵江くんとの関係を聞かれて、あと、淵江くんの死亡推定時刻にどこで何をしたのかも聞かれたっけ。それから、今日の事件についても」

何でもないように話しているが、それはつまり、春子が容疑者として疑われているということだ。アリバイを聞いてきたのだから間違いない。

俺が言葉を返せないでいると、

「で、でもね。質問をされたから、事件の詳しい情報を聞けたりもしたんだよ。翔斗くん、知りたいんじゃないかな？」

「まあ、そりゃ知りたいけど。お前……」

「私はいいの。大丈夫、私は犯人じゃないんだから。――ね？」

「……そうだな」

俺もお前のことだけは、無条件に信用できるよ。心の中で、俺はそう思った。

「ええと、じゃあ警察の人に言われたこと、話しちゃうね。まず、校長先生が殺されたのは、十二時五十分頃から二時半頃のことみたい。けどほら、私達、昼休みにも演劇部に行つたよね？ 演劇部は事件現場の丁度下だけど、あの時は何の物音もなかった。人がいない別館だから、足音がすれば誰かが気付いたと思うし、だから昼休みには、事件は起きてなかったと思うの」

昼休みは十二時四十分から一時二十分だ。ということは、警察が導き出した死亡推定時刻より、更に範囲を狭めることが出来る。犯人は、一時二十分から二時半までの間に犯行に及んだのだろう。

「とは言え、私はまたアリバイがないんだよね。皆はどうなんだろう」

他のメンバー全員のこととは分からなかったが、少なくともあの日の六時間目は選択授業で、多くの生徒が教室移動をしていた。

「多分、今回の事件は犯人を絞り込むのが難しいだろうな」

「そう……」

難しいことを警察がどう処理するか。それ次第で、春子のこれからが決まりそうだった。

「ところでさ」

「うん？」

「警察の人、どこから春子のことを知ったんだろう」

さつきから気になっていたので聞いてみると、

「それがね。万引きで捕まってた寺河さんが言ったみたい。淵江くんが殺される前、少し話を聞いたんだって。……去年いじめてやった奴と一緒にいたことがある女がいた、とか」

「寺河か……って、それ本当か？」

「う、うん」

去年いじめてやった奴というのは、無論木本くんのことだ。その木本くんと春子が、一緒にいたことがあると淵江は話していた……。

「今までに三年生と話したことはあるか？」

「うん、行事とかで簡単な挨拶とかはしてるけど、知り合って呼べるような人は一人もないかな」

やや曖昧だが、いないと見なしていいだろう。そうなるとやはり、木本くんは俺達演劇部の中にいることになる。

だが、皮肉なものだ。誰一人として木本くんに気付いていなかったというのに、彼をいじめていた淵江だけが、木本くんがいたことにいち早く気付いていたなんて。

「多分警察は、まだ木本くんが学校にいるとは思っていないはずだ。痕跡は全部消したし、校長と話をしたのは俺達だけ。そう、校長を殺し、残った住所録さえ消せば、木本剛志がまだこの学校にいるという事実を、消し去ることができたも同然なんだよ」

無論それは、俺達が口を硬く閉ざしたとするなら、だが。

「木本くんか、或いは木本くんの協力者はつまり、それを願ってるんだよ、きっと。誰が木本くんのかをもう、暴かないでほしいんだ。その為に、校長を殺したんだ……」

「そう、なのかな……」

春子はまた、言葉を濁す。仲間思いの彼女にとって、それは当然のことだ。俺の言っていることはつまり、演劇部の中に、淵江を、校長を殺した犯人がいるということなのだから。それを易々と認めたくは無いのだろう。だから、肯定しないのだろう。

俺達が口を開かなければ、恐らく木本くんは探されることもない。遠くへ転校したことにでもなっているに違いない。だが、何も言わなければ春子はどうなるのか。彼女にはアリバイが無かった。

「……どうすればいいんだろうな、俺達」

「……うん」

「春子は、どうしたい」

「……分かんないよ」

彼女は優しくかった。だから、誰が傷つくのも、嫌なはずだった。だから、もしかすれば悲痛な決意を固めているのかもしれない。自分が疑われ続けても、木本くんを守ろうとする、悲しき決意を。

「……ごめんな、春子」

「何で、謝るの」

「お前一人に、背負わせてる気がして」

「そんなこと、ないよ」

——まだ、迷いがあった。すぐには決めかねることだった。

だけど、彼女の声を聞き、思う。

「すくなくとも、お前が犠牲になることはない。俺達は最初から、お前を守るつもりだったんだから」

「翔斗くん……」

「今日はゆっくり休め。電話かけたのはこっただけだよ。また明日、元気に学校で会おう」

「う、うん。……ありがとう、翔斗くん」

「ああ。じゃあ、また来週な」

「うん。また来週」

電話を切る。

パタリと携帯を畳んで、俺はため息を吐いた。

——真実を、暴いてみよう。全てはそれから、決めればいい。

*

休みが明けた月曜日、春子は学校に来なかった。どうやら風邪をこじらせて寝込んでしまったらしい。学校に来る前に携帯を確認すると、そういう内容のメールが届いていた。先週のことがあったので、やはりまだ来たくないのかとも思ったが、その可能性は考えないことにした。

演劇部の残りのメンバーもしかし、今日はあまり集まっていなかった。放課後になって俺がやってきた時、部室にいたのは村越と望月だけ。望月は演劇の台本を書いてくれているようだったが、気分が乗らず、あまり捗っていないらしいかった。

「あー、駄目」

などと言つて、何度も寝転がつている。

「どうして他の奴らはこないんだ？」

知っているのかは分からなかったが、俺は聞いてみる。

「武はさっきまでいたんだけどね」

そう言ったのは村越だった。その後望月が、寝転がったまま、

「ああ、橋谷さんと有希ちゃん、なんか三階にいるのを見たけど……何してるんだろぅね。ちなみに佑也くんは怖くなっちゃったみたいで、帰るってだけ言い残して帰っちゃった」

「ふうん……」

佑也は気が弱いから、仕方ないのかもしれないが、橋谷と有希はなにをしているんだろぅ。三階は三年生がいる階だ。そこに用なんて、二年生には無い筈だが。

「私、ちよつとトイレ」

人数が少ないので退屈なのだろうか。村越はそう言うときすぐ、部室から出て行つた。

これでは演劇の作業も出来ない。やることがないので、俺も望月のように寝転がつてみた。——このまま何も考えず眠りたい、という欲求に駆られる。そんな甘えを頭の中から追いやつてから、ふと顔を横へ向けると、一冊の本が目についた。

「何だ、この本」

「ああ、それは水原先輩に」

表紙を見ると、女の子が二人抱き合っているような絵だった。……あの先輩、やはりそういう趣味か。

帯にはいかにもそれらしい言葉が並んでいる。いや、年齢制限のあるような本ではなかったが、それでも橋谷の漫画と並んでいると、その違いがとても目立った。

——そういえば、この言葉つて基本的には女の子に使うのか。

「ねえ、翔斗くん」

ぼんやりと本を眺めていると、望月が呼びかけてきた。

「何だ？」

「翔斗くんは、誰が木本くんなのか、誰が犯人なのかつて、考えてる？」

「……そうだな。捕まえたいとかそんなんじゃないやなくて、ただ単純に知りたいとは思つてる」

「そつか。そうだよね」

望月は、ばねのように起き上がる。

「ねえ、ウチのことは、怪しいって思つてないの？」

「それは——」

突然の質問に、俺は少しあせつたが、こう返した。

「だって、望月は男じゃないだろ」

「そうだけどさ。犯人が木本くんだつて決まったわけじゃないでしょ。木本くんの境遇を知つて助けようとした誰かが、二つの犯行に及んだかもしれない」

そう。それはまさに今悩んでいるところだ。犯人が木本くん以外で、もしかすれば木本くんは何一つ関与していないという可能性だってある。その場合、事件の真実が暴かれたなら、木本くんは今までの努力を全て無に帰されただけの、哀れな被害者でしかなくなつてしまふ……。

「小林くんみたいに、姉と比べられて苦しんだり、橋谷くんみたいに、友達のいない時期があったり。木本くんの境遇に共感しそうな人は、意外と多いと思うよ」

「何？」

望月は、さも周知の事実のように話したが、橋谷にそんな時期があったことなど、聞いたことが無かった。

「それ、どういうことだよ？」

「あ……。いや、光代ちゃんから聞いた話。橋谷くんは昔、強面だった故に友達が出来なかったっていうね。そういう理由もあって、橋谷くんは転校してきたらしいよ。漫画が好きなのだって、友人と遊べなかったからなのかもしれない」

「そんな、そんなことが」

まるで知らなかった。橋谷にそんな過去があったなんて。元気で調子のいい転校生、くらいにしか、初めは思っていなかった。あいつ、小林が打ち明け話をした時には、悩まないのが悩みだなんて言ってたのに、そんなことを、隠していたなんて。

「友人が出来ないだとか、そういう人って、本が好きになる傾向が強いんじゃないかって、ウチは思っちゃうな。いや、そうじゃない人もいるけどさ。一緒に時間を過ごす人がいなくなったら、本を読み始める。そんなタイプの人、意外と多いと思うんだ」

望月は、眼鏡を軽く押さえながら、顔を伏せた。そして、自嘲の笑みを零した。

「ウチも、そうして本が好きになった内の一人だからね」

「——え？」

またも衝撃的な言葉が、望月の口から飛び出す。

「親がさ、随分前から仲悪くて。家の中に、ウチの居場所が無かった感じでき。後から教えてもらったんだけど、原因は母親にあったみたいで、それで今、ウチはお父さんと二人で暮らしてる状態なのよ」

「望月……」

努めて明るくあろうと常に笑っている望月。しかし彼女のその笑顔に、俺は今初めて、影が差していることに気付いた。有希の言っていた通り、いや、それ以上に。望月は、辛く苦しい思いを覆い隠そうとしているのだろう——。

「驚いたでしょ、今まで言わなかったから。ま、そういう事情があってウチは、そういう本が好きになったのかもしれないねえ」

数少ない、彼女が持ち込んだ本。その表紙を薄目で見つめながら、望月は小さく息を吐いた。

「ねえ、翔斗くん。誰にだって、人には言い辛い部分があるのよ。それでも話すのは、その人を信頼しているからだと思う。翔斗くんは、皆に信頼されてるわ。だから、佑也くんも、ウチも、打ち明けたのよ。自分のそういう部分をさ」

——翔斗には何か、心を開かせる大らかさがあるというか。

佑也の言葉が、鮮明に蘇った。

俺は、そんなに頼もしい人間のだろうか。こうしてメンバーの影を知っていく中で、自分がそれほど信頼されるような男だとは思えなかった。こんな、何も知らない、平和ボケしたような俺が——。

「大丈夫。翔斗くんは自分が思ってる以上に、部長らしいわよ。いつだって皆の中心にい

るわ」

と、望月はまるで俺の心を見透かしたように言った。

「でもね。信頼できて話せないことだってある。他の誰にだって知られたくない傷とか、そういうのがある人もいる。木本くんや、もし彼の共感者がいたらその人にも多分、そんな傷があるのよ」

傷、か。塞ぎかかったその傷口が、開かれてしまったが故に、この事件が起きたのかもしれない。俺はそう思ってもみた。

「その傷が何なのかを知ることが、木本くんや他の誰かにとって、いいことなのかどうか。それが、難しいところなのよね……」

望月は、迷っている。瞬間、俺はそのことを悟った。真実を知ること、取り返しのない悲しき崩壊が起こるのではないか。それを、恐れている。

そして、他のメンバーもきつと、同じことを苦悩しているのだろう。殺人の恐怖と、この演劇部が崩壊してしまうことの恐怖の狭間で、ずっと苦しんでいるのだ。

「……それでもさ」

俺は、独り言のようにぼそりと呟いた。

「それでも、俺は知ろうと思う」

「……翔斗くん」

「俺、どうしても信じられないんだよ。この演劇部の中にいる犯人が、あんな事件を起こして平気でいるだなんて。だって、俺達演劇部の仲間は、皆優しい奴らなんだ。平気で人を殺せるわけがないんだ。だから俺は、犯人も苦しんでるんだって思えてならない。心のどこかで、もう嫌だと訴えてるんだと……」

勿論、これは俺の勝手な想像だった。だけど、そうに違いはないという、確信はあった。

犯人は、その仮面の下で密かに涙している。隠し続けることの罪深さに、きつと苛まれ続けている――。

「……強いんだね、翔斗くんは」

自分には無理だ、といった調子で、望月は言った。

「いや、そんなことないさ」

そこで、沈黙が室内を満たした。

やがてそれを破るように、望月が、

「ご、ごめんね。こんな、暗い話しちゃってさ」

「いいんだよ、望月。なんか、ありがとな。俺、案外何も知らなかったんだ。部長のくせに、部長のこと」

「……そうだね」

一体、誰が木本くんなのか。誰が、この事件の犯人なのか。

望月の話で俺は、ようやくそれを探し当てようという、決心がついたような気がした。「よし」

俺はそう言くと、勢いよく起き上がった。突然のことだったので、望月が驚いて体をびくりとさせた。

「じゃあ、ちよつと行ってくるかな」

「どこに？」

目をぱちくりさせる望月に、俺は答える。

「事件のことを調べに、だよ」

そして、丁度部室に戻ってきた村越と入れ替わりに、俺は演劇部を立ち去った。

＊

木本剛志は誰なのかは、警察が本気になって調べればすぐに分かることだ。けれど、望月の言うように、暴かれたくない傷というものがある。それでもその傷を暴こうというのなら、その役は警察ではなく俺がやるべきだ。俺はそう思う。

警察はまだ、木本くんがここにいることを知らない筈。校長先生が施した何らかの策が、功を奏しているのかもしれないな。……彼らが傷口を乱暴に掘り返すより先に、何とかして俺が見つけよう。この事件の真相を。

まず、一連の事件における謎はいくつあるのだろうか。俺は廊下をゆつくりとした足取りで進みつつ、考えてみる。

大別すると、これくらいの謎が挙げられるだろう。

一つ目、誰が淵江と遠野校長を殺したのか。

二つ目、誰が木本剛志は誰なのか。

三つ目、淵江の事件時、犯人はどうやって教室に侵入したのか。

そして四つ目、犯人は何故、校長を殺害するまでに一週間以上も期間を空けたのか。

この、四つ目の謎については、俺はある程度の仮説を立てている。その仮説が果たして当たっているのかどうかを、今から確認しに行こうとしていた。

本館二階の職員室。用がある生徒はノックを、という張り紙の指示に従って、俺は扉を二、三度ノックしてから開き、室内に入った。何人かの先生がこちらをちらりと見たが、すぐにまた机へ視線を落とした。

近くに手の空いている先生がいないかと探してみると、校長が殺されたあの現場に居合わせ、俺達を案内してくれた、白髪の先生がいたので、声を掛けてみる。

「あの、すいません」

先生は、俺の顔を認めると驚いて、

「おや、君か」

「はい。あの……先日の件でちょっと、聞きたいことがあるんです」

ぶしつけな質問だと分かっていたが、先生はやはり怪訝そうな顔をした。

「何だね、突然」

仕方がないので、俺はある程度の事情を話すことにする。

「実は、部員が疑われちゃって、警察の人に事情聴取を受けたんですよ」

「何？ それは本当かい」

「ええ。とっても、優しい女の子なんです。あの子が人を殺せる筈がない。——だから、どうしても聞きたいことがいくつかあって」

「ふむ。だがそれを知ってどうするのかね？ 警察に話しても、素人の意見は聞いてもらえないだろう」

「いや、それでいいんです。これは、演劇部の問題ですから。メンバー内に、必要の無い

不信任が漂い続けてほしくないんです」

「なるほど、信じたいからその確証がほしい。そういうわけだね。……まあ、私に答えられることなら答えてもいいが」

「あ、ありがとうございます」

俺は深々と頭を下げた。何事かと他の先生達がこちらに注目したので、白髪の先生は慌てて、

「ちょっと外で話をせんか」

そう言つて大儀そうに腰を上げた。

廊下では、数人の生徒が仲良くお喋りしていた。職員室の向かいには図書館があるので、そこからの帰りなのかもしれない。

「で、何が聞きたいんだい」

髭の剃られた顎を撫でながら、先生は聞いてきた。

「そうですね。まず聞きたいのが、校長先生があの日正装をしていた理由です。俺と演劇部のメンバー数人が、事件が起きた日の朝に玄関前で、校長先生が綺麗なスーツを着込んで出て行くのを見たんですよ。普段はあんな服装はしないものだから、何か特別なわけでもあったのかと」

「ああ、あれか。あれについては、出来る限り表にはださないことになっているんだけどね。……昔、ちょっとした事件があったんだ。そう、一年前のことだよ。あの日はその被害者が、学校からいなくなった日。誰もがその子に救いの手を差し伸べられずに、出て行った日なんだ。校長先生はそれをずっと悔いていてね。あの日に限って正装をして、被害者の家へ向かったそうなんだ」

やはり、木本くんが関わっているのか。しかし、校長先生が被害者の家を訪ねていたとは。もしかしたら、木本くんが心境を打ち明けたと言っていたあの日以外にも、遠野校長は何度か木本家へ足を運んでいたのかもしれない。

それに、淵江が殺され、少なからず木本くんにも嫌疑は掛かっていた筈だ。にも関わらず警察が木本くんについての捜査を進めていない現状から察するに、校長は木本くんが事件に関わっていないことを印象付ける、何らかの措置を行ったことも考えられる。木本くんの家族とともに。

「家がどこにあるか、勿論校長先生は言わなかったんでしょね」

「そうだね。今は遠くにいる、と言いつけていたよ。だが、実際のところ家がどこにあるのかは分からない。本当は今もまだ、この近くに住んでいるかもしれないんだ。何故なら、その子の家は裕福ではなかったからね。いじめられたとしても、中々引越なんて出来なかったんだよ」

「そうなんですか……」

引越してできない事情があつて、それを校長が知り、なんらかの処置をした、ということも有り得るのか。——恐らく、普通ではない処理だ。個人情報完全に偽らせて、木本くんを今在学させているのだから。

ともかく、正装をしていた理由は分かった。木本くんの家へ向かったから、あの日に限って、校長先生はあの服装だったというわけだ。

「被害者の子は、勉強もよく出来て、立派だったんだけどねえ。事件さえなかったら、有

名な大学へ行けていたんじゃないかと、私は思ってるんだよ。特に、私が教えていた物理に関しては」

「物理、ですか」

この先生は、物理の先生らしい。俺はそれを聞いて、思いついた質問をぶつけてみた。

「木本くんの成績表とかはないんでしょっか？」

「それが、無いんだよ。どうやら校長先生が破棄してしまったようだね。木本くんに関する書類なんかは、全部無くなってるっていい。成績表か、あれは四や五が並んで素晴らしいかったんだが」

「そう、なんですか」

やはり校長は、念入りに書類を処分していたようだ。残っているのを期待してはいなかったが、少しがっかりしたのも事実だった。

「分かりました。聞きたいことはあと二つだけです。校長先生が学校を出た時刻、そして帰ってきた時刻はいつだったんでしょうか？ それから、校長先生が握り締めていた呼び出し状は、いつ校長先生の手に渡った、或いは手に渡るように何処かへ置かれたんでしょうか。……分かりますか？」

先生は一つ大きく深呼吸すると、

「呼び出し状については分からない。だけど、校長先生は君達が朝見た時間に学校を出て行った。そして十二時半に帰ってきた。そこから校長先生を目撃した人がいないから、少なくともあの人は、呼び出された場所へ向かうまで、校長室から出なかったんじゃないかな。そして、あの人がずっと校長室にいたのなら、その時に犯行に及んだ方が手間が掛からなかったのだから、私の考えでは、あの呼び出し状は校長先生が出かけた後、そして帰ってくるより前に、校長室にでも滑り込まされたのだと思うね」

いかにも理系の人っぽい、筋道立てた説明だった。そして、その説明も、俺が想像していたのと変わらないものだった。これで、俺の推理は裏付けされたのだ。……今聞いた事実によって、犯人を限定することが出来る。勿論絶対ではなかったが、これに当てはまらない人物が犯人なら、全くの無計画殺人なのに、わざわざ呼び出し状を送りつけていることになる。なので、限定された人物以外は、とりあえず圏外へ出してもよい筈だ。

「ありがとうございました。おかげで、かなりのことが分かったと思います。まだこれだけじゃ、その子の疑いは晴れませんが、とにかく参考になりました」

「あ、ああ。役に立ったならいいんだが、それにしても、今ので本当に何か分かったのかね。私にはさっぱりだ」

それはそうだ。先生は全く無関係の人間なんだから。誰が容疑者なのか、何が原因なのか、先生は知らない。

これは、俺達の問題だ。

演劇部の、事件だ。

「それと、最後にもう一つだけ、聞きたいんですけど」

「うん？」

「警察はその、いじめ被害者の詳しいことは知りませんよね？」

「……ああ、積極的に口にする人はいないからね。もう木本くんがいた痕跡もないし、そこまで詳しくは知らないんじゃないかな。名前くらいは分かっても」

谷が考えたのか？　嘘じゃないだろうな。

「お前と有希って珍しい組み合わせだから、本当は有希が考えたんじゃないのか？」

と聞いてみると、

「まあ、具体的にどうすりや疑いが晴らせるかっていう所は、早瀬が考えてくれたよ、うん」

そこが一番重要なところだろ。俺は呆れて溜め息を吐く。

「光代の奴に馬鹿にされないようにさあ、俺も何とかしてみたかったんだよ」

まるで、友人に唆されて行った軽犯罪で捕まった子供の言い訳みたいだ。

「それで？」

とりあえず俺は先を促す。

「あ、ああ。扉から犯人が侵入したのを否定するには、どうすればいいか。それって案外難しいことなんだよな。そりゃ勿論、監視カメラとかがあつて、犯人が出て行くところしか映ってない、とか言うのなら、すぐえ簡単に分かるんだけど。それどころか、犯人の顔まで分かっちゃうんだろうけど。そうはいかないから、俺は悩んだんだ。目撃者はいない。なら、どうすれば証明ができるか。――そして思いついたんだ。例え目撃した奴はいなくても、聞いたやつはいるんじゃないかってよ」

「ははあ、つまりお前は、淵江の死亡推定時刻とされるあの時間に、扉が開かれる音が何回したかというのを特定したかったわけだな？　そしてその為に、三年生、いや、あの教室に近くて教室内で授業が行われていた、三年四組の生徒に、その音を聞いた奴がいなかったかどうか、尋ねて回ってみてたんだ」

有希と橋谷が三階にいたのは、それが目的だったからなのだ。扉が一度しか開閉されていなければ、犯人は必然的に、窓から侵入したことになるのだから。教室の扉はスライド式で、静かに開けようとしてもゴロゴロと音がする。なら、開けた回数分の音が誰かに聞かれる可能性は十分にあるのだ。

「それで、いたのかよ、証人は」

俺は、自分が僅かに興奮していることに気付いた。そうだ、これで春子の疑いが薄くなる、いや、消えて無くなってくれるかもしれないのだ。嬉しくないわけがないじゃないか。――例え、事件の謎をより複雑にしてしまうとしても。

「それが――」

有希が横目で橋谷を見る。橋谷も、まるで有希と同じことをしていた。気まずい空気が流れる。そして、

「――駄目でした」

と、有希が肩を落として言った。

「これが、全然ないんだよ。三年生って、もう授業に全然集中してない感じでさ。授業中なのに騒いじゃってるの。女の子が迷惑がつてたなあ」

「俺達が頭下げて聞いているのに、早く帰らせろって目でずっと見てきやがるしな」

「じゃ、証明は出来なかったってことか」

二人を責めるわけにもいかないが、どうにも肩透かしを喰らった気分になった。

「うん。扉が開く音なんて、意識してた人はゼロだったよ。三年生の授業態度なんて僕らには関係ないけど、ちよっとむかついちゃった」

それには同感だった。証言者がいることに、淡い期待を抱いたのだが。

「どうしたら、泉さんを助けられるかなあ……」

有希は、拗ねたように口を尖らせ、部室を歩き回る。それはさながら探偵の仕草のようではあったが、しばらくすると、

「駄目だ、全然分かんないやつ」

もうお手上げだ、というように両手を突き上げるのだった。

「ところで」

有希はくりりとこちらを向いて、首を傾げる。「翔斗くんの方は、何か見つけたの？」

「ああ、ま、ある程度はな」

「ふうん……」

どんな情報か話してほしい、という目を向けられたのだが、まだ推理が煮詰まっていな
い段階だ。下手に話すのも気が引けた。なので、

「また今度、ちゃんと説明するさ」

とだけ言っておく。

そんなやりとりをしていると、いつの間にやら望月が、こちらに好奇の眼差しを送って
いた。俺は慌ててこっちを向くなどジェスチャーする。

有希は、そんなことには気付かず、ぼうつと遠くに視線を向けていた。

「皆ばらばらになっちゃったけど、また戻ってくるといいよね」

「……そうだな」

俺も、それを願う。

部内の誰かが、いつか俺達の前から去っていくと分かっているながらも。

「井上先生、お話いいですか？」

「うん？ 何だ、矢井田」

六月十五日。遠野校長が殺されてから既に四日が経つ。

木本くんが一体誰なのかを自分自身の手で暴くため、俺は井上先生から、聞きだせる限りの情報を得ようと思い、二時間目が終わった休み時間、学年室に出向いて先生に話しかけたのだった。

「先生も木本剛志くんのこととはあんまり知りませんか？」

単刀直入な問いだったが、井上先生は俺の調査を全力で応援してくれているようで、

「まだ事件のこと調べてるんだなあ。よし、お前が頑張ってるんだから、俺も出来る限り協力するよ。そう……木本くんのこととは、俺もあんまり知らないんだ。他の先生と同じようにね。ところで、矢井田はどこまで知ってるんだ？」

「俺ですか。ええと、木本くんと淵江の間で起きていたいじめのことは、大体」

「何だ、それって殆ど全部じゃないか。他にどんなことが知りたいて言うんだ？」

木本くんが今、二年生として忍び込んでいる。だからそれが誰なのかを知りたい——などとはとても言えなかった。これは、校長先生が俺達だけに打ち明けた秘密だ。全てが分かるまでは、他の誰にも話すわけにはいかない。

「その——無理な頼みかもしれないんですけど、去年のクラス名簿なんかがあったら、そういうのを見せてほしいなって思ってるんです」

他のクラス、他の学年のものを生徒が見ることが出来るのだろうか。俺は井上先生に一縷の望みをかけていた。すると先生は、

「そうだな、名簿くらいなら大丈夫だと思うよ。それがどう役に立つのかは分からないけど。クラス替えの時掲示したものなら、個人情報はどうこうってこともないだろうし」

流石先生、話が分かる。俺は拝みたくなるような気持ちを抑えて、

「じゃあ、見せてもらえますか？」

「ああ、構わないよ。職員室に保管されてる筈だから、取りに行つてこよう」

「いいんですか？ 次の時間忙しかったりは……」

「いや、俺の授業は生物だから、国語や英語をやってる先生よりはましさ」

井上先生はそう言つて席を立ち、ウインクをして学年室を出て行った。爽やかな人だなあ。

二、三分ほど経ってから、先生は黄色と緑のクリアファイルを手にとって戻ってきた。

「あつたよ。こっちの黄色が今年と……それから緑が去年のだ。木本くんについて調べるなら、どっちも見たいんじゃないかと思つてね」

ご明察だ。井上先生は本当に気が利く。他の先生には悪いが、こういう先生が増えればいいのになあ、と毎度思つてしまう。

先生から二冊のファイルを受け取ると、俺は「ありがとうございます」と言つて、すぐにファイルを開いた。まずは黄色、今年のファイルから。一年生から三年生までのクラス名簿が順に挟んであるのでとても見やすかつた。

二年生の名簿。一組に望月、二組に春子、三組に佑也、四組に俺と有希、そして村越、そして五組には橋谷。これは当然のことだろうが、全員のことがちゃんと書かれてあつた。

次に三年生の名簿を見てみると、六組に木本剛志の名前があった。退学扱いではないため、一応残されているようだ。これも周囲を欺くための策の一つだったりするのかな。

では、二つ目のファイルだ。去年のクラス名簿。俺達が入学し、木本くんが学校を去った年の名簿。こちらには何か、事件を解決する為のヒントがあったりはしないだろうか……。

先に二年生の名簿から見定める。木本くと淵江は二年五組——つまり今の二年四組の教室だ。だからこそあの松の木に鞆が放られて、いじめが発覚するきっかけとなったのだ。そして、一番気になるのが、一年生の名簿。この名簿の中に、誰かの名前が無かったなら。それは即ち、その人物が木本くんであるという証拠になる。今の二年生が去年の一年生であることは、当たり前のことなのだから。——留年でもない限り。

さあ、どんな結果が待っているのか。俺は、一枚一枚に書かれてある文章を注意深く見ていった。一組から、五組まで。一人として見落とさないよう、慎重に。

——駄目だ。

その名簿には、少しもおかしなところは無かった。ちゃんと全員の名前があった。七月に転校してきた橋谷以外の、全員の名前が。

「こんなところの改ざんまで……？」

思わずそう呟いてしまう。校長は、相当入念に記録の書き換えを行ったらしい。でなければ、木本くんが木本くんとして学校に来ていた四月時点に、今現在木本くんが潜んでいる俺達演劇部員全員の名前がある筈がないのだから。

せめてここに橋谷の名前があったりしたら、書類を改ざんしたことくらいは分かるのだが。そう上手く事が運ぶわけではないか。

なるべく落胆の色を見せないよう努めながら、俺は井上先生にファイルを返して、「どうも、ありがとうございます」

と、もう一度礼を言った。

「何か分かったかい？」

「ええ、まあ」

分かったことと言えば、遠野校長が意志の強い人間であったことくらいだ。当人が殺されてしまった今では、その心情はもう想像するしかないが、恐らく校長は、職を失う覚悟をしてまで、木本くんを守ろうとしていたのだろう。

「じゃあ、俺はそろそろ教室に戻ります。何かあったらまた、頼んでみていいですか？」俺がそう言うと、先生は快く了承してくれた。

*

昼休みには演劇部で昼食を取り、演劇の準備を進める。表面上は冷静を取り繕っていたが、影で互いの顔色を窺っているような雰囲気、この部室には漂っているように思えた。風邪で学校に来られない春子と、怯えからか演劇部になくなった佑也の代打として、有希と村越が衣装を製作することになった。料理の腕にはある程度の自信がある二人も、裁縫となると話は別のようで、針の穴に糸を通すだけでもかなりてこずっていた。しかし、こうして見ると、村越も随分女の子らしい。

「袖にこんな装飾いるの？ 望月さん」

「高級感を出したいから、袖のところはそのラインストーンをびっしり付けちゃって」
「うう」

服の細かい指示も、道具の指示も全て望月が出していた。俺達はそれに従って、一つ一つの作業を行っていた。

「……あのさ、皆に聞いておきたいことがあるんだけど」

ダンボールにペンキを塗りながら、俺はそれとなく切り出した。

「淵江の事件の時と、校長先生の事件の時、どこで何をしてたかを、簡単にさ」

「え？ 何でよ」

村越が露骨に嫌そうな顔をしたので、俺は慌てて、

「他意は無いよ。聞いてみたかっただけ。皆の動きから、犯人の動きも分かってくるかもしれないし」

「ふうん……」

見え見えの嘘だ。この中に犯人がいることは、暗黙の了解のようになっていたのだし。

しかし村越は、やや不満気ながらも「まあいいか」と言ってくれた。他のメンバーも、村越が構わないなら、といった感じで、軽く頷いた。

「じゃあ、一人ずつ言ってくことにしよう」

ペットボトルの底を切り抜いた、手製のペンキ容器にハケを突っ込んで、俺は一つ息を吐いた。

「言い出した以上、まずは俺から話すよ。まず、淵江の事件が起きたときは、皆も知っているとと思うけど、俺は有希、村越、佑也と一緒に三階の体育館でバレーボールをした。授業終了のチャイムが鳴った頃に教室に戻って、有希と村越が持ってきた鍵を使って、教室へ。そこで着替えてからすぐに佑也と食堂に向かい、その途中で悲鳴を聞いた……と」

自分でもその時のことを再確認しつつ、俺は簡潔に述べていく。

「校長先生の時は、死亡推定時刻が五・六時間目辺りだったから、その辺りのアリバイだな。五時間目は日本史の授業で、六時間目が選択授業だったけど、六時間目は移動でどこやごちゃしてたから、多分後半組のアリバイはないようなもんだろ。橋谷も佑也も、俺と一緒に移動しなかったし」

選択授業はそれぞれ教室が違う。俺と佑也、そして橋谷は地学。村越と有希は生物だ。

望月と春子は前半組なので、その時間は選択授業ではない。

四人の中で最初にアリバイを語ってくれたのは有希だった。

「僕は、最初の事件の時は体育を見学してて、チャイムが鳴る前に着替えに戻ったんだよね。それで鍵を取りに行く途中、村越さんに会って、一緒に学年室へ向かったんだ。で、第二の事件の時は、残念なことに村越さんと一緒に生物教室には行っていない、アリバイはまるでなしと。こんなところかな」

やや早口でそう捲くし立て、有希は「以上」と締めくくった。

次に口を開いたのは村越で、

「私も有希ちゃんとまるで同じよ、代わり映えしなくて悪いけど。ちなみに言うておくと、私以外の友達と二、三分喋ってて有希ちゃんと行けなかったわけだけど、有希ちゃんは私より先に生物教室に着いてたわ。ま、当たり前か」

休み時間は十分あるので、そのことが格別有希や村越のアリバイを証明するわけではな

かったが、頭には留めておこう。

二人がそれぞれ話し終わると、次は橋谷が。

「俺は、淵江の事件の時は教室で授業してたからアリバイがあるぜ。――ま、授業には遅刻したけど」

「どうしてだ？」

「一組の奴と話してたら長くなつてさ。チャイムが鳴ったから慌てて帰ろうとしたんだけどよ、バイト先から電話が掛かってきたんだ」

「電話ねえ。――で？」

「そりゃ、携帯電話は校内持ち込み禁止の昨今なわけだから、まあ勿論そんなの守ってる奴は殆どいないけど、とにかくトイレに駆け込んだんだよ。そこなら電話しててもバレないからな」

そういうものなんだろう。トイレってタイル張りだから、案外声が響きそうなものだけだ。

「ほら、翔斗。女子ってよく、突然トイレに立つだろ？ あれって大体、電話が掛かってきたせいなんだよ。だからトイレに行つて電話に出るんだ」

「へえ……そうだったのか、あれ」

俺はてつきり、サボりたくなつてトイレを口実に出て行つてるのかと思つていた。

「ま、理由は分かつたよ。だけどとりあえず、携帯の履歴とかでも見せてくれないか？」

「ちつ、疑り深えなあ」

橋谷はそう言つて、やれやれと首を振つた。俺としても、携帯というプライベートなものを覗くのは気が引けるが、今ばかりは仕方がない。

携帯をポケットから取り出して、いくつかの操作の後、橋谷は俺に画面を見せてくれた。画面には、五月二十六日付近の着信履歴が。――確かに、その日の午前十一時四十一分に、『バイト』と名前の付けられた所から電話が来ており、橋谷はそれを取つていた。通話時間は三十九秒。……一つ腹が立ったのは、画面に表示されている『バイト』以外の着信が、全部『光代』になつていたことだった。

「羨ましい奴だな、お前は」

「つて、おい。これが確認できりやもういいだろ。あんま見るな」

俺が半ば呆れたような目で見ていたからか、橋谷は柄にも無く照れながら、すぐさま携帯をポケットにしまった。

「第一の事件でのアリバイは、まあ一応了解した。けど、不真面目なのが祟って完璧なアリバイって感じじゃなくなつてるな」

「うるせえ」

橋谷はもう一度舌打ちをした。

「んで、だ。校長先生の時は……そうだな。淵江の時と比べると、時間帯が広いから、具体的なアリバイは無いか。選択授業も俺ら、バラバラに向かつたし、全然アリバイは無いわけだ」

「ま、そういうことになるよな、やつぱり。分かつた、ありがとう」

最後に口を開いたのは、望月だった。昨日とは打って変わって、今日はすっかりいつもの調子を取り戻している。

「ウチも最初の事件の時は、橋谷くんと同じよ。古典の授業でずっと教室にいたわ。もつと言うと、橋谷くんよりは真面目なのでチャイムが鳴った時からいました。ふふ。次の事件の時は……五時間目の後の休み時間に、三組の佑也くんの所へ、衣装の説明なんかをしにいったかな。佑也くん、良心から手を挙げてくれたけど、コーディネート知識は全然なかったから」

「はは、そりやそうだ」

「うん。それで、佑也くんは結構真剣に話を聞いてくれて、地学の教室へ移動したのは五分くらい過ぎた時だったと思うわ。もうこんな時間だって慌ててたから、悪いことしちゃったかな」

現時点で、第一の事件でアリバイがはっきりしているのは、望月だけ。第二の事件では、誰一人完全なアリバイはない、ということか。しかし、話を聞く限りでは、望月と佑也はすぐにシロと断定できそう。証言の信憑性が問題だが、学校という場所柄、証言を裏づけできる目撃者は多い筈だから、そういう場所にいた時のことについて語っているものは、全て事実だと言っても構わないだろう。

「これで何か分かるの？ 翔斗くん」

有希が聞いてくるので、俺は、

「いや。流石にこれだけじゃな。後になって参考になることもあるだろうけど。今のところは何とも言えない」

と、当たり障りのないことを言っておいた。

「皆、ありがとう。まあこれは、春子の疑いを晴らす証拠を掴むためのものだと思ってくれ。代わりに誰かを犯人に仕立て上げようなんて、考えてないからさ」

「う、うん」

不安げながらも、望月も、他のメンバーも、俺の言葉に頷いてくれた。……本当に、ありがたい。出来るだけ、いがみ合いたくはない。

この質問の後は、昼休みが終わるまでずっと、俺達は黙々と、気の乗らない作業に没頭するのだった。

*

五時間目が終わると、俺は有希が話しかけてくるのに「ごめん」とだけ返し、教室を抜け出た。アリバイの裏付けとして、まず橋谷の友人を当たろうと思っていた。

しかし、橋谷はあれで、心底村越の事を好いてるんだな。自分の過去について、彼女にだけは話したり、電話の着信履歴は彼女だらけだったり。いや、全く羨ましい。

俺もそういう人がいればな。出来るとしたら、誰だろうか？ ……春子？ いやいや、

彼女にはもつと似合いの奴がいるさ。

そういったことを今考えるのは止めにして、俺は廊下を歩いていき、一組の教室前までやってきた。このクラス、どうしてか休み時間中に生徒が沢山集まって、大変な騒ぎになっている。ここの生徒達は、友人が多い奴ばかりなのだろうか。

橋谷の友達とは、俺も何度か言葉を交わしたことがある。なので聞かなくとも一目で分かった。茶髪だったりピアスをしていたり、用が無いなら正直近づきたくない奴らだ。俺

はその姿を認めると、窓際に集まって三人くらいで仲良く駄弁っている彼らの所へ向かい、声を掛けた。

「おう、何だ、矢井田か」

常日頃橋谷を見慣れている俺からしても、見るからに不良っぽい彼らは少し苦手なのだけれど、そうも言ってもらえない。俺は極力平静を保とうと努力しつつ、

「悪いな、ちょっと聞きたい事があるんだよ」

「あん？ 俺達に？」

普段から彼らはこんな喋り方なのだろうが、どうしても威圧的に感じてしまう。

「あ、ああ。橋谷のことなだけども。あいつ、淵江の事件があった日って、四時間目の授業が始まるまでここにいたんだよね？」

「それが聞きたいのか？ よく分かんねえけど、あいつは——そうだな、チャイムが鳴ってから、やべえ、とか言いながら帰っていったような気がする」

橋谷の話とも一致するようだ。ここまでは嘘をついていない、ということだな。

「なるほど、ありがとう。じゃあ俺はこれで」

休み時間は十分しかないので、手っ取り早く終わらせたい。何が何だか分からないと言った様子で、首を傾げたり肩をすくめたりする彼らにそれだけ言って、俺はそそくさと一組を退散した。

次に向かったのは五組、橋谷のクラスだ。橋谷自身もクラスにいるだろうが、それはそれで構わない。俺は五組にいる橋谷の友人についてはよく知らないで、むしろ都合か。

五組の教室に入ると、橋谷が友人らしき男子と二人で話しているようだった。この友人もまたワックスを髪を決めた悪そうな——あくまで俺のイメージとして——生徒だった。

「橋谷、ちょっと」

気が引けるので、俺は橋谷に声を掛けてから、

「さっきの確認したいんだけどさ」

「さっきの？ ……あー、まだ疑ってるのかよ」

「むしろ疑いを晴らしたいと思ってるんだよ」

言い訳染みた言葉を述べると、俺はそこでようやく、

「橋谷の友達だよな？」

君、と言えはいいかお前、と言っていないのか分からず、主語が抜けた奇妙な質問を、俺は橋谷の隣にいる男子にした。

「ああ、そうだけど」

「聞きたいことがあるんだよ。淵江が殺された日、こいつ、授業に遅れたよね？」

と、俺は橋谷を指差す。

「んー、いつだっけ。五月の……ああ、あの水曜日ね。そう言えば確かに、こいつ授業に遅れてたな」

「おい、二人してこいつ呼ばわりすんなよ」

眉間にしわを寄せて腕組みをし、橋谷は唸るように言った。俺は「悪い、悪い」と謝っておいて、

「何分くらい遅れたか分かるか？」

問われた男子生徒は、しばらく目を泳がせてから、搾り出すような声で、

「多分……三分か、四分……くらいかなあ」

「それくらいか。ふむ」

その三、四分の間にバイト先から電話が掛かってきて、トイレで話し込んでたということだな。通話時間は四十秒くらいだったから、アリバイは成立するか？　かなりシビアなところだ。

「どうもありがとう。じゃあ橋谷、また演劇部でな」

「さっさと帰れ、ったく」

橋谷の機嫌を損ねてしまったようだが、罪悪感を感じている余裕はない。まあ、あいつならすぐいつもの調子に戻るだろう。それより今は、アリバイ調査が順調に進んでいることに、満足感を感じていた。

俺が四組に戻ると同時に、六時間目開始のチャイムが鳴った。

*

井上先生が挨拶をして、生徒達はぞろぞろと教室を出て行く。俺と有希、村越もその波に加わるが、俺だけは、二人とは違う所へ向かおうとしていた。

「悪い、先に演劇部に行つてくれ。俺もすぐに行くからさ」

「まだどこか行つちやうの？」

有希が、目に掛かる髪を梳きながら聞いてくる。

「ここ最近、佑也が来ないからな。俺達とも会いたがらないみたいだし。それで、あいつのアリバイについてはまだ分かってないから、調べに行こうと思つて」

「ああ……そうだね。僕、あれから一度、会いに行つてみたんだけど。話はしてくれても、何だか警戒されてる感じがしてねえ」

「こう嫌なことが続けば、分からなくてもないけどな。それでも、一応の信頼すら置いてくれないのは、確かにちょっと傷つくぜ」

「うん……」

気持ちとは分かる。メンバーの誰かが淵江と校長を殺した犯人なのだという恐怖。そして、そのせいでメンバー一人一人を疑ってしまう自分の心への恐怖もあるかもしれない。あいつにとつて、それはとても耐えることの出来ない重圧なのだろうな。しかし、せめて避けるような真似だけはしないでほしいものだ。

「じゃあ、行ってくるよ」

「ええ。それで、どこに行くの？」

「保健室だよ。あいつ、あの日突き指したからな」

村越の問いに、俺は身を翻しながら答え、階段を下りはじめた。

光耀高校の保健室は、一階のエレベーター前に位置している。怪我をした際に、エレベーターを使いすぐにやって来て治療が受けられるように、ということだろう。佑也は手の指を突いたのだし、あの日はこのエレベーターを使いはしなかっただろうな。

保健室の扉には、在室中という看板が掛かっていた。たまに先生がいない時は、この看板が裏返されており、退室中になる。ともかく、今は先生がいるようなので、俺は二、三度ノックをして、扉を押し開けた。

「失礼します」

利用する頻度はそう多く無いが、ここへ来ると妙に落ち着くものだ。汚れ一つ無い薄緑色の壁紙、レールから下りる白いカーテン。ここだけは、学校という場所に張り詰めている緊張から解放してくれる感じがする。

「どうしたの？ 怪我？」

保健室には若い女性の先生がいるものと思われているが、その常識に違わず、この高校も保健室の先生は、容姿端麗な女の人だった。

「いえ、怪我じゃないんですけど」

「熱っぽいの？ もう放課後だし、早く帰ったほうがいいですよ」

「いや、あの。そういうわけじゃないんです」

机に向かいながら、何やら記録をつけていた先生は、そこでようやく回転椅子を回して、こちらに体を向けた。

「うん？」

「えっと——そう、少し話をしたくて」

こういう時に、俺は言葉の選び方が下手だな、と常々思ってしまう。誤解を与えてしまいそうな発言だったが、先生は特に気にせず、「そう？」と言って、再び机に向き直った。病院にあるような、黒い革のソファが壁際にあるので、俺はそこに座る。さて、目的の場所にやってきたものの、どう話を切り出せばいいのかと迷っていると、

「それで、どんな話をしに来たんですか？」

先生が、僅かに顔をこちらへ向けて、聞いてきた。どうやら、こういうことには慣れっこらしい。そう言えば、女子ってよく保健室の先生と話をする為にここへ来ることもあるんだっけ。気軽に話せる人生の先輩、という認識なのかな。

「ここで起きた事件のことで、ちよつと。先生は、淵江っていう生徒が殺されたあの事件が起きた時のこと、覚えてますか？」

想定外の質問だったのだろう、先生はしばらくの間口を閉ざしていたが、やがて、

「ええ。覚えてますよ」

とだけ言った。

「それについて、先生に聞いておきたいことがあって、ここへ来たんです」

「そう……」

悲しみを孕んだような先生の声色に、話を続けることに些か抵抗を感じたが、聞かないわけにはいかない。事件を解決しようと決意したのだから。

出来るだけ何気ない風を装い、俺は先生に尋ねてみる。

「丁度あの事件が起きたと考えられてる十二時頃、ここに小林佑也って生徒が来ませんでしたか？」

「佑也くん？ ええ、来たわよ。バレーボールで突き指をしたあの子でしょう」

「はい。佑也がいつここへ来て、いつ出て行ったのかを調べてみようと思って」

「あら。それって、佑也くんが犯人かもしれないと疑っているってこと？」

またこちらに体を向けた先生は、口元に手を当てて、不思議そうにこちらを見つめてきた。

「いや。むしろ逆です。友人のことを調べて、全員の疑いを晴らしたくて、調べてるだけ

なんですよ」

またこんな言い訳を使ってしまう自分に、微かな苛立ちを覚えてしまう。全員の疑いが晴らせるなら、どれだけいいだろうか。そんなことは絶対に不可能だろうけど。

「君、矢井田翔斗くん？」

「え？ はい、そうですけど」

いきなり名前を呼ばれ、俺は動揺して素っ頓狂な声を上げてしまった。ここを利用したのはせいぜい二、三回だが、それだけで名前を覚えてくれているのかな。

「この保健室には、色んな悩みを話しに来る子達がいるんです」

先生は、椅子にもたれながら、ゆっくりとした口調で話す。

「試験や部活動のこと、時には恋愛相談や家庭の事情まで。カウンセリングは専門の先生や相談場所がある筈なんですけど、生徒達はここの方が利用しやすいみたい」

「それは、そうですね」

保健室に行くのと、カウンセリング室に行ったりカウンセラーに電話を掛けたりするのでは、心理的にかかる違う筈だ。言いづらい悩みがあったとき、気軽に立ち寄って愚痴のように話せる。それがここ、保健室であり、先生なのだろう。

「そんな生徒の中に、望月ゆみさんもいてね。いつも演劇部のことを、話していくんですよ」

「望月が……」

それで、この先生は俺の名前を知っていたのか。お喋り大好きな望月からすれば、保健室はまさに憩いの場所なのだろう。

「最近、良くないことが立て続けに起きているみたいですね。流石の望月さんも、相当ショックを受けてるみたいですよ」

「——そうですね」

自身の過去を吐露した彼女。友情の崩壊を恐れ、迷う彼女。昨日のような望月を見れば、俺にだってそれはよく分かった。

「あの子、あれで矢井田くんのことをとても信頼してるんですよ。部長でいてくれて頼もしいって。……ですから、頑張ってくださいね」

「ええと、……はあ。なんか、ありがとうございます」

あいつ、そんなこと言ってたのか。こうして他人を介して言われると、気恥ずかしいものがある。

先生は、回転椅子から立ち上がると、机の右隣にある書棚の戸を開ける。そこからクリアファイルを取り出して開き、数枚の紙を外すと、

「はい、これがその日の記録よ」

と、俺に差し出してくれた。

「ど、どうも」

俺は先生から記録用紙を受け取り、それに視線を落とした。佑也が保健室に向かったのは、十二時前後だ。俺は記されている時刻を注意深く見ながら、下へ下へと視線を動かしていく。一枚目には無かったので、二枚目に移つてもう一度。すると、丁度半分という所で、小林佑也、という名前が目に留まった。基本的に、記録用紙は生徒が自分で書くことになっているので、彼が書いた字は、やや角ばっていた。あいつは確か、右手の中指を痛

めたんだったか。

入室、十一時五十七分。退室、十二時十四分。これを見る限り、佑也に淵江を殺すことの出来る時間はないように思われた。

「先生、この時刻に間違いはないですか？」

自分で記録をつけるということは、書こうとすれば嘘だつて書ける。しかし先生は、「どれ？ ……ああ、この時間で間違いはないですよ。あの時は他に来る生徒もいなくて、よく覚えてますから」

「そう、ですか」

「それに、疑っているかどうかは分かりませんが、突き指も本当です。しっかり治療をしておきました」

そう言われては、これ以上佑也を疑うことは難しそうだった。体育館を出てからここで記録を付けるまで二分、ここを出てから体育館に戻るまで一分。更に突き指をしていながら淵江の首を絞めることができるのか、という問題点もある。彼の無実は濃厚か。

「佑也は、犯人じゃないみたいですね。先生、どうもありがとうございます」

用紙を先生に返して、俺は軽く頭を下げた。

「まだ分からないことだらけですけど、俺、頑張りますよ。頼られてるなら、やらないわけにはいかない」

「ええ。納得のいく結果になればいいですね」

先生の言うような結果というのは、どうあがいても無いとは思っただけ。

とにかく、一番救いのある結果になってくれればいい。俺はそう願わずにはいらなかった。

アリバイ調査の後、しかしながら事態は決して好転しなかった。容疑者は絞り込めてきたものの、そこから一步も進められず、新しい発見も無い。過ぎていくのは時間ばかりだ。昨日の夜、依然風邪が治らず学校を休み続けている春子に電話を掛けると、もう一度事情聴取をさせてほしいという旨の連絡が警察から来た、と打ち明けられた。警察が、春子に狙いを定め始めたことは明らかだった。

今日部屋に来ているメンバーも、台本をちまちまと書き続けている望月と、呆けている村越、落ち着かないのか室内をぐるぐると歩き回っている有希、漫画を読んでいる橋谷、そして俺の五人だった。佑也はまだ来ない。一人が欠けているだけではあつたけれど、それだけではない寂しさが、この部屋には感じられた。

「誰かが欠けてたら、何だかやる気がなくなってくるんだよね。泉さんも、小林くんも、早く戻ってくるっていいんだけど」

「そうだな。俺も気合入んねえや」

「お前は漫画読んてるだろ、橋谷」

「そうだけど。やつぱ、こう嫌なことが続けば何してても楽しく感じねえよ」

確かに、彼の目は漫画に向けられていたものの、その目はどこか虚ろで、読んでいる風には見えなかった。開いている漫画も、たまたま手の届く範囲にあつたから取っただけなのだろう。巻数も中途半端で、読みたいと思つて取ったわけではないことが見て取れた。

どうしようもない無気力感が、この部屋に蔓延っている。だから、皆疲れきった表情で、意味も無い行動を繰り返しているのだった。

「……皆で、春子のお見舞いにでも行こうか」

生気の抜けたような彼らの姿を見かねて、俺は一人で淡々と取り組んでいた大道具の切り貼りを止め、そう提案してみた。すると有希が、

「うん、それがいいよ。もしかしたら警察のこと聞いて、落ち込んでるかもしれない。行ってみよう」

急に立ち止まると、これまた急に意気込んでそう言った。

「ウチも行くわ。気分が乗らなくて台本が書けないから……」

「じゃあ、私も行く」

「おい、俺も行くからな。置いてくなよ」

一人が賛成すると、残りのメンバーも釣られるようにして賛成するのが演劇部員なのかもしれない。この前、美術室に行こうとしていた時もそうだったな。俺は嬉しいのか呆れたのか自分でも分からない笑みを浮かべた。

大勢で行くのは憚られたが、まあ、春子も多いほうが喜んでくれるんじゃないだろうか。勝手な想像で悪いけど。

そんなわけで、今日の活動は止めにして、俺達は春子の家へ向かうことにした。

*

「ありがとね、皆」

春子の母親に案内された部屋で、彼女は頬を赤らめながら言った。半分は熱のせいで、

もう半分は俺達への感謝の気持ちで、頬を染めているのだろう。

「こうやって来てくれて、嬉しいよ。……でも、小林くんは、いないんだね」

「まあ、あいつは仕方ないさ。そういう性格だから。事件が落ち着いたら、きっと戻ってくるよ」

「……うん」

彼女は、ぼんやりと天井を見つめる。額には汗が滲んでいた。精神的な負荷が掛かっているから、熱が中々下がらないのかもしれない。彼女にとっても、俺達にとっても、悪いことばかりがここ最近が続いていた。

「警察の人に連れてかれたり、風邪ひいちゃったり。心配かけて、ほんとごめんね」

顔を半分ほど布団で隠しながら、春子は申し訳なさに、俺達を見つめる。

「そんな顔しないでいいのよ」

望月が言い、髪に優しく撫でると、春子の目から一筋、涙が零れ落ちた。

「……ごめんね」

何故、彼女が泣かなくてはならないのだろう。苦しまなくてはならないのだろう。胸が、苦しくなる。

彼女を守りたい。そう、俺は彼女を守るために、事件を解決しようと決意したんだ。

「大丈夫だよ。僕らが何とかしてみせるから」

有希がそう言って、春子の手を握る。それで彼女は、少し安心できたようだった。その台詞を言いたかったのは、俺なのだけだ。

「ありがと、有希ちゃん」

「はやく元氣出してね。泉さんがいないと、演劇部も寂しいよ」

「……うん」

春子は僅かに微笑んで、瞳を閉じる。

「はやくこんな事件が終わって、演劇に取り組めればいいのにな」

「そうね。ウチもはやく台本書き上げちゃいたいわ。事件のことが気になって、今は全然筆が乗らないから」

橋谷と望月が言った。

「あ。台本は完成する前に全員で検閲するからな」

と俺。この言葉には全員が笑った。

「大丈夫。それは散々言われてるから、問題なしよ。だけど一つだけ上げるとすれば、性別が合わないかも」

「前も言ってたっけ。僕、登場人物の性別を変えればいいと思うんだけど」

「それじゃ駄目よ。恋愛や友情ありきの演劇なんだから。そういうわけで、ひよつとしたら違う性別の役が当たるかもしれないわね」

「そんなの嫌よ、私」

村越が露骨に不満げな表情をした。彼女が男の悪役をやることになったら、面白そうではあるのだが。まあ、彼女にしてみればたまったものじゃないな。

「許してよ、光代ちゃん。嫌な役に当たる可能性は、五分の二くらいだから」

「半分くらいあるじゃないの」

溜息交じりに言って、村越は望月のこめかみ辺りを人差し指で突いた。

「というか、当たる当たって、もしかして配役をくじびきか何かで決める気か？」

呆れ顔で橋谷が聞くと、望月の方は大真面目な顔をして、

「勿論。だってそうじゃなきゃ、皆文句言うじゃない」

と言うのだった。そりゃ、教室の席替えとかならそういう方法を取るけどさ。

それからしばらく、俺たちは演劇のことや授業のこと、最近のニュースや個人的な話なんかを以前までの部活のように語り合い、時間を過ごした。その時間だけは和やかで、安らかで、事件という暗い影が入り込めない神聖な時のようにも感じられた。

時計の針が五時を回り、そろそろ帰ろうかという時になって、春子がふいに、

「いいよね、演劇部。私たち、ずっとこのままだよ」

呟くように言った。窓から差し込む夕陽が、彼女の横顔を照らしていた。

ああ、そうだな。俺は、そう言いたかった。

そしてそれは、有希が代わりに言ってくれた。

「そうだよ。僕らは、ずっと一緒に過ごしていくんだ」

皆、頷く。

犯人は、この日々が壊れてしまうことを危惧しているに違いないけれど。

或いは本当に、誰もがそれを確信しているのかもしれないと、俺は思ったのだった。

*

春子から元気を貰ったのか、翌十七日の昼休みには、また全員が演劇に使う衣装や道具の製作作業に就いていた。少しずつしか進捗しないが、それでも一歩一歩、確実に前へ進んでいる。部室の端に置かれた張りぼても数を増し、随分演劇部らしい部室に変貌していた。

活力を与えてくれた春子自身は、今日も欠席していた。学校を休んでもう三日が経つので、そろそろ治るだろうが、早く戻ってきてほしくて焦れっとなる。

五、六時間目をうつらうつらしながら終わらせたら、また演劇部に戻る。三組をちらっと覗いてみたのだが、佑也はすぐに帰ってしまったようだった。春子は風邪なので文句は言えないが、佑也がこんな状態にならなければ、有希や村越も手を針で突いてしまわずに済むんだけどな。

村越の指に巻かれた絆創膏に目を向けながら、俺がそんな感じのことを言うと、望月が、「あ、そうそう。ウチ今日、佑也くんのお姉さんに会ったわよ」

思い出した、というように手をパチンと叩いた。「偶然保健室で会ったの。弟が迷惑かけてごめんってさ」

「へえ、俺はまだ一度も会ったことないや。こんな事件があつたもんだから、一時はいないんじゃないかって思ったこともあつただけど」

「それって、つまり佑也くんイコール木本くんだと考えたこともあるってこと？」

「そういうこと。我ながら滅茶苦茶な推理だよな。正体を隠した木本くんなら、すぐにバレるような嘘は吐かないに決まってるのに。姉が学校にいるって言いつつ本当はいなかったりしたら、その時点でお終いだ」

そう言っただけ、以前の自分が立てた仮説を笑い飛ばした。

「まあでも、実際に起きてることも滅茶苦茶だから、あながち酷い仮説ってわけでもない
とウチは思うけどね」

現実も無茶苦茶、か。全く、望月の言うとおりだ。木本剛志を別人に仕立て上げて、再び二年生として入学——というより、潜り込ませるだなんて。校長はどれだけの苦勞をして、どれだけの偶然に助けられて、今この状態を築き上げたのだろう。

考えてみると、校長は相当多くの策を講じたに違いない。まず、木本くんについての情報をばらしそうな先生を転任させ、若しくは担任から外し、そして木本くんのことをあまり知らない先生に二年生の担任をさせた。学年主任なんかは特に氣をつけたことだろう。一年生の時には見なかった名前が一つ増えている……もしそれに氣付かれたなら、一巻の終わりだ。

今こうして木本くんの存在を完全に隠し通せているというのは、全く以って奇跡のようなものだ。無論、あの日話を聞いてしまった俺達を除いては、だが。

俺達が警察に言い出さない限り、木本くんのこととは、話題にも上らないに違いない。校長は、その精神力と権力とで、凄まじいことをやってのけたのだ。

——ただ、淵江さえ退学に出来ていれば、こんなことにはならなかった筈ではないか。そんなことも思う。幸運と、それに見合う不幸。それが合わさったからこそ、このような悲劇が起こったんだろうな。

「——よし」

俺は取り留めもない考えを頭から追いやって、

「今日も見舞いに行ってくるかな。家も近いし。皆はどうする？」
と、昨日のように提案してみた。

「いや、また大人数だけで押しかけても悪いし、翔斗だけで行ってきたよ」

という言葉が村越から返ってきた。どちらかといえば、有希や望月は行きたそうな表情を浮かべていたのだが、彼女の一言で諦めたようだった。

「そ、そうだね。翔斗くん、泉さんの幼馴染だしさ」

若干有希の言葉に棘があつたように聞こえた。いや、俺と春子は幼馴染だけど、特別な関係というわけじゃないからな。そう言いたかつたのだが、望月の手前、それを言ってしまうと変な解釈をされかねないので止めておいた。

「じゃあ、悪いけど俺だけで行ってくるよ。作業も十分捗ってるし、大丈夫だよな」

「ああ。泉によろしくな、翔斗」

橋谷にそう言われる。俺は振り返りざま、彼に手を振って、演劇部を後にした。

*

春子の家の玄関チャイムを鳴らし、彼女の母親に迎え入れてもらう。そして昨日と同じように、俺は早速春子の部屋へ上がらせてもらった。

静かに扉を開けると、春子がベッドに横たわったまま、窓から外を眺めているのが見えた。窓ガラスは開け放たれて、風がシルクのカーテンを揺らしている。

「風邪ひくぞ、春子」

「あ、翔斗くん」

春子は俺に気付くと、ベッドから身を起こした。熱はもう引いているらしく、頬の色も健康的な肌色だった。

「なんてな。……風邪、治ったみたいでよかったよ。けど、窓は閉めたほうがいいぜ」

「う、うん。ありがと」

俺は揺れるカーテンを手で払いつつ、窓を開めた。その時横目に春子を見たが、どうしてか彼女は浮かない顔をしていた。

「どうしたんだよ、春子」

「え？ いや、何にもないけど」

嘘だ。何年も一緒にいるのだから、俺には分かる。いつも俺がつく嘘と同じくらい分かりやすい。

明らかに、何かに深く悩んでいるようだった。

「隠し事なんて柄でもない。話してくれないかな」

「えっと、……うん、そうだね」

春子は、少しだけ迷ってから、僅かに首を縦に動かした。

「……その」

「うん」

「小林くん、今日は来たかな？」

「え？ いや、今日も演劇部には来てなかったけど」

俺が言うと、途端に春子は顔を伏せて、

「やっぱり、そうなんだ」

そう呟いた。彼女の言わんとしていることは、佑也に関係していることなのだろうか。

春子は短く息を吐いて、それから決意したようにこちらを見つめ、口を開いた。

「校長先生がさ。事件が起きて殺される前に、うっかり口を滑らせちゃったんだよね。私達の中に、いじめられていた木本剛志くんがいるって」

「ああ。そうだったな」

「それから皆、誰が木本くんなんだろうって、嫌でも考えるようになってしまった。その後校長先生が、殺されてしまった」

「ああ」

「木本くんは、もう誰にも本当の自分を暴かれないようにと校長先生を殺したんだって思う。だけど、それって逆効果だったんじゃないかな。だって皆、校長先生が殺される前よりも、互いを疑いあつてから」

それはその通りだが、木本くんにとっては苦肉の策だったに違いない。遠野校長を殺し、彼が持っていた個人情報さえ奪えば、決定的な証拠はなくなるわけなのだから。仲間内での疑惑が膨らむのは耐え難いものだが、正体がばれてしまうよりはましだと、彼は考えたのだと思う。

校長室に忍び込んで、あの紙の有無を調べたことは誰にも言っていなかったもので、俺はそれについて簡単に説明をした。

「そうか、あの紙を処分するためってのもあったんだね。苦渋の選択だったんだ、木本くんにとっても」

力なく笑って、春子はもう一度溜め息を吐いた。

「私ね？ 誰も口にしなかったのに、私だけは、口にしちゃったんだよ。友達を信じられなくなっていくことが怖くなって、そんな疑いを晴らしたくなって、それで。あの子が、木本くんなんじゃないかって」

「それって、つまり……」

「そう。私、警察に連れて行かれた夜、電話でね。大した証拠もないのに、木本くんは小林くんなんじゃないのって、聞いちゃったんだ」

なるほど。それで佑也は、演劇部に来なくなってしまったのか。春子と同じような疑念を、他のメンバーも持っているのではないかと思い、顔を合わせづらくなってしまったわけだ。見る限り風邪は完治している春子が今日学校に来なかったのも、その一件があつてのことなのかもしれない。

「どうして、そう思ったんだ？」

「それが、根拠は多くないの。ただ、小林くんなら、木本剛志くんの特徴に当てはまるから。男の子で、引っ込み思案。それに小林くん、第一の事件の時も、第二の事件の時もアリバイがないから……」

なるほど、彼女も佑也Ⅱ木本説を推理していたらしい。確かに佑也はいくつかの点で木本くんと似通っている。引っ込み思案なところ、勉強の出来るところ……そして何より性別が男だ。

しかし、俺はその仮説が成り立たないことを知っている。俺は一昨日、佑也が第一の事件時、しっかりしたアリバイがあるのを確認したし、望月は今日、学校で佑也の姉に会ったという。だとすれば佑也は淵江を殺した犯人ではないということになるし、木本剛志くんでもないということになる。

俺がその二点について話すと、春子は口元まで布団を引っ張り上げて、と、春子は、

「ああ、やつぱりそうなんだよね。小林くんが木本くんなわけ、ないよね。……私、それならいいのにつて、小林くんが木本くんじゃなきゃいいのにつて思いながら、小林くんに聞いたんだけどさ。小林くんからしてみれば、私の言葉はまるで、自分が疑われてるみたいに聞こえちゃうよね……」

「春子……」

疑惑を打ち消すために聞いたつもりが、佑也を傷つけてしまう結果となってしまうたことに、春子は相当のショックを受けているのだ。だから彼女は今、こんなにも弱々しい姿を見せて……。

何と言葉を掛ければいいのか、俺にはまるで分からなかった。けれども、彼女の苦痛を和らげる為に、俺は静かに囁きかける。

「謝らないとな、佑也に。でも、大丈夫だ。きっと許してもらえさ」

「許して、もらえるのかな」

「勿論。だって俺達は、演劇部なんだから」

「……そう、だね。私達は、ずっと一緒に、演劇部なんだよね」

「ああ、そうだ」

悲しい別離が待ち受けている。その確信めいた予感が、俺の心を支配していたが、それは言うまい。信じるべきだ、演劇部の部長として。きっと大丈夫。別れなど、来るわけがないのだと。

「大丈夫、俺達は——」

その時。

俺の携帯の着信音が、部屋に響き渡った。あまりにタイミングが悪い。一体誰からの電話だろう？

驚かせて悪い、と春子に謝ってから、俺は通話のボタンを押した。

「もしもし？」

「ああ、俺だ。お前、まだ泉の家にいるのか？」

橋谷だった。早口で、何やら慌てている様子だ。何か悪いことでも起きたのだろうか。

「そうだよ。まだ二人でいる」

「分かった。じゃあ、泉にも伝えてほしいんだ。事件のことで、変なことが起きたんだよ」「変なこと？」

「そう。だけど別に誰かが殺されたってわけじゃない。むしろ、その逆なんだ」

「逆ってどういうことだよ？」

混乱しているからか、言い回しが婉曲で、核心についてまるで分からない。

「誰からなの？」

苛立ちを表情に出してしまっていたようで、春子が心配そうな顔でこちらを見つめていた。俺は一旦携帯を耳から離して、

「橋谷だ。何かあったらしい」

「何かって——」

春子が言おうとするのを、手で制してから、俺はもう一度携帯を耳に近づけた。

「おい、言ってもいいのか」

「ああ。何が起きたんだ？」

「それがよ。演劇部屋に、いつのまにか一枚の紙切れが滑り込ませてあったんだ。見つけないくい場所にあったから、お前がいた時には気付かなかったけどさ。けど、それがこの部屋に置かれたのは、昨日以降のことだったのが分かってる。それで、その紙には、こう書かれてあったんだよ」

橋谷は、そこで少し間を開けて、搾り出すように、その紙に書かれているのであろう文面を、はつきりと読み上げた。

俺は、その内容に愕然とした。

「え……？」

橋谷の声が、頭の中で木霊する。

「……ああ……そうか、分かった」

「ねえ、翔斗くん、どうしたの？」

半ば放心状態となってしまうていた俺は、春子の言葉に我に返った。既に切れている電話の電源ボタンを押し、気持ちを落ち着かせてから、俺は春子に向き直る。

「春子。橋谷によると、事件に関係するものが出てきたらしい。それを春子にも伝えてほしいと言ってた。よく、聞いてくれ」

「……うん」

これは、本当に、犯行の終結宣言なのだろうか。どうして、そんなものがあつたのだろう。

「演劇部の部室に、パソコンで打たれた文章で、木本剛志と署名された紙が見つかったらしい。その文面は、こうだったらいいんだ」

もう殺人は起きない

もう誰も殺されはしない

*

春子の家を辞去して、俺はすぐに学校へと舞い戻った。そこには佑也以外の全員が揃っており、俺が帰ってくるのを静かに待っていたようだった。

「翔斗くん！」

扉を乱暴に開くと、まず有希の声が聞こえた。それから橋谷が駆け寄ってくる。

「翔斗、これだよ、これ！ この紙が部室に忍び込まれてあったんだ！」

俺は橋谷に手渡された、藁半紙を文章の部分だけ残して破った宣言文に目を通す。

「もう殺人は起きない、もう誰も殺されはしない……木本剛志。つまり、木本くんから直々に、殺人が終わったっていう表明がされたわけか」

「ああ、そういうことらしい」

非常に簡素な素材、文言だったが、それがむしろ真実味を感じさせる。これは、本当に木本くんからの宣言文なのかもしれない。

「これは、どこに？」

「奥に道具を置いてるだろ？ あそこの張りぼての裏に、折りたたまれて挟まってたんだよ。だから、誰も全然気付かなかったんだ。翔斗だって道具の作業をしたのに、まるで見つけられなかっただろ？」

確かに、俺は道具が置かれている場所の近くで作業をしていた。だが、増えてきた道具のせいで、空きスペースがかなり減っている。その分視界が狭まっていたから、見つけられなかったのだろう。

「私が完成度の確認をしようとして、その紙に気付いたのよ。確認しなかったら、今日見つかることは無かったでしょうね」

「なるほど。ということは、紙を挟んだ犯人は、紙を見つけて欲しかったけど、そのタイミングが出来るだけ遅くなることを望んでいた、とみていいな」

望月が頷く。

「それに、よく見てくれよ。これ、校長先生が持ってた紙と、文体がまるで同じだと思わないか？」

「そういえば……」

明朝体で、大きさも同じくらい。警察官が校長の手から回収し、現場にいた全員に見せてきたあの紙によく似ている。そして、紙は——表を向けると、保健だよりのタイトルが見えた。日付は、昨日だった。

「なるほど。これを出したのは、校長先生に呼び出し状を送った奴と同じ、という可能性が高いわけだ。そして、昨日以降に置かれたものに違いもないってのも。橋谷、中々頭が切

れるな」

「こんな時に馬鹿にしないでくれよ」

だが、橋谷の推測したとおりだ。これはすなわち、木本剛志が犯人だということではないか。しかし、一体何のために？ わざわざ宣言文を書く意味が分からない。

「……待てよ」

犯行を終わらせると書いたこの紙が置かれることで、果たしてどんな意味があるのか考えてみる。置かれたのは放課後。俺が春子の家へ向かった後のことだ。

それを考えてみると、つまり――。

「なあ、佑也は来たか？」

「いや、今日もあいつは来てない。そろそろ俺達のこと、信用してくれねえもんな。もう俺達の方は、あいつのこと疑ってねえってのにさ」

その言葉が真実かどうかは分からないが、帰ってきてほしいということには同意だ。

「ということは、佑也にこの紙を挟む機会はない」

「ない、と決め付けられはしないだろ。正規の鍵なら合鍵と違って、職員室の入り口付近にあるんだ。室内に誰か先生がいたとしても、姿を見られずに鍵を取ることは出来る」

何だ、案外懐疑的に考えているじゃないか。

「じゃあ佑也も入れて五人だな。この紙を挟むことが出来るのは、俺と春子を抜いた五人」

「そうなるわね」

これで、大体のことが分かった。五人の内の誰が犯人なのかは別として、犯人の意図は明確だ。

この紙を置くことで、犯人が嫌疑を外したかった人物が、一人いる。

それが、春子。

「春子は、警察に連れて行かれた次の登校日から、学校に来ていなかった。そして、小学校とかなら、生徒が休んだ日に、家が近い子にプリントを渡してもらうっていうことはある。けどここは高校だから、そんなことはない。休んだ生徒の分のプリントは、机に突っ込まれるんだよな。なら、昨日の日付のプリントに、犯人がこの文章を書いたわけは何だ？ 答えは、一つしかない」

「それって……」

村越が、はっと息を呑む。どうやら彼女も気付いたようだ。

「そうだ。犯人は春子からどうしても疑いを逸らしたかったんだ。何故かって？ そんなの、決まってる。犯人だって、演劇部のメンバーだからさ。あの日、春子を守ろうと誓った、俺達の仲間だからさ……」

それが、この宣言文の意図だ。泉を疑わせなかった。ただそれだけの為に、犯人はこれを部屋に置いたのだ。自分への疑いが向くかもしれないのを、恐れずに。

「犯人だって、殺したくて殺したわけじゃないんだ、きっと。……そう、追い詰められた時、犯人は最後の手段に出るしかなかったんだよ。けど、どうしても他の仲間に迷惑は掛けたくないかった。犯人は――多分木本くんは、俺達のことを大切に思っていた……」

事件は、加速度を増して終局に近づいていた。もうこれで、新たな犠牲者が出ることは恐らくない。だが、これで終わったわけではなかった。俺には、それを終わらせる必要があると、そう思った。

全ての根源を、暴かなくてはならない。誰が殺人事件の犯人なのか、そして、誰が木本剛志なのか。それを暴いたそのときにこそ、この事件は幕を下ろすのだ。

きっと、木本くんも今は、それを望んでいるのではないだろうか。俺は、そう思えてならないのだ。自分のせいで、他の誰かが、特に春子が疑われることをこれほど嫌がる彼は、もう全てを終わらせたいと、心の中で訴え続けているのではないだろうか……。

「俺はこの事件を終わらせる。絶対に」

痛々しいまでに黙り込んだメンバーの前で、俺は静かに、けれども力強く、そう宣言したのだった。犯人と同じように。

木本剛志の署名がある犯行の終結文が発見された夜。風呂から上がって部屋でくつろいでいる時に、春子から電話が掛かってきた。通話のボタンを押して携帯を耳に当てると、まず安心したかのような吐息が聞こえて、それから春子の声がした。

「もしもし、翔斗くん？」

「ああ。どうしたんだ、春子」

春子は「うん」と言ってから、

「もう熱も引いたし、明日は学校に行けるから。翔斗くんに言われたとおり、小林くんちゃんと謝ろうと思う」

「そっか。うん、それがいいよ」

俺は、顔が見えないのを分かっているが、春子の言葉に微笑んだ。

「酷いこと言っちゃったけど、許してもらえるかな。それが心配だけど、それでも謝らなきゃだよ。私、頑張るよ。これ以上、皆がばらばらになっちゃうのは嫌だから。許してもらえよう、頑張る」

「ああ、その意気だ」

俺が言うと、春子はふふ、と笑った。

「ありがとね、翔斗くん。元気付けてくれて。翔斗くんが来なかったら私、ずっとそのことで悩んでたと思う」

「いや、春子だったらくよくよしてない筈さ。俺がいなくなつて、すぐに佑也に謝りに行つたよ」

「もう、買いかぶり過ぎだよ、翔斗くん」

春子は否定するが、俺は彼女の強さを良く知っている。長年一緒にいるのだから。彼女は、仲間の為に身を投げ出せる自己犠牲の精神と、決して挫けない芯の強さを兼ね備えているのだ。

「そうだ。そういえばさ」

「何だ？」

ベッドに腰を下ろしたのだろう、電話越しにスプリングが軋む音がして、
「演劇部の部屋に、犯行が終わったっていう文章があったんでしょ？ あれ、どうなったのかな」

「ああ、あれは今のところ、警察には届けずに演劇部で保管してる。木本くんを警察に売るみたいで、出す気になれないんだよ、皆」

「そっか……。あのね、実は私、その文章に聞き覚えというか、見覚えがあつて。もしかしたらって部屋の本棚にある本を見てたら、同じ文面が載ってる小説があつたの」

「え？ それ、本当か？」

「うん。ええとね、翔斗くんにも貸した覚えがあるような気がするんだけど、『月光ゲーム』っていう推理小説。——翔斗くんは覚えてる？」

月光ゲーム。何となく覚えがある。俺が初めて読んだ推理小説が、それだったような。

「なるほど、犯人は要するに、推理小説が好きってことらしい」

「そうなのかもしれないね……」

確かあの小説には、月の満ちた夜には破壊衝動が高まるという学説についての話なんか

が出ていたつけ。――月の夜の狂気か。犯人の殺人衝動もまた、月によってもたらされたのだろうか。そんなことを考えてもみた。

犯人。淵江大吾と、遠野校長を殺した、罪人。

それは、俺達の、演劇部の中の誰か……か。

「ねえ、翔斗くん」

「何だ、春子」

春子は少し躊躇いがちに、

「翔斗くんは、怖くない？」

「何がさ」

「だって、犯人を捜すってことは、私と同じことをするってことなんだよ？ いや、それよりもっと直接、君が犯人だって言うことになるだろうから……。自分が心を痛めるだけじゃなくて、皆だってそれで、傷つくことになっちゃうかもしれない。ううん、きっと傷つく。それでも翔斗くんは、犯人探しを続ける勇気を、持てるの？」

自分と同じ痛みを、他の誰にも感じてほしくない。そんな切実な思いが、春子の言葉には込められていた。

――それでも。

「俺さ。どこにも確証はないんだけど、思うんだよ。本当のところ、犯人は自分がやったことの全てに気付いてほしいんじゃないかって。だから、あんな文章を残したりしたんじゃないかな。犯人は自分だ、木本剛志だ。だから他の誰かを疑う前に、気付いてくれって」

「そう、なのかな……」

俺達には知る由もない。ただ、犯人の心情を、現実にある手がかりから想像するだけだ。だけど、少なくとも俺はそう考えている。仲間を、春子を守りたいがために、犯人は葛藤しているのだということ。

「辛いけど。それに応えるために、俺は知りたいんだ。誰が二人を殺した犯人なのかを。誰が、木本くんのかを」

「……強いね、翔斗くんは」

弱々しい声で、春子はそう言った。望月が言ってくれた言葉を、望月が言ったのと同じ調子で。

――いいや、そんなことはない。

決して、そんなことはないんだ。

「それじゃあ、もう遅いから今日は寝るね。話してくれてありがと。お互い、頑張ろうね」

「ああ。それじゃ、また明日」

「うん。また明日」

プツン、という音がして、通話が切れる。

「……お前こそ、十分強いんだよ。春子」

携帯を畳みながら、俺はそう呟き、笑った。さて。

ここで今一度、事件についての推理を纏めてみよう。一つ一つの事件や謎については、自分の中で既に答えが出ていたり、合理的だと思える仮説を立ててみたりしている。事件が佳境に入った今、それらを一つに結び合わせて、具体的に誰が、どうやって犯行を成し

遂げたのかを、慎重に吟味していくべきだ。

俺はベッドに四肢を投げ出して、全身の力を抜き、目を閉じる。何かを思案する時は、こうするのが一番良かった。逆に、何も考えたくない時も、よくこういう風にだらんとしているのだが。

まず初めに、今日発見された木本くんからとされる犯行の終結宣言文について推理してみよう。これについては、俺は三つの可能性があると考えている。その内二つは排除できそうな非合理的な仮説で、残る一つが最も有り得そうな仮説だった。

それら三つを順に挙げてみると、こうなる。

その一、木本くん本人が宣言文の書き主。

その二、木本くんに疑いを向けた誰かが、それを狙って書いた。

その三、木本くんから疑いを逸らしたい誰かが、わざと木本くんの名前で宣言文を書いた。

排除できそうな仮説は勿論、後者二つだ。木本くんに疑いを向けた人物などいそうもないし、疑いを逸らしたいなら他にもっといい方法があった筈だ。何よりあのタイミングで、あの紙でとなると、最初の可能性しか考えられない。

春子をかばうために、木本くんが一連の事件は自分の犯行だと明かした。自分と春子在天秤に掛けて、ぎりぎりの選択をした。そういうことなのだろう。春子が警察に目を付けられた時に、春子には手に入れることの出来ない紙を使って宣言文を打つ。彼女の為にやったとしか思えない行動だ。

次に、遠野校長が殺された第二の事件について。あの事件が起きたのは、校長がうつかり木本くんの正体を明かしてしまいかけた後のことだった。住所等が書かれた用紙も奪われていたので、校長が殺された動機は明白だ。木本剛志に関する一切のヒントを消し去ろうと、犯人は目論んだのだ。そして、それ自体は見事に成功した。

事件を考える上で重要になるのは、誰が犯人足り得るかということ。この、第二の事件では、容疑者を限定できる一つの要素が存在する。それは、事件当日、校長の服装が正装だったことを知っていたのは誰か、ということだ。

普段の校長は、服装にルーズで、必要時以外には、ネクタイなどはしていなかった。それがあの日、事件が起きた当日だけ正装をし、そして殺された。犯人は恐らく、校長がネクタイを締める日を待っていたのだと思われる。だが、一週間という期間は、犯人に焦りを生んだのだろう。犯人は、重大なミスの一つ、犯してしまったのだ。

事件当日、校長は朝早くに外出した。行き先は多分、木本くんの自宅の筈だ。そして校長の外出後、呼び出し状が滑り込まされて、昼になってから校長が学校に戻り、その後すぐに殺されてしまった……。

ここで注目すべきは、呼び出し状がいつ滑り込まされたか、だ。あの紙には『戻り次第』という言葉があった。ということは、紙は間違いないく校長の外出中に滑り込まされたということ。ネクタイを使って殺人を行うつもりだったであろう犯人は、校長がネクタイをしているのを見て、すぐに紙を滑り込ませたに違いない。

だが、それは軽率な行動だった。何故なら、その時点で校長がネクタイをしていることを、犯人が知っていたという結論に至るからだ。それはつまり、朝の時点でネクタイを締めた校長の姿を見ている人物の中に犯人がいる、ということ。聞いた限り、ダンボールを

一緒に運んだ俺達四人以外には、あの日校長を見たメンバーはいない。すると、その時点で容疑者は、たった四人に選別されるのだ。

短絡的な考えだろうか。しかし、論理的にそうだと言わざるを得ない。これは、恐らく間違いない推理だ。犯人は、この四人の中にいる。俺が犯人でないことは分かっているのだから、三人の中に……。

問題は、第一の事件だった。この事件について考えるのを後回しにした理由は、その犯行の難解さにある。一体犯人はどうやって、鍵の掛かった教室に侵入し、淵江大吾を殺害したのだろうか。

勿論、動機はこちらも明白だ。事件が起きる前日に、淵江が春子に接触してきたことが、きっかけだったのだろう。自分の正体がばれていること、そして何より、大切な仲間が被害を加えられる危険があることを悟って、自分と、そして仲間を守るために、苦渋の決断を下したのだ。こうしてみると、犯人が行動を起こす理由には、何度も春子が出てくる。だが、やはり問題はそのトリックだ。周辺の教室は全て鍵が掛かっていた筈。そして淵江の教室も、扉側の鍵は施錠されていた。淵江本人が鍵を開けた可能性が薄い以上、考えられる侵入経路はどうしても、あの時開いていた窓ということになる。

窓からの侵入。それについての仮説を村越が以前披露した。それは、光耀高校に植わっている大きな松の木を伝い、淵江大吾のいる三年五組に侵入したという説だ。その仮説自体は、美術室が隣にあることや、柵によって登れなくなっていることから、あっさり否定されてしまったが、しかしどうもあの仮説が、そこまで誤りであるとは思えなかった。何か、どこかが抜けている気がする。事件の全てを一瞬で解明できるような、大切な欠片があと一つだけ、抜け落ちている。それはきっと、第一の事件に深く関わる何かだ。俺はその何かを、まだ掴めていないに違いない。

俺は、何を見落としている？ あの事件が起きた日の、何を見落とし、忘れている？
それが分かったとしたら、それだけで。俺はこの事件の全てを、一挙に解決できる、そんな気がした。

*

翌日の演劇部には、七人のメンバーが揃っていた。風邪で寝込んでいた春子も復帰して、ちゃんと佑也にも謝れたようだ。演劇で使う道具、衣装製作も佳境に入り、俺達は部室内を忙しく動き回っていた。

「あ、衣装殆ど出来てるね。有希ちゃん、光代ちゃん、頑張ってくれてありがと。二人とも、料理だけじゃなくて裁縫も上手いね」

「いや、全然だよ、泉さん。縫ってるところ見たらそんなこと言えないよ」

衣装の縫い目を隠すように、袖の辺りで手で押さえながら、有希が苦笑する。

「二人のおかげで、もうあと何日かで全部完成すると思う。ね、小林くん」

「う、うん。ありがとう、有希ちゃん、村越さん」

佑也も、ぎこちない笑みながら、再びメンバーの輪の中に入れていたようだった。

小道具製作は既に終わり、大道具も半分以上がペンキ塗りまで終わっている。まだペンキが乾いていないものが多く、それらを部室の隅に置いているので、作業スペースが無く

なってきた。俺と村越は、残った大道具の製作を、部室の外の廊下ですることになり、二人して作業道具を手に、廊下に出た。

「さ、これが終われば大道具もおしまいよ。頑張りましよ」

「ああ。さっさと済ませよう」

俺達は、望月が鉛筆で書いた線に沿って、ダンボールを切り進めていく。しばらくは、鋏がダンボールを切る音だけが廊下を満たした。

そんな時、ふいに村越が、

「ようやく、平穩が戻ってきた感じがしら」

「……そうだな。まあ、表面上は」

「表面上か。そうね、七人揃ったっていつでも、事件はまだ捜査中で、春ちゃんは疑われたままだものね」

「ああ。まだ事件は、終わっちゃいないんだ」

「ええ……」

彼女の手が止まる。

誰にもまだ、事件の影は付きまといっている。

「そういえばさ、村越」

「何？」

俺もまた作業の手を止め、顔を上げて彼女を見つめた。

「村越は、新しい推理とか考え付かないのか？ あの時みたいに、皆が驚くような仮説を披露してみたりさ」

「あの時、ね。松の木を使った仮説を発表した時、確かに皆、驚いてたわ。私がああいう話をするのって、そんなに意外だったかしら？」

「え？ いや、まあ少しはな」

質問を返されて、俺は戸惑いながらも答えた。その答えを聞いた村越は、自嘲気味に口元を歪めながらふっと笑い、

「やっぱり、私って体育会系にでも見られてるのかしらね」

「そりゃ、実際校内記録を作るくらい能力があるんだからさ」

「だけど、だからって相対的に勉強は出来ないだろうとか、そういう偏見が出てきちゃうのは、どうしてなんでしょうね」

「それは……」

言われてみて気付いた。そうだ、村越が運動しか出来ないだなんて、誰が思ったのだろう。いつのまにかそんな考えが、あの時まで定着していた気がする。だけど、誰も村越の成績なんて知らなかった。それなのに、勉強の方は出来ないだろうと決め付けるなんて、それは偏見に相違ない。

村越は、きっとそのことをずっと気にし続けていたのだ。

「勿論、文武両道だとかそんなことをいう気はないけど。少なくとも私は、運動が出来る代わりに勉強が出来ないってことはないわ。皆は勝手に思い込んでるみたいだけど」

「体育祭の時の記録が強烈なイメージになって、それと反対のイメージが皆、沸かなくなってるのかもしれないな」

俺は、大した根拠もなく感覚的に、そう言ってみた。事実、俺もそんな風に村越のイメ

ージを作ってきたのだと思う。

「何だかそれって、ステレオタイプみたい」

「ステレオタイプ？」

聞いた事の無い言葉だった。ステレオなら、テレビの音声設定で見たことはあるが、具体的な意味は知らない。

「そう。世界史の先生に聞いた言葉なんだけどね。例えば、外国の人に日本に対してどんなイメージを持っているかって聞くと、多くの人がゲイシャだとかアニメだとか、そういうイメージを持つてるの。勿論日本人からしたら、それは日本という国が持つてる特長の、ほんの一つに過ぎないんだけどね。外国の本や映画で紹介される日本は、そういうものばかりが出てくるのが多くて、皆偏ったイメージしか描けないのよ」

「なるほど。同じ日本でも、あの県は皆酒が強そうだとか、あの府は喋り好きが多そうだとか、勝手なイメージを持つことってあるもんな。ステレオタイプっていうのは、つまりそういうことか」

「ええ。よくテレビでもやってるわよね」

確かに、最近のテレビ番組で、そうしたいわゆる県民性というものを紹介していく番組があった。ステレオタイプなイメージというやつは、そうしたメディアを通じて一般人に広まっていくものなんだな。

「私、そういう先入観みたいなの、正直言つて嫌いなものよ。自分が経験してるからだけ。だからあの時、私は必死に考えて、事件の推理を試みたの。結果は芳しくなかったけど、私はそれで少しでもイメージを変えられたみたいで、良かったって思ってるわ。武も前までは私のこと、同類扱いしてたんだけど、今じゃ一目置いてくれるみたいで」

「はは、そりゃ良かった。でも、同類って思ってくれてる方が嬉しくないか？」

「馬鹿。私の方が強くなきゃ駄目よ」

なるほど。村越らしい考え方だ。

「……それにしても」

突然、村越の語調が変わった。「私、あの推理には自信があったんだけどね」

「何だ、まだ引き摺ってたのか。まあ、確かに俺も、松の木を使った推理は中々いい線言ってたと思うぜ。侵入経路がほぼ窓からだって確定した以上、あそこを通らないと淵江がいた教室には入れないだろうから」

「そうなのよ。私も、今もまだそう思ってる。だからこそ、あの推理が間違ってたというのが認められないわ。あの推理が誤りだったなら、もう推理の前提になる情報そのものを、私達が見落したり、或いは勘違いしてると思えないのよ」

「勘違い、か」

それは、彼女が話したステレオタイプのような、先入観から生じるものなのだろうか。だとすれば、その勘違いとは一体、何なのだろう。

「私達が目撃してきた内の何かを、私達が誤解してる。大切なのに、大切だと思ってる。そうなんじゃないかしら」

彼女の言うことは、俺が昨夜考えたことと同じだった。彼女もまた、この平穩に破局が訪れることを恐れながらも、事件を解決したいという思いに駆られ、考え続けていたのだ。何かとは、何だろう。俺達が今までに見てきた、聞いてきた内の何が、どれが重要な

だろう。

俺は、あの事件の時の様子を、一つずつ、思い出してみる。

体育の時間、佑也の突き指、有希と村越が鍵を取ってきてくれた事、着替えの時間に勘違いで鍵の掛かった扉を開けようとした生徒がいた事――

「あれ……それって、どういうことだ……？」

二つの疑問が浮かび上がる。そうだ。完全に見落としていた、いや、事象を事象のまま、疑問を抱こうとしなかった。考えてみれば、それは奇妙なことではないのか。その奇妙なことを説明しうる、何か驚くべき事実が、そこにあるのではないだろうか。

「聞きに、行ってみなきゃ」

「え？」

俺が突然、そんなことを口走ったので、村越は当惑気味に聞き返してきた。俺はそんな村越に、

「悪い、ちよつと行くところが出来た。ありがとな、村越。お前のおかげで、何か分かりそうだ」

「え、ああ、うん」

訳も分らず曖昧な返事をする村越を残し、俺は早歩きで、演劇部を離れていった。

*

聞かなくてはならないこと。それは、一人の男の証言。ただの勘違いだと思ひ込み、気にも留めなかった一つの事象の、その理由。

あの時扉を開こうとしたクラスメイト。彼の証言があれば、この事件の真相が、完全に白日の下に晒される。俺は、確信を持ってそう言えた。

その生徒の姿は、野球部にあった。演劇部の俺には少し立ち入りづらいグラウンド。ここでは野球部員が、激しいトレーニングに励んでいる。うちとは違い、コーチが二人もいて、そのどちらもが力強い激を飛ばしていた。

少々怖気づきながらも、俺は近くで休憩していた一人の部員に声を掛けた。適当な用件をでっちあげて、生徒を呼んでもらう。汗にまみれながらこちらにやってきたのは、体育委員の男子生徒、三吉だった。

「何だよ、矢井田」

「ごめんな、急に呼び出して……お前に一つだけ、聞きたいことがあって」

「何、それだけの為に呼んだのか？」

「怒るなつて。大事なことなんだよ。お前の言葉一つで、事件のことが分かるかもしれないんだ。あの殺人事件のさ」

「殺人って……あの三年生と、校長先生のか」

苛立ちを露にしていた彼は一転、真剣に俺の話聞く姿勢を見せてくれた。

「ああ……お前あるとき、確か教室の後ろの扉を開けようとしたよな。鍵が掛かってたけど。中に誰かいるって思ったんならそのまま開けようとしてもおかしくはない。でもお前、間違いない鍵が開いてると思ひ込んでいたんじゃないか？ あんなに派手な音鳴らすくらい、思い切り扉を開いたんだからさ」

それを聞いた彼は、そのときのことを思ひ出して恥ずかしくなったのか、短く刈り込ん

だ頭を撫でながら、

「そうなんだよ。だって、初めは鍵が開いてた筈なんだからよ。てっきり村越が閉めたのかと思っただけ、違うって言われて……」

「村越の前に俺達も施錠を確認したけど、そのときもどっちも鍵が掛かってたよ。だからあいつじゃない。それより、初めは鍵が開いてたつてのはどういうことだ？」

彼は、もごもごと口を動かす。

「何？」

「いや、だからさ。いけないつてのは分かってたんだけど、そのままにしておいたんだよ、俺」

——そうだよ。

つまり、そういうことだったんだ。

「そうか。お前、教室の後ろの扉、鍵を開けっ放しにして出て行ったわけなんだな」

「わ、悪いとは思ってたんだけどよ……やっぱ、面倒じゃん？ 鍵取りに行くの」

他の教室でもたまにあることだ。別に俺が目くじらを立てるような話じゃない。

重要なのは、そういうことじゃないんだ。あの日、体育が始まる前には、鍵が開いていたという事実。そして、俺達が帰ってきたときには、その鍵が閉まっていたという事実が重要なんだ。

「俺も面倒だよ、それはいいんだ。……間違いないんだよな。あの日、四時間目の間は、誰でも二年四組に入ることが出来たんだよな？」

「あ、ああ。誰でも入ることは出来た。勿論、知っている奴なんていないと思ってたけど……それは分からないけど……」

「いいんだ。もう全部分かったから。……ありがとう。もう戻ってくれていいぜ」

そう言うと、悪かったと呟いてから、彼はグラウンドへと帰っていった。彼には、そこが似合いの場所だった。……ありがとう。俺はもう一度言う。

あの日、教室には誰でも入ることは出来た。それは確かだ。そして俺が帰ってきたときには、鍵が掛かっていた。それも確かだ。

ああ、もう答えを出すには十分だった。犯人は、明白だった。
今こそ、この事件に幕を下ろす時だ。

俺は、胸にしっかりとその決意を刻んだ。

西の空から、眩しい日の光が差し込む午後。放課後の演劇部室は、自由奔放に遊び呆けていた以前までとはまた違った賑やかさに包まれていた。

ダンボールの切れ端が、散乱している。細かな文章が書かれたコピー紙も、折りたたまれて、或いは丸められて、放り捨てられている。

ペンキで汚れたブルーシートや、ペットボトルの底だけを切り抜いて作られた容器、それに突っ込まれたハケ。準備に使われた雑多な物が、部室の隅の方にまとめられていた。俺達七人は、そこで忙しく動き回っている。

「ほら、ここに立ててみて」

望月の声。指示を受けた橋谷と佑也は、部室の隅に寝かされていた、森の中をイメージした張りぼてを起こし、仮の舞台の両端を飾り立てる。

「うん、中々いい感じ」

小道具の出来栄えを見た望月は、納得して何度も頷いていた。

「ねえねえ、光代ちゃん、これ着てみてよ」

「やっぱりこの役、私なの？」

春子が渡した、刺々しい黒の戦闘服を、村越が受け取って顔をしかめる。

「まあ……くじ引きだったから我慢するけど」

とは言え、その服を身にまとった村越は、悪の親玉という雰囲気抜群だった。敵役は初め、男のつもりだったようだが、完全にランダムにくじ引きを試みたところ、村越がその役を引き当てたというわけだった。

他の役も皆、着慣れた服のように、似合っているように思われた。ただ、お姫様役のドレスだけ異様に完成度が高く、それ以外は少し滑稽にも見えるのは気のせいだろうか。どうも望月のセンスは偏っているように思えてならなかった。

俺と有希は、既に衣装を着てスタンバイしている。どちらの服も、ファンタジー性溢れる奇抜なものだった。初めて袖を通した際には、二人して笑ったものだった。

もうすぐ、第一回のリハーサルが始まる。

長机の上には今、スナックでもジュースでもなく、台本が置かれていた。まだリライトされていない、荒削りなものだったが、それでも中々の厚みがあった。各々意見を出し合って、望月の原作に手を加えたストーリー。村越は不満そうに顔をしかめていたけれど、実際のところ、一応誰もが満足の出来になっている筈だった。

劇の台本と小説の文章とは、まるで質の違うものだったが、井上先生が貸してくれた、過去の演劇部の舞台を見て、望月はそこからしつかり技術を学んだらしい。個々の登場人物の細かい表現、そしてそれに合わせた照明等の演出まで書き込まれた台本となっていた。

「次、お城の背景出してみて」

橋谷と佑也は忙しそうだ。どの辺りに背景を配置するかということにも望月はこだわり、床に紙テープを貼り付けたりしている。

「椅子はもう少し右ね」

先生に許可を貰って借りたパイプ椅子に、色々な装飾をつけた、手製の玉座もある。

「柱は大きいから、遠近感を出すために、後ろに置くのがいいわ」

望月は、図書館から演劇に関する本を借りてきたようで、厚めの本を片手に持ちながら、

そうやって指示を出しているのだった。

各シーンの大道具の位置を、一通り全て確認し終わり、準備は万端整った。後は、役者が演じるのみだ。

「よし、それじゃあやってみようか、演劇部の初練習！」

望月が声を上げる。それを合図に、全員が彼女の元へ集合する。

「いい？ 少しずつ指示を出してくから、覚えてる限り全部やってみてね。最初だから、上手くいくとは思ってないし」

「おう、任せとけ」

橋谷がガッツポーズをする。

「じゃあ、頑張りましょう。えい、えい」

「「おうっ」」

そう唱和してから、俺達はそれぞれの持ち場へついた。

望月が考えたのは、剣士とお姫様の悲しい恋愛を織り交ぜたファンタジー。激しい戦いはあえてとりいれず、俺達が出来る範囲での表現が一つ一つ書き込まれていた。

「さあ、それじゃあ始めるわよ。よい……、スタートっ」

望月は、そう言って思い切り手を打ち鳴らした。

*

「うん、そこはいいわ。そうそう、春ちゃんはそれで……。あれ、次は橋谷くんの台詞でしよ、忘れた？ あ、光代ちゃん、橋谷くんが言うまで出なくていいから」

的確な指示の飛びりハーサルだった。十回以上の中断、演技指導等を挟み、三十分以上をかけてようやく、物語が佳境に入る。

そして、いよいよ主人公が最後の戦地へ赴くというシーンで、俺は皆に集合の号令を掛けた。

「どうしたの、翔斗くん」

有希が駆けて来て、すぐに聞いてきた。

「ちよっと、提案があつてさ」

「ふうん？」

そして、七人が集まる。

「次のシーン、一度だけ俺の好きにやらせてくれないかな？」
「え？」

望月が驚き、そして他の五人は不思議そうに首を傾げた。

「どうしても一度、やっておきたいことがあるんだ」

俺は、力強く告げる。

——皆、まだ気付いていない。

今日、ここで俺が何をしようとしているのかを。

もし知っていたら、止めたかもしれないから。

だから、俺は何も言わずに、そう提案したのだった。

「俺からの頼みは、一つだけ」

「それは……？」

それは。

「主人公の剣士役を今だけ、変えてほしいんだ」

＊

剣士と姫の、離別のシーン。物語で一番哀愁を感じさせる場面だった。かつてない危機に陥り、後にも先にも引けなくなつた王国が、最後の戦いに挑む。そんな場面。

ファンタジーでは定番といつてもいいような話だ。戦地に赴こうとする剣士と、その剣士に恋する姫。戦いが、身分が、二人を引き裂こうとするけれど、彼らは決して挫けない。必ず再会するのだと、誓い合う。

彼も、この剣士のようになりたかつたのだろう。お姫さまを守る、勇ましい剣士のように。

「どうしても、行かなくてはいけないのですか？」

姫は剣士の背中に、寄り添う。

「僕にはどうしても、守りたいものがあるんです」

剣士は振り返らずに、ただ抱きしめてきた彼女の手だけを取り、優しく話す。

「それは、何なのですか？」

姫が、寂しげに問う。

剣士は、尚も優しい笑顔で、言った。

「決まっているでしょう。それは他でもない、貴方のことですよ——」

＊

そして最後の台詞が終わり、物語は大団円を迎える。約束を果たすために、傷だらけになりながら戻ってきた剣士と、一途に彼を待ち続けていた姫は、強い愛で結ばれて、もう二度と離れることはない。そんなハッピーエンドの物語だった。

姫を抱えた剣士は、少しばかりの汗に頬を光らせていた。姫は彼の手元より離れ、そして一礼する。

演劇の、終わりだった。

「……おつかれさま」

俺は、有希に、春子に、橋谷に、村越に、望月に、小林に、その言葉をかける。

誰もが何かをやりきつた、その達成感に満たされていた。

俺達は、演劇部だ。それは、何があっても変わることはない。初めは情けない部活だったけど、とんでもない悲劇が襲つたりもしたけれど、それでも俺達は、ずっと演劇部だった。演劇部の、仲間だった。

「俺達は仲間だ。それは、この先も、ずっとずっと変わらない」

目を閉じ、子供に語りかけるような優しい口調で、俺は言った。

「だから、もう終わりにしよう」

誰も、何も言わなかった。

「もう、これ以上演じないでくれ。お前はお前のままでいてくれ。それを誰も咎めないし、怯えもしない。……だから、お前がずっと続けてきた演技を、もう終わらせてくれよ。ずっとずっと隠し続けてきたその秘密を、教えてほしいんだ。……それが、この事件の終わり。俺達演劇部が関わった事件の、本当の終わりなんだ」

長い沈黙が流れた。俳優達はまるで、人形にでもなったかのように、その場に固まっていた。誰も動かない。時を止めたように。その中で俺だけが静かに歩き、そして彼らを見つめた。

「いいよな。もう、お前だけが必死になって続けていたその演劇を、——終わらせてもいいんだよな」

その時、頬に落ちる一人の少年の汗に混じり、一筋、違うものが流れた気がした。

「——もう、十分だよ」

彼は、ぽつりと呟いた。

俺はそして、彼を見て頷く。

「淵江大吾を殺して、校長先生を殺して。……そして、最後までその事実を隠しながら、春子だけは守ろうとした、一年前の被害者、木本剛志は——お前だよな」

春子が、俺の指先を見て、声を上げる。

「そうだよ。僕が、木本剛志だ」

そう答えて、彼は——早瀬有希は、寂しげに微笑んだ。

*

長い黒髪は、汗に光っていた。その奥に微かに伺える目からは、やはり一筋の涙が零れ落ちていた。

ずっとずっと、早瀬有希を演じ続けていた男、木本剛志。彼は涙を流しながら、尚も鋭い眼光を光らせていた。

皆、有希の方へ目を向けていた。信じられない、というような表情で、皆彼を見つめていた。

「どうして、……どうして有希ちゃんが、木本くんだって分かるの！」

春子が真っ先に叫んだ。

俺はそして、俺に任された最後の役を演じることにする。

探偵という、悲しき業を背負わされたその役を。

「……演劇部のメンバー内に、木本くんがいる。それが校長先生の口から漏れ出てしまった時から、俺達はそれを意識していただろ？ だったら、この中の誰が木本くんであり得るか。犯人かどうかはともかくとして、それを考えることはそう難しくはない筈なんだよ」
多分、この中の何人かは、誰が木本くんなのかという予想くらいは立てていたんじゃないかと思う。しかしそれを口に出すことは出来なかった。そうすることで、誰かを傷つけないか。そう。事件をより悲劇的な方向へ向かわせたくないから。

「俺達が調べられる範囲での、誰が木本くんなのか分かる為の条件とは何か。まず明らかにするのは性別だ。木本くんは男なんだから、その時点で春子、ゆみ、村越は除外できる。後に残るのは俺と佑也、橋谷、それに有希だ。後はこの四人から、誰が一番木本くんであ

る可能性が高いのかを考えていけばいい」

春子は、その性格から佑也が怪しいのではと予想していたが、それはあくまで予想であって、推理ではない。いくつかの事実を元に推理を重ねれば、一見気の弱い木本くんとは似ても似つかないような、有希という少年に辿り着く事ができるのだ。

「俺を入れて四人の内、俺と佑也は木本くんでは有り得ないと断言できる。何故かと言えば、俺は一年生の時——つまりまだ木本くんが本人として登校していた時に、村越と同じクラスにいたからだ。それに、俺には春子がいる。春子とは小学校からの付き合いだからな。そして、同じようなことで佑也も除外される。佑也には一歳年上の姉がいて、望月がそのお姉さんに会ったと言ってたからな」

残るのは、橋谷と有希だけになる。橋谷は七月に転校してきたので、木本くんは学校を去った後だ。つまり木本くんである可能性はある。有希も一年生の時に三組にいたというのは本人だけの証言で、それ以上のことは曖昧だった。

「これで残ったのは二人だけだ。橋谷と有希。どっちかが木本くんってことになる。ここからは、事件が起きた後のことをよく思い出してみたいんだよ。そうすれば、自ずとどっちが木本くんなのかはつきりするんだ」

「事件が起きた後……」

望月が、こめかみを指で突きながら、ううんと唸った。

「……あれ？　もしかして……あの時の」

「やっぱり、望月には分かったか」

「ええ。でも、そうだったんだ。だからあの時、有希ちゃんは……」

一人で納得している望月を見て村越が、

「どうということなの？」

「あれは、望月の提案で俺達が美術室へ行った時のことだった。あの時俺達は、水原さんに去年のいじめ事件のこと、木本くんのことを聞いたんだったよな。じゃあ、水原さんを呼びに行ってくれたのは誰か、覚えてるか？」

「確か……岡さんだったかしら」

村越も、一、二度しか話していない彼女のことは、まだ呼び捨てには出来ないらしかった。

「そう。望月の友達の、岡っていう女子が水原さんと呼んでくれたんだ。あの時彼女は、一つ重要なことを俺達に告げていた。それは、彼女が去年、一年四組の生徒だったということだ」

「あっ」

ようやく村越も合点がいったらしい。それに続いて、春子や橋谷、佑也も俺の言わんとしていることに気づいたようだった。

「あの時岡さんは俺達にその事を告げて、それから俺達全員には、はじめましてと言ったんだ。だけど、七人ともが初対面ってことはないんじゃないか？　何故かと言えば、一年三組にいた生徒となら、体育の時間に一緒に授業をしていた筈だからさ」

そう。この学校は二クラス合同で体育を行う。だから、一組と二組、三組と四組、五組と六組という組み合わせで、毎回体育の授業をしているのだ。今現在の三年生以外は、クラスが五組までしかなかったが、それでも四組まではその組み合わせで授業を行っている

のだから、それは絶対的なことだった。

「一年生には、他のクラスと関わる授業は体育しかない。選択授業は二年生からだからな。そう考えると、他のメンバーが初対面なのはおかしくない。男子は女子と話す機会も少ないだろうしさ。……だけど、三組にいた生徒が岡さんを知らず、岡さんもまた三組にいた生徒をしらないっていうのは、ちよつと考えられないだろ？」

自分は去年三組にいたと、そう答えていた有希。恐らくそれは、俺達演劇部のメンバーがいた組と被らない組を選んだからだろう。だが、それでもやはり騙しきれなかった。去年自分は一年生ではなかったという事実を隠すことなんて、どれだけ記録を改ざんしようと出来なかったのだ。

「そりゃ、当然だよ。俺——俺は、その時三組になんかいなかったんだもの。いくら影が薄かったからとか言い繕ってみたところで、いなかった事実を隠し通すことなんて、到底出来ないよね」

それでも、彼も校長も、出来ると信じてやり抜いて来たんだ。そして、淵江にさえ気付かれなければ。恐らくそれは、達成できていたのではないだろうか。

「それから、これは推理の補強になるくらいのもものだけ。いくら当時の木本くんが、誰からも手を差し伸べてもらえなかったとは言え、一人として——勿論淵江以外のだけど、木本くんの顔を覚えていないというのは変だなと思ったんだ」

「そうだよ。俺達皆、色んな生徒や先生と毎日話してるっていうのに、淵江以外はこの中の誰が木本くんかっていうことを、全然分かってなかった」

佑也は、言われて初めて気付いたようで、若干声を上ずらせながらそう言った。

「ああ。いくら人間が成長して、その容姿が変わるとは言え、一年かそこで昔の面影が全くなくなるくらいに顔が変わったりするだろうか？ おまけに橋谷の場合、木本くんが学校を去ってからたった一カ月後なんだ。極端に太ったり痩せたりしたら、見た目で判別出来なくなること有り得るかもしれないけど、生憎そんなメンバーは一人としていない。となれば、考えられるのは一つ。木本くんは、出来るだけ先生や生徒に顔を見られるのを避けていたんじゃないだろうか」

「それって、つまり……」

春子が恐る恐る、有希の方を見る。——彼の顔は、鼻の辺りまで髪が垂れ、目元は殆ど覆い隠されていた。

「皆は気付いてたか？ 有希は、三年生や先生と会うときにはいつだって、前髪を梳いたり俯いたりして、顔が見えにくくなるようにしていたんだ」

「あつ」

村越が声を出した。他の皆も様々に驚愕の表情を浮かべる

「前髪が長いのはそもそも、顔を隠す為だったんだろう。そして上級生、先生と会うときには更に念には念を入れて、出来るだけ顔を隠そうと努めたんだよ」

「そう、だったんだ……」

無意識に行っていた癖ではない。一見何の変哲もないように見える行動にも、顔を隠すというちゃんとした意味があったのだ。

「担任の井上先生は、授業の担当が生物だった。有希は去年、物理を取ってたらしいから、井上先生に対しては顔を隠さなくてもそれほど危険はなかった訳だ。だけど、美術の先生

とか物理の先生とかの前じゃ、髪を梳いたり俯かなくてはいけなかった……」

田崎先生と話した時も、第二の事件で先生達が集まっている廊下に立っていた時も。有希は怪しまれないように、出来るだけ自然に、顔を隠す努力をしていたのだ。

早瀬有希を演じ続けるための、それも一つの演技だった。

「一年生の時にどのクラスにもいた痕跡がなく、上級生や先生に顔を見せたがらない男……。これで俺は確信したんだ。木本剛志はつまり、有希だってことを」

有希は、それを聞いてゆっくりと首を縦に動かした。認める、ということだ。

「——それが分かったところで、これから事件の核心について話そうと思う。有希が淵江と校長を殺すことになった、二つの事件について」

*

「ちょ、ちよつと待って。今の話は分かったけど、だからって有希ちゃん——いや、木本くん？　が、犯人だって決まったわけじゃないよね？」

春子が必死の形相で訴える。

「有希でいいよ、俺達には……それとも、木本くんって呼ばれたいか？」

有希は、思い切り首を振って拒絶した。

「分かった。……確かに、犯人が木本くん——つまり有希だとその時点で決められるわけじゃない。有希に同情した誰かが殺したという可能性はある」

「その可能性を、翔斗くんは消せるっていうの？」

「消したくはないよ。でも、多分有希は思ってるんじゃないかな。もうこれ以上、罪を隠し続けるのは嫌だって。隠し続けることで、他の誰かが疑われるのは、嫌だってさ」

「——うん」

偽りの仮面を剥がされた後の有希は、むしろ晴れ晴れとした表情だった。その頬には涙が伝っていたけれど、それは決して悲しみだけの涙ではなかった。

「有希が木本剛志だということは分かった。じゃあ何故有希が犯人であるかが分かるか。

それは勿論、一連の事件で犯人であり得る人物もまた、有希しかないからだ。それを証明する為に、俺が推理した事件の真相について、皆に説明するよ」

全員が——とりわけ春子が、真剣な目つきで俺を見つめていた。俺は、探偵役という重圧に胸が痛むのを感じたが、その痛みに、息苦しさに耐えながら、再び口を開く。

「淵江が殺された第一の事件で、俺が調べた各自のアリバイはこうだった。春子は十二時頃に一、二分の間トイレに経っていてその間のアリバイが無い。橋谷は授業開始のチャイムが鳴った後すぐに、バイト先から電話が掛かってきてトイレに駆け込んだらしく、アリバイが曖昧。有希と村越は体育を見学していて、村越は女子の更衣場所である体育館内の更衣室へ着替えに戻り、有希は男子の更衣場所である教室へ戻った……」

「——あ、わ、私、それに全然気付いてなかった……！」

自分が今まで勘違いしていた事実に驚いて、そう言ったのは村越だった。俺は、今はその大きな勘違いには触れず、

「村越のアリバイは多分、一緒に着替えた女子が証明してくれるだろうけど、有希は無理だ。見学していた男子が有希しかいなかったんだからな。ちなみに俺は見学してなかった

から、アリバイはしっかりしてる。そして佑也については、保健室の先生に記録用紙を見せてもらった結果、アリバイがあることが分かった。望月は、ずっと教室で授業を受けていたからアリバイ成立だ」

簡潔に述べるなら、春子、橋谷、有希だけがアリバイ無し、ということになる。この時点で、容疑者は三人にまで狭めることが出来るのだ。

「続いて第二の事件。校長先生が殺されたあの事件だ。死亡推定時刻は淵江の事件の時と違って比較的幅があり、俺達も教室移動なんかがあってアリバイがあやふやだった。こっちの事件で重要なのはだから、アリバイじゃない。ある一つの事実が、容疑者を限定する要素になるんだよ」

「その要素って？」

自分で考えることを既に放棄しているようで、望月が急かし気味に尋ねてきた。

「誰がその日、生きている校長を目撃したか」

「ネクタイか！」

声を上げたのは橋谷だった。恐らく、彼も目撃者の一人だったから、すぐにその答えに思い至ったのだろう。

「ああ、橋谷の言うとおり。その要素とは、校長先生の服装を——具体的には、ネクタイをしているのを見たのは誰か、ということ。どうしてかはもう分かるよな？ 淵江と校長先生の事件に共通していること、それは犯行方法なんだ」

淵江と校長は、共に自身のネクタイで首を絞められて殺されていた。どんな理由があったかは分からないが、有希は是が非でも同じ殺害方法を取りたかったのではないだろうか。

「有希。どうして淵江と校長先生を、同じ方法で殺したんだ？」

俺が問うと、彼は「そうだね」と一瞬だけ悩む様子を見せ、

「自分でもよく分かんないんだけど、多分ね。俺が疑われないように事件を計画しつつ、他の誰かが疑われることも嫌だっていう気持ちが強くなっていたんだと思う。だから、共犯者がいるとかいった推理がされないように、同じ犯人がやったんだってことを強調する為に、二人を同じ方法で殺したんだ。『木本剛志』が疑われるなら、それでいいっていう気持ちだったのかもね」

「なるほど。……そういうわけだったのか」

事件が進むにつれ、彼の心は徐々に奇妙に倒錯していったのだろう。メンバー内に疑いが蔓延し、春子が警察に連れて行かれ。どんどんと悪化していく状況下で、彼は自分が何を守ろうとしているのか、何を守ればいいのか、徐々に分からなくなっていた……。

「……話を戻そう。とにかく犯行方法を同じにしようとしていた犯人は、校長先生がネクタイをしている時に、犯行に及ぶ必要があった。だから校長先生が口を滑らせ、木本剛志の存在が俺達にばれてしまってから事件が発生するまでに、一週間以上も期間があったんだ。そしてようやくあの日、六月十一日。木本剛志が学校を去ったというその日に、校長先生がネクタイを巻いているのを目撃した」

「だけど、校長先生を見た人なんて、割といそうじゃない？ 限定なんて出来るかしら？」
望月が難しい顔をして言った。

「勿論、偶然にもちらっと目撃したり、人伝に話を聞いて、ということも有り得るかもしれない。だけど、それは極めて少ない可能性だと思うから、俺は排除することにしたんだ。

これから話す条件的に、偶然の目撃は朝、校長先生が出掛けるまででないと話が合わないし、人伝だと信憑性が疑わしいだろうから、計画を実行に移すのは躊躇われそうだしな」

「条件？」

と、また望月。

「ああ。校長先生は朝の八時半に出て行った。そして帰ってきたのは昼頃だ。ところで望月に聞いてみたいんだけど、普通呼び出し状ってのは、相手が近くにいる時にまでわざわざ出したるもんかな？」

「え？ あ…：：：そうよね、呼び出し状は校長先生が不在の間に送られたと考えるのが当然のことだわ。つまり犯人は、それ以前に校長先生がネクタイをしている所を見たってことに他ならない…：：」

「そう。それにもし昼過ぎ、要するに校長先生が学校へ戻ってきた後に目撃したとすれば、呼び出し状を渡す意味そのものがなくなるんだからな」

呼び出し状を渡すことには、リスクがつきまとう。そして実際、校長が呼び出し状を破棄しなかったことよって、演劇部は警察に疑われることとなった。そうしたリスクを承知で呼び出し状を送ったのは、朝、自分の目で校長のネクタイ姿を見ていたからに違いないのだ。

「一週間という期間が焦りを生んで、犯人は校長がネクタイをしているのを発見した時、すぐに計画を実行に移そうと決意した。そして恐らく、兼ねてより用意していた呼び出し状を校長室かどこかに滑り込ませて、校長先生の手にも渡るようにし、姿を見せたあの人を、ネクタイで絞殺した。あんまり詳しい経緯は分からないが、犯人は校長先生がある程度待っていてくれるだろうと踏んでいたんだと思う。木本剛志からの呼び出しなら、放り出すわけにはいかなかっただろうからな」

「俺を第一に考えてくれてたあの気持ちを利用するのは心苦しかったけど、俺はその苦しさを振り切って、校長先生を殺したんだ。呼び出し状は校長室の扉から、端が少し出るようにして滑り込ませて、休み時間毎に見に行ってたんだよ。校長先生が拾ってくれたかどうかをね」

俺の推理が及ばない部分を、有希が補ってくれた。

「ありがとう、有希。そういうわけで、第二の事件で重要となるのが、校長先生がネクタイをしているのを見た人物、ということになるんだ。じゃあ、その姿を見たのは誰か？ 答えは簡単。あの朝段ボールと一緒に運んだ、俺、春子、橋谷、有希の四人なんだよ」

演劇で使う大道具を作る為に橋谷が持ち込んだ段ボール。村越に怒られるまで忘れていたらしく、製作開始が遅れてしまったが、ある意味ではそのおかげで、容疑者を絞り込むことが出来たわけだ。

「こうして第一、第二の事件を推理して、容疑者を絞り込んでみると、どちらの事件も同じ三人だけが容疑者リストに入ってしまうんだ。春子と橋谷、そして有希。この三人の内春子だけは、俺はすぐに犯人じゃないと確信できた。初めから春子だけは疑うまいと思っていたんだけど、あの一件があつてようやく、春子が犯人じゃないと断定することができたんだよ」

「あの一件…：。それって、犯行の終了を宣言した、あの？」

佑也の言葉に、俺は頷いた。

「ああ。木本剛志と署名があった、犯行の終結宣言文。『月光ゲーム』という推理小説の一文を引用して書いたあれは、パソコンで打たれた文章ではあったけれど、やっぱり署名どおり木本くん——つまり有希が書いたものだったんだ」

部室の棚——橋谷の漫画でぎゅうぎゅう詰めになっていない、春子達が使っている方の棚の上には、まだその宣言文が置かれてあった。

「これは、春子が風邪で休んでいた日に、休んでいた日の日付があるプリントを使って打たれた宣言文だ。それが示すことは一つしかない。有希自身が、春子から疑いを逸らそうと苦し紛れに書いたのがこの宣言文ということさ。これを発見したとき橋谷が言っていた通り、この文章の文体は第二の事件の呼び出し状と酷似してる。つまりこれを書いたのが春子でなければ、第二の事件の犯人も即ち春子じゃなくなり、疑いが解消されるっていう寸法なんだ」

無論これは苦し紛れの方法で、絶対にそうだと言い切れない部分はある。春子が出した呼び出し状を真似て有希が書いた可能性が無いわけではない。しかし、最も合理的なのはやはり、全て有希がやったことだという仮説だ。それに何より、有希には自分の身を危うくしてでも、春子を守りたい理由があった。

深い、深い理由だ。

「これで春子が容疑者から外されると、残ったのは橋谷と有希ということになる。驚いたことに、木本剛志で有り得た人物もまた、橋谷か有希なんだよな。ここまで考えて俺は、その先をどうしたらいいのかに悩んだ。二人の内どちらが犯人なのか。有希の方が確率は高いが、それでも断言できはしない。……その二者択一の問題を解くために必要だったのは、最後に残った、第一の事件のトリックを説明することだったんだ」

犯人はどこから侵入したか。様々な可能性が議論され、村越もその一つを検証し。けれども解き明かされることのなかった、難解なトリック。

「ヒントは何度も、村越が出してくれたんだ。村越、お前は自分でも気付かない内に、あのトリックを解き明かす上で非常に重要なことを口にしてたんだよ」

「私——私、そんなこと言ってたかしら？　だとしたら、それっていつのことなの……？」
村越はぎゅっと目を閉じて必死に記憶を辿っているようだったが、全く見当もつかないらしかった。

「ヒントは三つあった。一つ目はあの、松の木を使ったトリックそのものだ。あれ自体は水原さん達に否定されてしまったけど、発想そのものは決して悪くなかった」

松の木。そう、結局のところ、犯人の侵入経路はあの松の木だった。犯人は、木の幹を伝って淵江のいた教室に、窓から忍び込んだのだ。

では、一体どこから木に登ったのか。

「第二のヒントは、事件には何の関係もない、愚痴みたいな話の中にあったんだ。昨日のことだし覚えてるだろ？　……勘違い、思い違い、ステレオタイプ。それがあのトリックを知る上で一番大切なことだったんだ。その勘違いは二つあって、一つは犯人を命拾いさせることになり、一つは犯人を追いつめるきっかけになってしまった」

二つの錯誤。最後の最後、村越がそのヒントを話すまで気付かなかった、主観によって捻じ曲げられた事実。それは、気付いてみれば呆気ないほど簡単な間違いで、どうしてそんなことに気付かなかったんだろうと、自分が情けなくなってしまうような、誤り。

「その内一つは、四組の体育委員の、三吉ってやつ勘違い。まあ、あいつ自身はずっとおかしいと思っただけ。彼はおかしなことって言うのは、こういうことなんだ。あいつは体育の授業の為に着替えを終えて、最後に教室を出たらしい。最後の奴は当然、教室の扉を施錠しなくちゃならない。盗難被害が報告されて、鍵は絶対に掛けろって先生から言われてるからな。……だけど、三吉は掛けなかったんだよ。あいつは面倒臭がつて、教室の後ろ側の扉を、施錠していなかったんだ」

「そんな！」

村越も、有希以外の他のメンバーも、皆一様に驚いた。密室だとばかり思っていた二年四組が密室ではなかった。それはあまりにも大きな見落としだ。

「そういえば私、あいつに聞かれたわ……。鍵掛けたかって。あれって、そういうことだったのね？ だから三吉は……」

「そうさ。あいつは鍵を開けていた扉が開かずに、大きな音を立てて恥を聞いたもんだから、村越に聞かずにはいられなかったんだ。鍵を掛けたんじゃないかってな。——さあ、これで密室だと思われていた二年四組は解放された。あの時二年四組には、誰でも入ることが出来たんだ」

誰でも入ることが出来た。その事実が分かったと、次に導き出せることは何か。それは勿論、侵入経路だ。

「犯人はだから、二年四組の窓から松の木を伝い、三年五組に下りたんだ。丁度二年四組は三年五組の真上。松の木が伸びている直線状にあるからな。そして犯人は眠りこけていた淵江を絞殺し、五組の扉の鍵を開け、廊下へ飛び出した」

「でも、翔斗くん。それだと橋谷くんでも有希ちゃんでも、一応犯行は可能じゃないの？ 橋谷くんは時間的にかなりシビアかもしれないけど、不可能じゃないような……」

ドレスの袖口についたラインストーンを弄びながら、消え入りそうな声で春子が聞いてきた。有希が犯人だということを、最早認めざるを得ない状況になってきて、胸が張り裂けるような思いなのだろう。

——だけど、それが事実なんだ。

「いいや。このトリックは有希でないと使えない。それを完璧に証明できることが、二つもあるんだよ。その一つが、村越が言ってくれた第三のヒントであり、さっき村越が気付いた思い違いなんだ」

「……ええ。今なら分かるわ。だって、だってあの日有希ちゃんが廊下で、あの姿でいたのはおかしいもの」

村越が、声を震わせて言った。そしてその後すぐに、

「あっ……」

あの日の有希の姿を見ていた佑也も、自分がとんでもない思い違いをしていたことによく気付いたらしい。彼は目を丸くして、その声を上げたのだった。

「二人とも、分かったな？ あの日、体育を終えた後の有希の服装を。……有希はあの時、体操服ではなくて制服だった。どうして俺達はそこで、ごく当たり前の疑問を抱かなかったんだらう。男子の更衣場所は教室なのに、まだ鍵を開けていない状況で、どうして有希は着替えを済ませていたんだらうか、という疑問を」

本当に、気付けば思わず首を捻ってしまいそうな誤りだ。何故俺達は、そのことに気付

かなかったのか。これから教室の鍵を開けるという時に、教室で着替える筈の有希が既に制服でいることは、どう考えてもおかしいのだ。有希が女子であるわけでもないのだから、更衣場所は教室だと決まっているのに。

「大きな思い違い。これは有希を救うことになった。どこで着替えたのかを追求されたなら、体操服を見せなくてはならない事態が生じたかもしれないし、そうなれば、有希が淵江を殺した犯人だというのは明白になったからだ。……何故なら、松の木を侵入経路とした有希は、その服に、ズボンに、いくつもの葉や木屑をつけていたに違いないんだから」

村越が松の木をよじ登ろうとしたとき、その服に木屑がついていたことを俺は覚えていた。そして、その村越が去年の文化祭についての話をした時言っていた、作業をする時は汚れないように、体操服に着替える、という言葉。この二つがヒントになって、俺はまた気付かされたのだ。

「つまり、有希は体操服のまま松の木を伝って侵入し、淵江の殺害後に三年五組の中で、汚れた体操服を脱いで制服に着替えたんだよ。だからあの時、有希は制服姿だったんだ」

「——はは。全部お見通しってわけだね。やっぱり、翔斗くんは流石だよ」

力ない笑みを零して、有希はそう言った。正解、ということだな。

「もう一つの誤算も、勿論分かっているんだよね、翔斗くんには」

「……ああ」

誤算、ということは、体操服を脱がなくてはならないほどに木屑が付くとは思っていなかったということなんだろう。保険として持っていた着替えが役に立った、という感じか。

「これで残る謎は、たった一つだ。松の木という侵入経路を悟られないようにと考え出された、有希の計画で最も重要な部分。それは、上手くいけば二年四組を事件とは全く無関係の場所と思わせることが出来るもので、しかし実際には、三吉の思わぬ行動によって計画に大きな穴を開けてしまった。……その謎っているのは、扉の命題さ。たった一つしか答えの無い、扉の鍵のパズルなんだよ」

「そのパズルって何……？ その答えもまた、有希ちゃんが犯人だって、私達に知らしめるものなの……？」

春子は、泣いていた。

有希は、微笑んでいた。

「……二年四組の後ろの扉は、初め鍵が掛かっていなかったということが分かった。しかし体育が終わった後、扉は施錠されていた。このことから分かるのは、犯人は扉の鍵を内側から閉め、窓から出て行ったということ。後ろの扉は内側からなら、鍵が無くても閉められるからな。……じゃあ、窓の施錠は、一体どうやって行ったんだろうか？ 窓から出て行った犯人には、教室の扉に鍵が掛かっている以上、それを開けないでは、窓に鍵を掛けることが出来ないんだよ」

では、どうやって犯人は鍵を掛けたか。それは、とても単純なこと。

たった一つ有り得る、簡単な答え。

「それなら、教室の扉が開いた後で、窓の鍵を閉めるしかない。それが出来たのは、たった一人だけ。……松の木の隣に席がある、有希でしかあり得ないんだ」

俺は、そう言っただけで有希を指し示した。
それで、証明終了だった。

春子が悲しみに耐え切れず、涙を流してその場にへたり込むのを、目を細めて見つめながら、有希は口を開いた。

「全部、全部翔斗くんの言った通りだよ。そうだ——俺はそうやって、淵江大吾と校長先生を、この手で殺したんだ」

＊

「どうして、そんなことしたの……？ どうしても殺すしかなかったの……？ ねえ、有希ちゃん、私には分かんないよ……」

膝をつき、有希のズボンの裾を掴みながら、春子はそう投げかける。その問いは、恐らく他のメンバー全員の思いを代弁したものだ。

有希は、泣きながら自分にしがみついた春子に一言、

「ごめんね」

それだけを言った。

「——はあ」

俺は、そこで溜め息を吐く。それは、この場に似つかわしくない、呆れたような溜め息だった。

「翔斗くん……？」

望月が、怪訝そうな顔で俺を見つめた。

「……春子。考えてみてほしい」

俺は、諭すような調子で言った。

「この事件が、何を中心にして起こっていたのかを」

「どういう意味……？」

赤く腫れた目をこちらへ向け、春子は聞いてきた。

「有希が結局、最後まで守ろうと決めたのは何だったのか。それは、明らかじゃないか」

「有希ちゃんが、守ろうとしたもの……」

「そう。例えば、第一の事件が起きたきっかけ。淵江に自分がまた学校にいることを悟らせたことがその一つだったけど、もう一つ、大きな理由がある。それは、春子が淵江に目を付けられてしまったことだ」

「……私が」

「それから、書く必要もない犯行の終結宣言を書いた理由。それはさっきも言ったように、警察に春子が疑われてしまったからに他ならない」

春子はもう一度、今度は驚いたような目をしてこちらを見、そして有希を見た。

「もう、分かるだろ？ 有希が自分自身の立場を危うくしてまで、自分自身の計画を潰しかけてまで守ろうとしたものが何か。——それは春子、お前だったんだよ」

「そんな——そんなことって……」

偽りの仮面を被って、初めて友人を得て。そして、守りたい者が出来た。

そんな有希だから、この事件を起こしてしまったのだ。

「春子を守りたい。だけど、自分が友達を一人も作れず、いじめられてばかりいた木本剛志だということを絶対に知られたくない。その葛藤の挙句、この不可解な事件は出来上がってしまったんだよ」

「どうして、……どうして、私なんかを守るのに、そんな……そんなことまで……」

「泉さん……」

まだその理由が分からずに、両手で顔を覆って泣く春子に、有希はただ、名前を呼ぶだけだった。それ以上、何をしてあげればいいのかが分からないようだった。

——全く。演技じゃなくなったら、てんで駄目じゃないか。

俺は有希を見て、この場の空気とは裏腹に、妙に微笑ましい気持ちになった。

「有希」

俺は、彼の名を呼ぶ。

「俺の役目は、ここまでだからな。この事件の謎は解いても、そこから先のことは、俺が言うわけにはいかないから。……もう、分かってるだろ？　そういうことを言うのは、本人じゃないといけないんだって」

「——ん」

有希は、一瞬言葉を詰まらせて、それから頬を赤らめ、

「もう……翔斗くんは、本当に全部、お見通しなんだから」

その顔は、決して二人の人間の命を奪った殺人犯には見えなかった。ただの、恋する一人の少年にしか、見えなかった。

「……よし」

有希はそして、ようやく『有希』という役ではなく、木本剛志として、その思いを告げようと、口を開く。

それは、とてもぎこちなく、初々しく、そして、何よりも神聖なものだった。

「……あのね？　泉さん」

——お見通し、か。だって、そんなの、分かりきったことじゃないか。

春子と俺が二人で話しているのを、必死になって引き離したり。

「俺は、……俺はね」

突然俺が、誰かと付き合ってるのかを聞いてきたり。

「ずっと、ずっと泉さんのことがさ」

俺と有希が主人公とヒロインをやってほしいと望月が言った時、俺じゃなくて春子とやりたそうにしていたり。

それは全部、お前の偽らざる気持ちを如実に表してるじゃないか。

「……好き、だったんだよ」

木本剛志は、自らの気持ちを告白して、そして、照れ臭そうに笑った。

*

茹だる様な暑さが、日本中を包んでいた。七月に入り、気温も三十度を越す日ばかりだ。生徒の服装も、夏服に移行していた。

初夏が終わり、夏が始まっていた。

照りつける太陽が眩しい。コンクリートは焼けるように熱く、陽炎や逃げ水がよく目に映った。出来るだけ風を身に受けようと、俺は思い切り自転車走らせる。学校に着いたのは、相変わらずぎりぎりの八時二十五分だった。

「おはよう、翔斗」

教室に入れば、村越が挨拶をしにきてくれる。俺も挨拶を返し、机に教科書を入れる。そんな時、ふと振り返ると、誰もいない机が、目に入るのだ。

彼は去り、後には俺達だけが残された。彼のいた場所は、今は空しい空席があるばかりだった。

「……初夏は、終わったんだな」

「——そうね」

時が過ぎ去っていったのを、しみじみと感じる。

有希はもう、いなかった。彼は、早瀬有希としてではなく、木本剛志として警察に連れて行かれ、そして俺達の前からいなくなった。

だけど、悲しくは無かった。いつかまた会える。俺達は、それを信じているから。会えるさ。いや、会うんだ。

別れ際に、有希は言った。

「ありがとう、皆。俺は初めて、自分の人生を楽しめたよ」

俺達はその笑顔に、彼の全てを見た気がした。

春子は彼に、こう言った。

「私、待ってるから。ずっとずっと、待ってるから。……帰ってきてても、一緒だよ。約束、なんだから」

彼の頬が赤らんでいたように見えたのは、錯覚ではあるまい。

授業が終わり、放課後になる。そうすれば、俺達はいつものように、演劇部に集まっていた。小道具は大半が完成し、衣装も春子と佑也が見事なものを作り上げていた。演劇の準備は着々と整っている。文化祭へ向けた練習も、欠かさなかった。

台本はすっかり完成している。望月が頑張ってくれた。先生達の検閲もクリアして、見世物の演目としてももう登録されているのだった。

「お前はここで望月を守るんだろ」

「俺がー？」

有希がやる予定だった役は、望月が取って代わった。一人減った照明は、小林が何とかしつつ先生にも協力してもらおうという。幸いなことに顧問が名乗りをあげてくれたので、そのことについては問題はなさそうだった。

「ほら、そこで春ちゃんを抱き上げるのよ、翔斗くん！」

「重い、ダイエットしてくれ」

「有希ちゃんは持ち上げてたでしょっ」

有希の話は、決してタブーになんてなってはいなかった。むしろ、この場にいるくらいの気分で話をし、茶化したりもしていた。そうでなくては、演劇部の仲間とは呼べない。あいつのことは、ずっとずっと忘れちゃいけないんだ。

有希自身が木本くんと呼ばれるのを嫌がっていたから、彼のことはあだ名として、『有希』と呼ぶようになっていた。有希こと木本剛志。俺達演劇部の、大切な仲間。

「ふう。これで通しは終わったけど。何となく動きが雑なのよね。翔斗くん、悪いけど下手よ、下手。どうしてあの時あんな風に格好いい探偵が出来たのか分かんないわ」

「あのなー」

毎日が楽しかった。この中に、いつもはいた一人がいらないことがやはり残念だったが。：またいつか、集まって、こうやって過ごそう、有希。

颯爽と過ぎ去っていく、こんな時間を、共に過ごそう。

初夏は終わった。彼が演じ、俺達が演じた初夏の演劇は、幕を下ろした。

演劇の初夏。タイトルをつけるなら、そんなところだろうか。

誰に見せるわけでもない、喜劇と悲劇の物語。

それが、俺達の初夏。

演劇の、初夏。

「皆、有希ちゃんから手紙が来てるの。皆で見ようよっ」

春子はそう言って、一枚の封筒を取り出し、俺に手渡してくれた。

俺はその封を切ると、中から便箋の束を取り出し、雑多なものが置かれた机の上に、それを広げた。

終章 木本剛志からの手紙

——そういうわけで、事件はここまで書いてきた様に、優柔不断な俺の心によっておかしな体裁となってしまうて、それに多くの人の勘違い、思い違いが合わさって、より複雑になっていったわけだ。その誤解に気付いて、真相を解き明かしてくれた翔斗は、まさに探偵って感じで、事実とても格好良かったよ。推理小説の探偵顔負けで、俺は犯人だっていうのに、翔斗の推理を聞いている最中、ひたすら感心し通しだったんだから。

……さて、これですよやく、話したいことは全部終わり。もし読んでくれたなら、どうもありがとね。こうして書いている内、気持ちの整理がついて、何だか胸がすつとしたよ。代わりに皆が暗い気分になってたら申し訳ないけどさ。

俺——いや、やっぱり僕の方が、僕にはびつたりかな？　こんな所まで書いてきて今更だけど。でも何だか、『早瀬有希』はただの偽名で、ただの演技に過ぎなかったのに、それが今は僕の一部になっている気がするんだ。皆から愛される、明るくてやんちゃな少年。それって実際、僕がこうありたいと思っていた性格の理想像だからね。僕はつまり、『早瀬有希』のおかげで、『早瀬有希』のように変われたわけだ。だから僕は、彼に感謝しないとイケないのかもしれない。いや、自分で自分に感謝するなんて変か。

おつといけない、書きたいことが多すぎたから、いつの間にか便箋が束になっちゃってるや。それじゃあこの辺で終わりにしておくかな。また皆から手紙が来れば、必ず返事を書くからね。文化祭が終わったら、演劇が成功したかどうかもう聞きたいな。ううん、知りたいことが多いのに、しばらく皆に会えないのは、本当に辛いよ。

でも、これが僕の罪だから、それはしっかり償います。そして、僕が皆の所に帰ることが出来た時。どうか皆、僕のことを温かく迎えてください。僕にとって皆は、かけがえの無い存在だから、出来れば皆にとつても、僕がかげがえの無い存在であつてほしいんだ。こんな僕には過ぎた望みなのかもしれない。けどどうか皆、僕のことを、忘れないで。

——そして春子ちゃん。こんな俺でいいのなら。僕は絶対にまた、君の所へ戻るから。その時はもう一度言わせてほしい。それから、答えを聞かせてほしい。だから、どうかそれまで、僕を待っていて。必ず、必ず僕は、戻ってくるから。

皆、ありがとう。僕は、皆に会えて本当に良かったよ。皆に会えて、短い間だけど一緒に過ごして、僕は昔の僕でなくなった。

笑い合つて、はしやぎあつて、協力し合つて。そうして皆と過ごした日々を、僕は絶対に、忘れない。

いつか再会したその時は、また七人で笑いあおう。

僕はその日が来るのを、心待ちにしてるから。

——早瀬有希こと、木本剛志より。

＊参考書籍…有栖川有栖『月光ゲーム』（創元推理文庫／1994年）より一部引用